

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

フランス語の名詞複数形に関する意味論研究

プヨ・バティスト

2017年度

目次

序論	1
第1章 文法における「複数性」概念の定義	7
1.1 「1」と「1<」の対立.....	8
1.1.1 Corbett (2000) における複数性概念の定義	8
1.1.2 複数対象の有限性.....	9
1.1.3 複数対象の現実性.....	10
1.1.4 複数対象の可算性.....	12
1.2 「1」と「2≤」の対立.....	16
1.2.1 複数対象のグループ性.....	16
1.2.2 数量単位としての複数対象.....	18
1.2.3 数量的唯一性のない複数対象.....	19
1.2.4 名詞の範疇の複数対象.....	22
第2章 名詞複数形における複数性概念の限界	24
2.1 不定名詞句単数形における単数性の再検討	24
2.1.1 数量的唯一性の不在.....	24
2.1.2 対象の不可算性.....	25
2.1.3 不定名詞句単数形の再分類.....	26
2.2 不定名詞句複数形における複数性の再検討	30
2.2.1 対象の不可算性再論.....	30

2.2.2	二種類の存在.....	34
2.2.3	不均質の指示カテゴリー.....	37
2.2.4	叙述レベルの機能.....	38
2.3	定名詞句複数形における複数性の限界.....	42
2.3.1	指示カテゴリーの多様性の意味.....	42
2.3.2	指示カテゴリーの定義化.....	44
第3章	名詞複数形における存在前提説の検討.....	47
3.1	問題提起.....	47
3.2	言語学における非存在.....	48
3.2.1	非存在に対する言語学的観点からの考察.....	48
3.2.2	非存在に対する指示的観点からの考察.....	52
3.3	定名詞句における現実性の再検討.....	56
3.3.1	直示的用法の定名詞句における間接指示性.....	56
3.3.2	述語の肯否における制約.....	59
3.3.3	定名詞句における直示性における叙述レベルの機能.....	62
3.3.4	定名詞句のプロトタイプの用法.....	65
3.4	定名詞句複数形における「普遍的一般化」の多様性の意味.....	68
3.4.1	指示対象の一般化の意味.....	68
3.4.2	不均質の一般化.....	70
第4章	総称文における名詞単数形と複数形との使い分けの検討.....	74
4.1	問題提起.....	74

4.2	述語の例外性	76
4.3	特定の用法の定名詞句における定義機能	78
4.3.1	対比的定義	78
4.3.2	評価的定義	80
4.4	総称的用法の定名詞句における定義機能	81
4.4.1	対比的総称化	82
4.4.2	評価的総称化	88
第5章 名詞複数形における事例性の役割		91
5.1	問題提起	91
5.2	述語 <i>sentir</i> の自他における単数形と複数形との使い分けの位置づけ	93
5.2.1	述語項構造の違い	93
5.2.2	内面化・外面化における定名詞句単数形・複数形の関連付け	95
5.3	薔薇の事例性	97
5.3.1	二種類のにおい	97
5.3.2	補語定名詞句の指示的自立性別	98
5.4	嗅覚表現としての定名詞句単数形と複数形の再定義	102
5.4.1	定名詞句の単数形 <i>la rose</i> における「薔薇性」の概念的意味	102
5.4.2	定名詞句複数形 <i>les roses</i> における「プロトタイプの属性化」の多様性の意味	105
第6章 名詞複数形における意味的凝結化		110
6.1	問題提起	110
6.2	凝結表現における目的語不定名詞句単数形と複数形との使い分け	112

6.2.1	動詞相当語句における無冠詞述語名詞	112
6.2.2	動詞相当語句における不定名詞句複数形	114
6.2.3	凝結表現における不定名詞句複数形	115
6.3	凝結表現における目的語定名詞句単数形と複数形との使い分け	117
6.3.1	唯一の事物	118
6.3.2	部分関係をめぐる定名詞句単数形と複数形	119
6.3.3	空間関係をめぐる定名詞句単数形と複数形	121
6.3.4	定名詞句単数形における対比的非特定化	123
6.3.5	定名詞句単数形における部位関係の位置づけ	125
6.3.6	定名詞句複数形における「プロトタイプ」の非特定の意味	127
第7章 不可算名詞の複数形		129
7.1	問題提起	129
7.2	不可算名詞の複数形に関する先行研究	130
7.2.1	語義的複数形と文法的複数形との区別	130
7.2.2	単数形との使い分けとしての不可算複数形に関する観点	133
7.2.2.1	巨大さ、圧倒的なイメージという観点	134
7.2.2.2	日常的経験という観点	136
7.3	不可算名詞の複数形の言語学的位置づけ	137
7.3.1	不可算複数形と単複の概念との非共起	137
7.3.2	不可算名詞の複数形の外延	139
7.4	不可算名詞の単数形と複数形の考え方	143
7.4.1	不可算名詞の単数形	144

7.4.2	不可算名詞の複数形.....	145
7.5	不可算名詞の指示対象の再検討.....	147
7.5.1	不可算名詞の特定の用法の再定義.....	147
7.5.2	不可算名詞の存在場所と存在様態.....	149
7.5.3	下位カテゴリーの概念の定義.....	151
7.6	存在様態の変化による多様化.....	153
7.6.1	一つの種類、性質などである不可算名詞の単数形.....	153
7.6.2	多様な種類、性質などから形成される不可算名詞の複数形.....	155
7.7	日本語の畳語複数形.....	157
7.7.1	不特定複数性.....	158
7.7.2	上位概念の不可欠性.....	160
7.7.3	種類、性質などの多様化.....	163
7.7.4	個別性の位置づけをめぐるフランス語と日本語との差異.....	166
	結論.....	169
	参考文献.....	172

序論

本論文の目的は、現代フランス語の名詞複数形¹のもつ意味と機能を考察することである。特にフランス語の名詞複数形の扱いは必ずしも言及対象の数量化 (quantification) を表すとは限らないことに注目し、最終的にフランス語の名詞複数形の表す pluralité の意味は、言及対象の可算性 (dénombrabilité référentielle) を前提とする「複数性」 (= 外延) ではなく、むしろ言及対象の可算性を前提としない「多様性」 (= 内包) である²、という新たな見方を提示する。

本研究を始めた切っ掛けは、日本の大学のフランス語担当教員として日本人の学生から受けた質問である。「先生、J'aime les chats. (猫が好きだ。) はなぜ複数形に置かれるのですか。」という質問に答えることができなかつたのである。当時は日本人学習者にとって何故単数形と複数形との使い分けが難しいのかよく理解できなかったが、後になって、学習者の直面している以下の二点に気付いたことで、その問いの根本を理解したように思われた。

¹ 本論文では、「名詞複数形」 (pluriel nominal) は名詞の複数形とし、単数形をもたない toilettes (トイレ) や travaux (作業) などのような「複数形名詞」 (nom au pluriel) から区別する。

² フランス語では、pluralité という言葉は grand nombre (複数性) あるいは multiplicité (多様性) という二つの意味をとる。本研究が示すように、「複数性」の意味は、数量的意味として可算名詞の場合においてしか発生できないのに対して、「多様性」の意味は可算名詞や不可算名詞のいずれの場合においても発生できる性質の意味である。

(i) 第一に、日本の大学のフランス語教育において名詞複数形を生徒に初めて導入するときには、一般に名詞複数形の作り方と、「複数性」という意味概念の標示を区別することがない。すなわち形態論上の問題と意味論上の問題を混同し、「複数形は複数性を表す」と説明するのである。これは一般に行われていることであり、例えば『現代フランス文法』（1955: 63）においては、以下のような説明が見られる。

フランス語の名詞は単数 (singulier) と複数 (pluriel) とに用いられる。単数名詞を複数にするには、原則として単数名詞の語尾に s を加える。しかし、その s は発音されない。

le père (父) > les pères

la mère (母) > les mères

un homme (男) > des hommes

une femme (女) > des femmes (『現代フランス文法』 1955: 63)

ここでは、名詞複数形は（名詞単数形の語尾に s が加えられた）形態単位としての形態論的な振る舞いと、（複数性を表すと思われる）意味単位としての意味論的な振る舞いを区別しない「複数名詞」³として考えられている。

(ii) 第二に、中学校から生徒の受けてきた日本語文法教育においては、一般に複数性の標示形式として「～たち」などという接尾辞が挙げられている。最近「～たち」などは人間を表さない名詞にも付くことができるようになってきたが⁴、ここで

³ 『現代フランス文法』（1955: 63）において用いられている名称は「単数名詞」のみであるが、「単数名詞」があれば当然「複数名詞」もあることが言える。

問題としている *J'aime les chats.* の場合は、名詞複数形 *chats* の一番自然な和訳は「？猫たちが好きだ。」ではなく⁵、複数性標示のない「猫が好きだ。」だろう。

これらの二点から、*J'aime les chats.* というような名詞複数形を初めて目にした生徒が「日本語では「猫たち」とは言えないのに、何故フランス語では「猫」を複数形にすることができるのですか。」という疑問を抱くのは当然だろう。本論文は、この問いに答えるべく取り組んだ文法数に関する研究である。

本論文では、フランス語学習の場面で直面したその問いに答えるために、言語学的アプローチをとり、フランス語の名詞複数形に関する先行研究の限界を示しつつ、フランス語の名詞複数形の用法における複数性の意味の位置付けを再検討する。本論文は序論と結論を除き、七章から構成されている。その構成は以下の四点によって大まかに説明することができる。

(i) 第 1 章では、名詞複数形の意味と用法の説明として普段挙げられる「複数性」概念は、可算⁶ベースの数量的概念であることを指摘する。

⁴その点について、佐竹 (2002: 170) は以下のように述べている。「次に、接尾辞を使った複数標示だが、「～たち」「～ら」「～ども」が代表的なものである。このうち、「～たち」は、人間を表す名詞にのみ付くのが原則であった。ところが、この四半世紀ほどの間に、「ペットたち」「バッグたち」「アクセサリーの小物たち」のように、人間以外の生物や無生物についてまでも使うことが見られるようになり、現在ではそれが一般的になりつつある。」(佐竹 2002: 170)

⁵上述の *J'aime les chats.* の和訳として「猫たちが好きだ。」は可能ではないわけではない。例えばそれは、話者が「猫」に対して愛情がある文脈などの場合である。

(ii) 第2章では、これに対し、実際にはフランス語においては不可算の名詞複数形の例があるという矛盾に着目する。本論文の目的は、この矛盾をどのように理解すべきか、問いかけることを通じて、フランス語における不可算の名詞複数形の例を検討し、それらの名詞複数形の意味と用法を再分類することである。

(iii) そのために、第3章以降は、基本的に数え難い例である⁷非特定の解釈の名詞複数形に焦点を当てる。まず、第3章と第4章では、総称文における主語名詞複数形を検討する。続く第5章と第6章では、非特定の意味をとる目的語名詞複数形についても観察と分析を行う。

⁶本論文で取り扱う「可算」と「不可算」との区別は必ずしも「可算名詞」と「不可算名詞」との区別に相当するわけではない。「可算」とは 1 homme, 2 hommes, 3 hommes (一人の男性、二人の男性、三人の男性) のように、数字との共起によって言及対象の計算が可能な扱いの場合である。これに対して、総称文 *Ma mère m'a toujours dit qu'un homme devait tenir la porte à une femme.* (男性は女性のためにドアを開けるべきだとお母さんにずっと言われた。) における可算名詞 homme (男性) は数字 1, 2, 3 などと共起することが不可能であることで、今回の homme の扱いは「不可算」だと考えられる。

⁷*Dans l'Islam, les hommes peuvent avoir deux femmes.* (イスラム教において男性は二人の妻を持つことができる。) のように非特定の解釈の場合においても数字との共起が可能であるが、それは無冠詞の名詞複数形の場合のみである。非特定の解釈の名詞複数形のそのような可算の扱いは、言及対象の計算が文中の題述 (rhème) である場合、すなわち *dénombrement* のシチュエーションに限定された扱いである。

(iv) 最後に、第 2 章～第 6 章における分析ではフランス語における名詞複数形は可算ベースで考えるべきではないことが明らかになってきたことを踏まえ、第 7 章では、不可算名詞の複数形の分析から、その意味を改めて確かめる。

本研究から導き出される結論は、以下の二点である。

(i) 一つは、従来可算名詞の範囲の中においてしか考えられなかったフランス語の名詞複数形を可算ベースで考えるべきではない、という新たな見方である。言い換えると、フランス語の名詞複数形の意味は、可算性を前提とする「複数性」という数量的意味ではなく、むしろ可算性と不可算性との区別と無関係である「多様性」という性質的意味にあるからである。

(ii) 二点目としては、フランス語の名詞複数形の示す「多様性」の意味は、名詞の範囲だけではなく、名詞に加えて、冠詞と述語動詞の振る舞いも含む叙述レベル (niveau prédicatif) において成立する、という点である。例えば、上で見た *J'aime les chats.* などのようなフランス語の名詞複数形は、可算物としての「猫」の複数化を示しているのではなく、定冠詞 *les* および述語動詞 *aimer* (好きである) との厳密な関連で捉えるべき「猫」が含む不可算の性質の多様化を条件としてなされている⁸。

最終的には日本人フランス語学習者に名詞複数形の文法事項をより効果的に教えるためには、フランス語文法の分類の側面において以下の三点を考え直す必要があることが明らかとなる。

(i) 第一点は、意味カテゴリーの分類において、フランス語の名詞複数形を言及対象の可算性を前提とする「文法数」 (*nombre grammatical*) の意味カテゴリーから切り離すことである。

⁸ 第 5 章を参照のこと。

(ii) 第二点は、品詞の分類において、従来の文法学者によって名詞カテゴリーとして定義されてきたフランス語の複数形の説明において、新たに叙述の役割という視点を導入することである。

(iii) 第三点は、フランス語の名詞複数形の再定義において、名詞、冠詞、述語動詞の相互性などを捉え直すことである。

第1章 文法における「複数性」概念の定義

序論において検討したフランス語の名詞複数形の学習の困難さを理解するためには、まずフランス語の名詞複数形に関する文法学者の従来の定義を再考しなければならない。既に述べてきたように、一般的には「複数形は複数性を表す」と思われている。しかし『現代フランス文法』（1955: 63）における「複数名詞」⁹という日本語の名称が示すように、「複数」という文法学の用語には、「複数形」および「複数名詞」といった形態論的側面と、「複数性」という意味論的側面が混同されてしまっている。そのような混同によって、文法学者の一般常識（vulgate）である「複数形は複数性を表す」という考え方が成立している。

本章においては、文法における複数性概念の一般的定義を紹介する。文法数に関する様々な研究の中で、主に Gleason（1955）、Dubois et al.（1973）、Léon et al.（1989）、Corbett（2000）の研究における複数性概念の定義を比較しながら検討することを通じて、以下の二点をそこから導き出される結論として挙げたい。

(i) 第一点は、文法における複数性概念は、可算性を基準とする概念である、というものである。

(ii) 第二点は、複数性概念における可算性の位置付けによって、複数性概念は数量的概念として成立する、というものである。

⁹ 『現代フランス文法』（1955: 63）において登場する「複数名詞」の名称は「複数形にされた名詞」と「複数概念を表す名詞」とを区別しない名称であると言える。

1.1 「1」 と 「1<」 の対立

1.1.1 Corbett (2000) における複数性概念の定義

まず、Corbett (2000: 20) における複数性概念の定義の紹介から始めたい¹⁰。

Corbett (2000: 20) は、複数と言える対象は “more than one real world entity” (一つより多くの現実世界にある存在物) として定義している。Corbett (2000: 20) の述べる複数性概念の定義においては、従来の文法学者の共通している複数性概念の一般常識とも言える以下の二点が登場している。

(i) 一点目は、more than one (一より多く) が示すように、複数性概念は、「1」を基準とした「1」 (one) か「1<」 (more than one) の対立を暗示する概念である、という点である。

(ii) 二点目は、(more than one) real world entity が示すように、複数性概念における「1<」は、数学における抽象的値 (valeur mathématique abstraite) ではなく、現実世界の叙述に適用できる指示的値 (valeur référentielle) である、という点である。

本節では、まず、Corbett (2000: 20) における more than one と real world entity の関連付けに着目してみると、複数性概念は、可算ベースの概念として考えるべきで

¹⁰ 本論文の研究対象はフランス語の名詞複数形であるが、従来、文法における複数性概念は、各言語の特徴を問わず一般概念として定義されてきた。したがって、文法における複数性概念に関する本章は、世界中の 250 言語における文法数の比較と類型である Corbett (2000) の研究を検討することから始まる。本論文の目的は、フランス語の名詞複数形の特定のケースへの複数性概念の不適用を指摘することである。

あることを説明する。そして、次節では、複数性概念における可算性の位置付けによって、複数性概念は、数量的概念として成立することを明らかにする。

1.1.2 複数対象の有限性

Corbett (2000: 20) が示すように、複数性概念には *more than one* という意味が含まれている。しかし、それは、世界¹¹ から切り離れた「1<」 (*more than one*) という数学的意味のみではなく、世界を対象とした *more than one entity*¹² である。Corbett (2000: 20) における *more than one real world entity* に関しては、以下の二点を挙げることができる。

(i) まず、*one* と *one entity* の違いは言及対象の存在にあり、*one* の場合、言及対象は存在しない¹³ 数学的値である一方、*one entity* (一つの存在物) の場合、言及対象がある、という点である。

(ii) 次に、ただ *one entity* (一つの存在物) ではなく、*more than one entity* (一つより多くの存在物) であるということで、Corbett (2000: 20) において登場する存在物

¹¹ 本論文では、「世界」は事物の存在している範囲 (*tout ce qui existe*) とし、「存在」の中で、現実世界の事物を示す「現実存在」と仮想世界の事物を示す「仮想存在」とを区別する。

¹² 現実世界への位置付けを示す *real world (entity)* については、後述する。

¹³ 「存在しない」とは、数学的概念 (*concept mathématique*) として世界の中に何も指し示すことができないという意味である。

は、「物質」のような無限の存在物ではなく、むしろ超えることのできる有限の存在物 (*entité finie*)、すなわち輪郭／限界を持つ存在物だと分かる¹⁴、という点である。

1.1.3 複数対象の現実性

Corbett (2000: 20) が示すように、複数性概念はただ *more than one entity* (一つより多くの存在物) ではなく、*more than one real world entity* (一つより多くの現実世界にある存在物) である。そこで、複数と言える対象は、*intelligence* (知性) のように目に見えない定義上の性質的な輪郭／限界¹⁵ の存在物ではなく、むしろ *cerveau* (脳) のように目に見える現実上の具体的な輪郭／限界の存在物だと言える。

抽象的な輪郭と具体的な輪郭の違いは、「言語内」と「言語外」の違いに還元できる。Riegel (1985) は言語内のレベルの対象と言語外のレベルの対象を区別し、*intelligence* と *cerveau* に関する以下の二文を挙げている。

(1-1) a. *Le cerveau est le siège de l'intelligence.* (Riegel 1985: 57-58)

(脳は知性の座である。)

(1-1) b. *Le siège de l'intelligence est le cerveau.* (ibid.)

(知性の座は脳である。)

¹⁴ 超えることのできる存在物は、必ず輪郭／限界のある存在物でなければならない。

¹⁵ これに関しては André Gide による「知性」の以下の定義を挙げることができる。

« L'intelligence, c'est la faculté d'adaptation. » (André Gide, *Journal 1889-1939*) (知性は、適応性だ。)

またこの二文について Riegel (1985: 57-58) は以下のように論じている。

... si le substantif de l'expression définie *le cerveau* identifie directement et sans équivoque son référent codé, l'expression définie complexe *le siège de l'intelligence*, qui admet une gamme de référents possibles, est nécessairement conçue comme une propriété attribuée au référent identifié par la première expression. (Riegel 1985: 57-58)

(定表現 *le cerveau* の名詞は、そのコード化された指示対象を直接的に、あいまさを伴わずに、同定するのであるが、複合的な定表現 *le siège de l'intelligence* の方は、指示対象が複数個可能であるので、定表現 *le cerveau* は、同定する指示対象に付与される性質であると考えざるをえない。) (古川 1988: 24)

また、そのような区別について Kleiber (1981: 117) も以下の例文を挙げている。

(1-2) Le nombril est le centre de l'individu. (Kleiber 1981: 117)

(臍は人体の中心である。)

上記の例文における言語外と言語内との区別は以下のように説明されている。

On sait par là-même d'avance quel est le référent de *le nombril*, ce qui n'est pas le cas pour l'expression *le centre de l'individu*. Celle-ci au contraire peut avoir plusieurs référents possibles, c'est-à-dire plusieurs occurrences, comme le montrent la possibilité d'interroger avec *Quel* (cf. *Quel est le centre de l'individu?* opposé à **Quel est le*

nombril?) et celle de se faire accompagner de l'expression *quel qu'il soit* (cf. *Le centre de l'individu, quel qu'il soit, ...* opposé à **Le nombril, quel qu'il soit, ...*)

(Kleiber 1981: 117)

(le *nombril* の指示対象が何であるかは、予め分かっているが、*le centre de l'individu* という表現の場合はそうではない。この表現の場合は、複数個の指示対象、すなわちトークンが可能である。このことは、*Quel* をつかった質問が可能であること (**Quel est le nombril?* に対して、*Quel est le centre de l'individu?* が可能)、および *quel qu'il soit* という表現を従えうること (**Le nombril, quel qu'il soit, ...* に対して、*Le centre de l'individu, quel qu'il soit, ...* が可能) によってあきらかである。)

(古川 1988: 24)

以上のことから、*cerveau* (脳) や *nombril* (臍) などのような言語外の対象は、言語外世界に位置付けることができる *le cerveau de Pierre* (ピエールの脳) や *le nombril de Pierre* (ピエールの臍) のような一事例を直接に指し示すことができる対象であることが分かる。一事例を直接に指し示すこととは、一事例のケースの現実性が表している具体的な輪郭を持つことである。

1.1.4 複数対象の可算性

つまるところ、Corbett (2000: 20) における複数性概念の定義によれば、複数対象は、必ず言語外 (*real world entity*) の輪郭 (*more than one*) を持つ対象でなければならない。複数と言える対象は言語外の輪郭を持つ対象であることを確認するならば、

個体あるいは個物¹⁶の形をとることができない対象は複数性概念の対象外であることが当然の帰結となる。例えば、**eau**（水）のような場合は個体の意味を表し難い。**eau**の複数形**eaux**は、「複数の水」を意味しない。そのようなことを表したい場合は、例えば**conditionnées en plastique**（プラスチック包装された）を付加して、「ミネラルウォーター」の意味にする必要がある。

(1-3) **Des eaux conditionnées en plastique, en 1969, sont toujours bonnes à boire, nous ont affirmé les porte-parole de la société d'Evian.**

(Furukawa 1977: 163)

(1969年にプラスチック包装されたミネラルウォーターは今でもまだ飲めるとエビアン会社の代理人が主張した。)

(個体性のない) **eau**（水）と（個体性のある）**eaux conditionnées en plastique**（ミネラルウォーター）の違いは不可算名詞と可算名詞との違いである。Lucy (1992)が述べているように、「不可算名詞」の場合において個体性は名詞の意味に含まれないが、「可算名詞」は物体の形が個体として意味の中に含まれている。不可算名詞と可算名詞との区別は、以下の二つの段階によって成立している。

(i) まず、話し手が何らかの現実世界にある対象を、自分の経験から得た知識をもって、それを個体性のない「不可算物」（物質）あるいは個体性のある「可算物」（物体）として概念化するという認知プロセスがある。Martin (1989: 37-45)によると、存在論が不可算名詞と可算名詞の対立の基盤であり、言語における可算性は、

¹⁶ 「個体」も「個物」も哲学、中でもドイツ観念論の用語の日本語訳である。本論文では、「個体」と「個物」を区別せず、他と区別される一つ一つの存在物として扱う。

名詞が指示する事物自体の構造のレベルにおいて行われている存在論的問題だと言える。

La question sera celle du lieu de l'opposition « massif/comptable ». On se demandera si cette opposition trouve sa pertinence dans les choses elles-mêmes – auquel cas elle serait ontologique – ou bien si elle est une vision que la langue impose aux choses, une structuration a posteriori, réorganisatrice du monde, plus ou moins indépendante des propriétés que les choses présentent en elles-mêmes. Dans ce cas, il s'agira de savoir si les substantifs sont sous-catégorisables en langue ou s'ils acquièrent seulement le trait « massif » ou « comptable » dans l'usage discursif qui en est fait. [...] En résumé, l'ontologie est assurément à la source de l'opposition du massif et du comptable. Les langues qui la systématisent – c'est-à-dire qui l'intègrent à leur grammaire – le font en vue de la dénotation extensionnelle : c'est dans cette optique que les substantifs sont sous-catégorisables. Dans la dénotation « conceptuelle », l'opposition peut être déliée de ses attaches ontologiques: la structure des objets auxquels les substantifs réfèrent n'est plus alors en cause. (Martin 1989: 37-45)

(問題は「量塊」(mass) / 「可算」がどのレベルでの対立かという問題である。この対立が重要なのは事物自体においてなのだろうか。その場合は存在論的問題と言える。それともこの対立は、言語(ラング)が事物に課す「物の見方」なのだろうか。その場合は、事物を事後的に構造化するのであり、世界を再構成するのであり、事物自体からは多少離れた性質が問題となる。そうだとすると名詞は言語体系の下位カテゴリーなのだろうか。それとも名詞は、実際のディスクールの中で「量塊」「可算」といった意味特徴を獲得するのだろうか。

[...] つまるところ、存在論が量塊／可算の対立の基盤である。この対立を体系化し、文法化する諸言語は、外延的表示のために、この対立を使用するのである。このような観点から名詞は下位カテゴリー化される。それに対して「観念的」表示においては、量塊／可算の対立は存在論的關係とは関わらない。名詞が指示する対象の構造は、もはやこの対立は問題とならない。)

例えば Langacker (1987) は、可算と不可算との区別を認識レベルの問題とし、何らかの対象があったとして、それが一つ以上の部分に切り分けられるにも拘らず、出来上がったその対象の部分についてもまだその対象だと言うことができるのは不可算物の場合のみであると論じている。「猫」を例にして考えてみると、一匹の猫を二つの部分に切り分けてみると、もはやそれは「猫」だとは言えないことから「猫」は不可算ではないということである。

(ii) そして、「可算物」や「不可算物」を言語化する、すなわち可算物や不可算物を言及対象にする時は、名詞上の区別である可算名詞と不可算名詞との区別となっている。

つまるところ、Corbett (2000: 20) における複数性概念の定義のこれまでの検討が見せるように、*more than one real world entity* と言える対象は、必ず可算性のある対象でなければならない。複数性の意味の発生条件としての可算性については、Dubois et al. (1973: 339) による文法数の以下の定義を挙げることができる。

Le nombre est une catégorie grammaticale reposant sur la représentation des personnes, animaux ou objets, désignés par des noms, comme des entités dénombrables, susceptibles d'être isolées, comptées et réunies en groupes par opposition à la

représentation des objets comme des masses indivisibles. Le nombre oppose donc les noms susceptibles d'être comptés aux noms qui ne le sont pas : les noms comptables et les noms non-comptables. (Dubois et al. 1973: 339)

(数という文法範疇は、名詞で示される人物、動物ないし事物についての、個別に切離したり、数えたり、グループにまとめたりできる実体としての表示を基盤に成立する。この表示は、分別できない物質としての表示に対立する。数はそれゆえ、数えられる名詞と数えられない名詞、すなわち可算名詞と非可算名詞を対立させる。)

複数性概念における可算性の位置付けについてのこの考え方は、英語を対象とする Gleason (1955: 223) による「経験世界」と文法数の関連づけにおいて見られるだろう。

Probably the category of number has a more obvious and direct connection with demonstrable contrasts in the world of experience than any other inflectional category of English. (Gleason 1955: 179)

(文法数カテゴリーは、おそらく英語における形態的屈折の中で、経験世界においてももっとも明確で、直接的な可算・不可算の対立と関わるものである。)

1.2 「1」と「2≤」の対立

1.2.1 複数対象のグループ性

前節で見たように、Corbett (2000: 20) の述べる *more than one real world entity* における *entity* は、必ず (現実世界に位置付けることのできる) 個体の形をとり、したが

って複数性の意味は「一つより多くの個体」に還元できる。その考え方は、可算ベースである。そこで、可算物としての「一つの個体 (one real world entity)」の次 (more than one real world entity) は、必ず「二つの個体」になっていることから¹⁷、複数性概念における more than one (一より多く) の意味を two or more (二以上) として考えて良い。例えば Gleason (1955: 223) は、複数性の意味を two or more individuals (二つ以上の個体) として定義している。

Number is familiarly thought of as a contrast between one category indicating a single individual and another indicating two or more. These are traditionally designated singular and plural. These names are intended to suggest the “meanings” of these categories. (Gleason 1955: 223)

(一般に数は単独の個体を示すカテゴリーと二つあるいはそれ以上の個体を示すカテゴリーの対立として考えられている。伝統的にはこれらのカテゴリーを単数と複数と呼んでいる。単数と複数の名称はこれらのカテゴリーの「意味」を示している。)

more than one と two or more の違いは、「1」を基準とする (more than one) かそれとも「2」を基準とする (two or more) かという違いである。「2」に焦点が当てられる時はグループ/集合の意味が成り立つ。「 $2 = 1 + 1$ 」という数理論理が示しているように、two or more の意味は、単位 (ユニット) の累加から成るグループの意味で

¹⁷ Quirk et al. (1985: 297) は英語の複数性は more than one を示すが (one and half days 一日半)、それに対してフランス語における複数性は two or more を示すと指摘している。

あるということが出来る。数学における two or more ($2 \leq$) は数学的単位の累加から成る数学的集合 (groupe mathématique) である一方、複数性概念における two or more (individuals) は (一事例の指示対象を示す) 個体の累加から成る指示的集合 (groupe référentiel) であることから、複数性の意味が示す指示的グループは、同じ意味領域や概念領域の下で集合できる同様の個体¹⁸ から成る意味的グループだと言える。例えば Léon et al. (1989: 125) は複数性の意味を « au moins deux entités semblables » (二つ以上の同様の存在物) として定義している¹⁹。

1.2.2 数量単位としての複数対象

前節で見た複数性概念における個体性の位置付けによって、複数性の意味の示すグループは、個々に切り分けることのできるグループである。そのグループの中において登場する個体の形をとる複数対象については、以下の二点を挙げる事が出来る。

¹⁸ 例えば、異なる概念領域を示す fraise (苺) と banane (バナナ) を複数対象 (グループ) にするためには、fruit (果物) という共通の概念の下で集合を作るしかないのである。

¹⁹ Léon et al. (1989: 125) は以下のように述べている。« Le singulier sert à désigner une entité unique. Le pluriel désigne un groupe d'au moins deux entités semblables ». (Léon et al. 1989: 125) (単数性は唯一の存在物を示す一方、複数性は二つ以上の同様の存在物を示す。)

(i) 一方では、Corbett (2000: 20) における *more than one real world entity* (一つより多くの現実世界にある存在物) が示すように、可算物である。

(ii) 他方では、Léon et al. (1989: 125) における *au moins deux entités semblables* (二つ以上の同様の存在物) が示すように、同じカテゴリーの可算物である。

つまるところ、Corbett (2000: 20) と Léon et al. (1989: 125) における複数性概念の定義に依拠して考えると、複数対象は、数量単位 (*unité de mesure*) として成立する。「数量」の意味は、(1-4) における *beaucoup d'eau* (大量の水) のように切り分けることのできない「量」とは異なり、(1-5) における *deux livres* (二冊の本) のように「同じカテゴリーの可算物 (本) + 同じカテゴリーの可算物 (本)」のような意味となるのである。

(1-4) Il y a beaucoup d'eau dans la mer.

(海の中には大量の水がある。)

(1-5) Il y a deux livres sur la table.

(テーブルの上には二冊の本がある。)

1.2.3 数量的唯一性のない複数対象

(1-5) のように対象の数量が二つ以上の可算物の場合は「複数対象」である一方、(1-6) のように数量が一つの可算物の場合は「単数対象」である。

(1-6) Il y a un livre sur la table.

(テーブルの上には一冊の本がある。)

その区別は「単複」の一般的な理解である。一般に文法における複数性は「文法数」という体系の範囲の中に位置付けられており、文法数における複数性の意味は、単数性の意味との対立の中において現れる意味として定義されている²⁰。例えば Corbett (2000: 20) は世界中の 250 言語における文法数の比較と類型から単数性と複数性の対立（単複）を文法数の基本的意味とし²¹、各言語における文法数は単数性と複数性の対立に基づいていると述べている。

単複の対立をより詳細に検討してみると、単数性と複数性の対立は「数量的唯一性」（unicité quantitative）の有無に関する対立である。数量的唯一性は、文字通りに、

²⁰ Corbett (2000: 1-3) は文法数に関する一般常識として以下の五つの前提を述べている。“ (i) First assumption: number is just an opposition of singular versus plural. (ii) Second assumption: all relevant items (nouns, for instance) will mark number. (iii) Third assumption: items which do mark number will behave the same. (iv) Fourth assumption: number must be expressed. (v) Fifth assumption: number is a nominal category.” (Corbett 2000: 1-3) (前提 1: 文法数は単数性と複数性の単なる対立である。前提 2: 名詞などのような文法数に関わる語はすべて数を標示する。前提 3: 文法数の形式のある語の間においては文法数の一致が行われている。前提 4: 文法数の標示が必須である。前提 5: 文法数は名詞的範疇である。)

²¹ Corbett (2000: 20) は、以下のように述べている。“The singular-plural opposition is the primary one, on which all systems are built”. (Corbett 2000: 20) (単数性と複数性の対立は文法数の基本的意味である。各言語における文法数は単数性と複数性の対立に基づいている。) しかし、その次は、単複以外は、Corbett (2000: 21-30) は文法数の潜在的な意味として the dual (両数性) や the trial (三数性) や the paucal (小数性) や the quadral (四数性) や the greater plural (大数性) を述べている。

数量がただ一つ（唯一）に還元されたことを意味し、ここに現れる「一」は 1, 2, 3 などのような数学的値ではなく、むしろ単位（ユニット）の意味をもつものである。このように、単数性におかれる対象は「唯一」の形をとる数量の対象であるのに対して、複数性におかれる対象は「唯一ではない」の形をとる数量の対象である。例えば Dubois et al. (1973: 339) における « un objet individualisé isolé »²²（個別化される単独の事物）または既に紹介した Gleason (1955: 223) における “single individual”（単独の個体）や Léon et al. (1989: 125) における « une entité unique »（唯一の存在物）が示すように、単数対象は数量的唯一性のある対象だと考えられている。具体的には、単複の一般的な理解によって、(1-7a) おける単数形名詞 *fille*（娘）の対象は唯一の娘と理解される一方、(1-7b) における複数形名詞 *filles* の対象は（唯一ではなくなる）娘の累加から成る対象とされている。

(1-7) a. J'ai une fille.

（私は娘が一人いる。）

(1-7) b. J'ai deux filles.

（私は娘が二人いる。）

²² Dubois et al. (1973: 339) は以下のように述べている。« A l'intérieur des noms comptables, le nombre oppose la représentation d'un « objet » individualisé isolé (singularité) , à la représentation de plus d'un objet individualisé (pluralité) ». (Dubois et al. 1973: 339)（可算名詞の内部で、数は個別化される単独の《事物》の表示すなわち単数性と、個別化される二つ以上の事物の表示すなわち複数性との対立をもつ。）

1.2.4 名詞の範疇の複数対象

上のような単複の考え方によって、複数性の意味は数量的意味であると捉えられてきた。その結果、一般に複数性の数量的意味は名詞の範囲の中においてしか発生しないものである。例えば (1-8) を例にしてみると、名詞複数形 **profs** や動詞複数形 **ont manifesté** のいずれも複数形であるが、その文において複数であるのは動詞 **manifester** (デモする) ではなく、名詞 **prof** (教職員) である。フランス語のその例から考えてみると、動詞の複数形でも名詞のレベルにおいて考えるべきだということが言える。

(1-8) Des profs ont manifesté devant chez moi ce matin.

(今朝、家の前で教職員がデモをやった。)

また、(1-8) などのように出来事の回数が複数の場合においても、名詞とは異なり、動詞は複数形をとらない。このことから、フランス語における名詞また動詞の複数形の言語学的振る舞いはまず名詞の複数性にあると考えられる。複数回の通話を表すためには、動詞を複数性に置くのではなく、動詞句 **appeler trois fois** (三回電話する) を名詞化 **trois appels** (三回の通話) しなければならない。このように、Corbett (2000: 1-3) の述べてきた文法数の第 5 前提が示すように、品詞の観点から見ると、複数性は名詞のカテゴリーとして分類されてきた。

(1-9) a. Une personne a appelé trois fois ce matin.

(今朝、ある人が三回電話してきた。)

(1-9) b. Il y a eu trois appels ce matin.

(今朝、三回の通話が来た。)

本章では、文法における複数性概念の一般的定義を紹介した。そこから導き出される結論として挙げられるのは、まず、複数性概念は数量的概念である、という点である。そして、その考え方に従うと、複数対象は、必ず可算の名詞でなければならない。次章からは、研究の対象をフランス語のケースに絞り、フランス語の名詞複数形の実際的な振る舞いにおける複数性の意味の位置づけを批判的に検討する。そのために、本章で論じた「複数性」概念に深く関与している「可算性」という点をめぐって、フランス語の名詞複数形の用法における可算性について観察と分析を行う。

第2章 名詞複数形における複数性概念の限界

2.1 不定名詞句単数形における単数性の再検討

2.1.1 数量的唯一性の不在

前章が示したように、一般にフランス語における名詞複数形と名詞単数形の扱いは、数量的唯一性の有無をめぐる扱いとされている。このように、（不可算名詞の場合を除いて）名詞単数形の対象は唯一つの個体だと考えられている。名詞単数形の用法における数量的唯一性の位置づけは、例えば (2-1) などにおける形容詞 *seul*（唯一の）と名詞単数形 *oeuf*（卵）の共起において明白である。その場合は、名詞単数形 *oeuf* は明らかに「唯一の個体」という解釈をとる。

(2-1) *Versez un seul oeuf dans la casserole.*

(卵を一つだけ鍋に入れなさい。)

しかし、実際には必ずしもそうではない。例えば (2-2) を考えてみると、形容詞 *seul* と名詞単数形の共起が不可能であることが観察される。このことから、名詞単数形は、数量的唯一性を表すとは限らない。

(2-2) a. *On dirait qu'il y a un homme dans la maison. Appelle la police.*

(誰かが家の中に入ってきたみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-2) b. * On dirait qu'il y a un seul homme dans la maison. Appelle la police.

(家の中に入ってきた一人だけの人がいるみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-1)、(2-2a) などでは、同じように名詞単数形が用いられるにも拘らず、名詞単数形の対象の数量的な振る舞いには以下のような違いが見られる。一方では、(2-1) における名詞単数形 *œuf* (卵) の数量は特定であり、一個の卵に還元されていると解釈できる。他方では、(2-2a) における名詞単数形 *homme* (人) の現実的な数量 (*quantité effective*) は不特定のままであり、家の中に入ってきた泥棒は一人なのかそれとも二人以上なのかは不明である。また次の (2-3) というようなコンテキストの場合も、私の犬を殺した人が一人なのか二人以上なのかは不明である。

(2-3) a. Un homme a tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'il se dénonce !

(寝ている間に誰かが私の犬を殺した。自首しろ！)

(2-3) b. * Un seul homme a tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'il se dénonce !

(寝ている間に一人だけの人私の犬を殺した。自首しろ！)

2.1.2 対象の不可算性

第 1 章で示したように、名詞単数形と複数形との使い分けは、一般には一つか二つ以上かという数量的唯一性の対立をめぐる使い分けと考えられてきた。しかし、前節で観察した文では、名詞単数形の数量は不特定であって、一つか二つ以上かという対立では捉えられない。例えば (2-3a) は、犬を殺した犯人が一人でも二人で

も私の犬を殺した人がいるということを示していることから、犯人の人数に関する数量的な情報は不要である。(2-2a)、(2-3a)のような文は、対象の存在を問題としている存在文²³であり、(2-2a)、(2-3a)の *un homme* の表している「一人」は対象の現実的な数量ではなく、対象の存在の最低値 (*valeur minimale d'existence*) としての「一人」を示しているのである。というのは、強盗、犬殺しが実現できるためには、最低限一人(の泥棒、犯人)が必要だ、ということである。したがって、対象の存在の最低値として捉えるべき *un homme* を累加すること不自然になる。

(2-2) c. ?*On dirait qu'il y a deux hommes dans la maison. Appelle la police.*

(家の中に入ってきた二人の人がいるみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-3) c. ?*Deux hommes ont tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'ils se dénoncent !*

(寝ている間に私の犬を殺した二人の人がいる。自首しろ!)

2.1.3 不定名詞句単数形の再分類

Wilmet (1983: 19) は不定名詞句の単数形の意味において互いに相反するものである二つの用法 (*deux acceptions extrêmes*) を区別している。一つは総称的用法 (*acception générique*) の不定名詞句である。例えば、(2-4a) のような場合におけ

²³ (2-3a) は *Il y a un homme qui a tué mon chien pendant mon sommeil.* というように存在表現 *il y a* に言い換えることができることで、(2-2a) と同じように (2-3a) も存在文とする。

る不定名詞句 *un enfant* は、子供ならどんな子供でもよく、あらゆる子供を意味している。それに対して、もう一つは個性的用法 (*acception monérique*) の不定名詞句であり、例えば (2-5a) のような場合における不定名詞句 *un homme* は一人の特定の個人を意味している。

(2-4) a. *Un enfant est l'ouvrage de sa mère.* (Wilmet 1983: 19)

(子供は母の作品だ。)

(2-5) a. *Un homme descendit de la torpédo.* (ibid.)

(オープンカーから一人の男が降りた。)

しかし、(2-2a)、(2-3a) における *un homme* は累加できる「一人」ではなく、累加できない存在としての「一人」である。そこで、対象の可算性の不可をめぐって Wilmet (1983: 19) の述べている個性的用法の不定名詞句単数形の解釈には二通りありと考えるべきである。

(i) 一点目は、単数性を表す不定名詞句単数形の場合である。(2-5) の場合においては (2-5b) のように文の意味を変えずに *seul* を用いることができる。

(2-4) b. **Un seul enfant est l'ouvrage de sa mère.*

(一人だけの子供は母の作品だ。)

(2-5) b. *Un seul homme descendit de la torpédo.*

(オープンカーから一人の男だけが降りた。)

この場合 *un homme* は数量的唯一性のある *un seul homme* (一人だけの男) に還元できる。したがって、*un homme* は最低限の数値 1 として捉えるべきであり、この場合は、(2-5c) のように *homme* (男) を累加することがができる。

(2-5) c. *Deux hommes descendirent de la torpédo.*

(オープンカーから二人の男が降りた。)

(ii) 二点目は、単数性を表さない不定名詞句単数形の場合である。(2-5a) に対して、(2-2a) と (2-3a) の存在文の場合においては *seul* を用いることができない。「在るか、無いか」を問題とする存在文においては *un homme* の対象はアイデンティティのない不特定の人であり、それらの存在文における一番自然な等価表現としては登場人物のプロフィールに言及しない *quelqu'un* (誰か) を挙げる事ができる。

(2-2) d. *On dirait qu'il y a quelqu'un dans la maison. Appelle la police.*

(誰かが家の中に入ってきたみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-3) d. *Quelqu'un a tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'il se dénonce !*

(寝ている間に誰かが私の犬を殺した。自首しろ！)

また、以下のような例についても同じ説明ができる。例えば、(2-6a) における *une* は数値「1」の意味をとることができない *quelque* (何か特定なもの) と同じである。

(2-6) a. *J'ai un truc à te dire concernant ton comportement.*

(あなたの行動について言いたいことがある。)

(2-6) b. ?Je n'ai qu'un seul truc à te dire concernant ton comportement.

(あなたの行動について言いたい一つだけのことがある。)

(2-6) c. J'ai quelque chose à te dire concernant ton comportement.

(あなたの行動について何か言いたいことがある。)

今回の場合も言及対象の数量を表し難い。deux ou trois trucs à te dire のように名詞と数字が共起することは可能であるが、truc à te dire (あなたに言いたいこと) の計算より今回の deux ou trois (一つか二つ) が示すのはむしろ truc à te dire の数量の曖昧さである。(相手の行動に対する文句として言い難いものである) truc à te dire の数量を曖昧にする deux ou trois のこのような使用は緩和表現としての使用だと考えている。

(2-6) d. J'ai deux ou trois trucs à te dire concernant ton comportement.

(あなたの行動について言いたい一つか二つのことがある。)

同じように、依頼の文脈においては、マナーコードの制約によって、相手への依頼事を数え難い。したがって、上述の deux ou trois あるいは un petit というような緩和表現の使用が優先される。

(2-7) a. J'aurais besoin d'un conseil.

(一つ教えていただきたいことがあるのですが。)

(2-7) b. ?J'aurais besoin de trois conseils.

(三つ教えていただきたいことがあるのですが。)

(2-7) c. J'aurais besoin de deux ou trois conseils.

(一つか二つ教えていただきたいことがあるのですが。)

(2-7) d. J'aurais besoin d'un petit conseil.

(ちょっと一つ教えていただきたいことがあるのですが。)

2.2 不定名詞句複数形における複数性の再検討

2.2.1 対象の不可算性再論

そこで、(2-2a) と (2-3a) のような不定名詞句単数形が単数性を表さないのであれば、(一般に単数対象の複数化として定義されている) 不定名詞句複数形は、複数性の意味を表すことができないだろう。その問いへの答えとして、まず、(2-2a) と (2-3a) における不定冠詞単数形 *un* と数値「1」を表す *seul* (唯一の) の非共起の場合と同じように、フランス語では不定冠詞複数形 *des* の後ろには数字を用いることができないことを挙げたい (**des deux*)。そして、上で検討した存在文における不定名詞句単数形を複数形にしてみると、(*des hommes* と同じ意味で) 数えることができない複数形名詞 *gens* (**deux gens*) を用いることになる。

(2-2) d. On dirait qu'il y a quelqu'un dans la maison. Appelle la police. (再掲)

(2-2) e. On dirait qu'il y a des hommes / des gens dans la maison. Appelle la police.

(家の中に入ってきた人がいるみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-3) d. Quelqu'un a tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'il se dénonce! (再掲)

(2-3) e. Des hommes / des gens ont tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'ils se dénoncent !

(寝ている間に私の犬を殺した人がいる。自首しろ！)

また、以上の例と同じように、以下の例文においても数字または不定形容詞 *plusieurs* (いくつもの) を用いて複数形不定名詞句の対象の数量を表すことはできない。

(2-8) a. Vous vivez seuls ou avec des enfants ?

(二人暮らしですか？それとも子供がいますか？)

(2-8) b. *Vous vivez seuls ou avec deux enfants ?

(二人暮らしですか？それとも子供が二人いますか？)

(2-8) c. *Vous vivez seuls ou avec plusieurs enfants ?

(二人暮らしですか？それとも何人も子供がいますか？)

(2-9) a. Mon exposé est terminé. Avez-vous des questions ?

(発表は以上です。質問がありますか？)

(2-9) b. *Mon exposé est terminé. Avez-vous deux questions ?

(発表は以上です。質問が二つありますか？)

(2-9) c. ? Mon exposé est terminé. Avez-vous plusieurs questions ?

(発表は以上です。いくつも質問がありますか？)

(2-10) a. J'espère que tu t'es fait des amis à l'école.

(学校で友達できたらいいな。)

(2-10) b.*J'espère que tu t'es fait deux amis à l'école.

(学校で友達二人できたらいいな。)

(2-10) c.?J'espère que tu t'es fait plusieurs amis à l'école.

(学校で何人もの友達ができたらいいな。)

(2-11) a. Est-il possible de voir des pandas au zoo de Ueno ?

(上野動物園にはパンダが見える?)

(2-11) b.*Est-il possible de voir deux pandas au zoo de Ueno ?

(上野動物園には二匹のパンダが見える?)

(2-11) c.? Est-il possible de voir plusieurs pandas au zoo de Ueno ?

(上野動物園には何匹ものパンダが見える?)

(2-12) a. J'aime manger des glaces en plein hiver.

(真冬にアイスクリームを食べるのが好きだ。)

(2-12) b.*J'aime manger deux glaces en plein hiver.

(真冬にアイスクリーム二つ食べるのが好きだ。)

(2-12) c.*J'aime manger plusieurs glaces en plein hiver.

(真冬にアイスクリームをいくつも食べるのが好きだ。)

つまるところ、以上の名詞複数形 *enfants* (子供) や *questions* (質問) や *amis* (友達) や *pandas* (パンダ) や *glaces* (アイスクリーム) などは、普通は可算物として

用いられているが、不定名詞句複数形の場合においては不可算物として現れる。このことから、不定冠詞複数形 **des** は、可算名詞複数形の部分冠詞のように用いていると言えるのだろう。不定冠詞複数形と部分冠詞との関連について小田（2012: 16-17）はイタリア語の例を援用しつつ以下のように述べている。

部分冠詞は、フランス語やイタリア語などに特徴的な冠詞である。フランス語とイタリア語には、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の三種類の冠詞がある。現在、多くのフランス語の文法書では、フランス語の部分冠詞に単数と複数との区別を設けず（つまりフランス語の部分冠詞には単数しかない）、不定冠詞に単数と複数との区別を設ける。それに対し、イタリア語の文法書では、部分冠詞に単数と複数との区別が存在し、また不定冠詞には単数の形しか存在しない。イタリア語の部分冠詞に単数と複数があるのは、その形態がいずれも「部分を表す前置詞 **di** + 定冠詞」に由来するためである。フランス語の部分冠詞 **du/de la** と不定冠詞複数 **des** (= **de + les**) は、イタリア語の部分冠詞と同じく、その形態は歴史的には「部分を表す前置詞+定冠詞」に由来する。現在の多くのフランス語の文法書が部分冠詞に単数のみを設けるのは「数えられないものを使う（だから単数と複数を区別できない）」という性質を考慮してのことである。数えられない名詞に使われるイタリア語の部分冠詞単数はフランス語の部分冠詞に相当し、数えられる複数名詞に使われるイタリア語の部分冠詞はフランス語の不定冠詞複数に相当する。 (小田 2012: 16-17)

2.2.2 二種類の存在

しかし、(2-2b)、(2-3b)などが不可能であることが示しているように、不定冠詞単数形でも数えられない場合もある。そこで、以下のような疑問点を挙げることができる。不定名詞句におけるそのような不可算化が行われているのは名詞単数形の場合、あるいは名詞複数形の場合であるのは何故だろうか。不定名詞句の単数形と複数形との使い分けにおける意味の違いは、本章の最初に紹介してきた存在文の和訳の違いにおいて明白である。一方では、(2-2a)と(2-3a)に現れる不定名詞句単数形 *un homme* の和訳は「誰か」である。

(2-2) a. *On dirait qu'il y a un homme dans la maison. Appelle la police.* (再掲)

(誰かが家の中に入ってきたみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-3) a. *Un homme a tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'il se dénonce!* (再掲)

(寝ている間に誰かが私の犬を殺した。自首しろ!)

他方では、(2-2e)、(2-3e)のように不定名詞句複数形にしてみると、*des hommes* の和訳は「誰か」ではなく「人」となる。

(2-2) e. *On dirait qu'il y a des hommes dans la maison. Appelle la police.* (再掲)

(家の中に入ってきた人がいるみたいだ。警察を呼んで下さい。)

(2-3) e. *Des hommes ont tué mon chien pendant mon sommeil. Qu'ils se dénoncent!* (再掲)

(寝ている間に私の犬を殺した人がいる。自首しろ!)

和訳における以上のような違いから、存在文のそのコンテキストにおいて不定名詞句単数形 **un homme** と不定名詞句複数形 **des hommes** との使い分けは、数量的唯一性の有無を問題とする単複的な違いではなく、対象の存在の表示の違いにあることが分かる。(2-2a)、(2-3a)における不定名詞句の単数形 **un homme** (誰か) の場合は、泥棒、犬を殺した犯人の一事例／指示対象である。それに対して、不定名詞句複数形 **des hommes** (人) の場合において泥棒、犬を殺した犯人のカテゴリーである。「誰か」と「人」との使い分けにおける一事例か、カテゴリーとしての存在かの違いは、文構造において明白である。一方は、「誰か」が主語として現れ、特定の行為の存在に焦点を当てる「誰かが + 動詞述語」文である。他方は、「人」が被修飾語として現れ、タイプ／種の存在に焦点を当てる「動詞 + 人がいる」文である。

カテゴリーとしての不定名詞句複数形の扱いは、様々な場面において観察することができる。以下の例に現れるカテゴリーの存在は、特定の場合と非特定の場合のいずれにおいても挙げることができる。

(i) まず、一事例の存在あるいはカテゴリーの存在のその違いは、個か種かの違いにおいて明確に現れる。例えば、(2-13)では、一匹の熊の存在を示すが、(2-14a)では、種類としての熊の存在を示している。

(2-13) Il y a un ours dans le jardin.

(庭に一匹の熊がいる。)

(2-14) a. Il y a des ours dans les Pyrénées.

(ピレネー山脈には熊がいる。)

(2-14) b.? Il y a un ours dans les Pyrénées.

(ピレネー山脈には一匹の熊がいる。)

(ii) 以下のような **une catégorie de gens** (人の一種のカテゴリー) の意味も、不定名詞句複数形の場合にのみ現れることができない。

(2-15) a. **Il y a des gens qui pensent que la Terre est plate.**

(地球が平らだと思う人がいる。)

(2-15) b. **Il y a un homme qui pense que la Terre est plate.**

(誰かが地球が平らだと思っている。)

(iii) また、(2-8a) などのように、社会的通念として、夫婦に子供がいることを述べるためには、単数形より不定名詞句複数形が用いられやすい。それに対して、子供の中でも息子ではなく、特に娘がいるかどうかを知りたいときは「子供」というカテゴリーではなく、「娘さんがいらっしゃるんですか?」というように一事例の存在に焦点を当てる不定名詞句単数形 **une fille** を用いることになる。

(2-8) a. **Vous vivez seuls ou avec des enfants ?** (再掲)

(2-8) d. **Vous vivez seuls ou avec un enfant ?**

(二人暮らしですか?それとも子供が一人いますか?)

(2-16) a. **J'ai trois filles. Et vous, vous avez une fille ?**

(娘が三人います。そちらは、娘さんがいらっしゃるんですか?)

(2-16) b. **J'ai trois filles. Et vous, vous avez des filles ?**

(娘が三人います。そちらは、娘がいますか?)

(iv) 同じように、状態や状況を表すために不定名詞句複数形の使用が優先されている場合がある。例えば、単数形 (2-17a) は特定の状況に限られた *problème* (困り事) の存在に関する質問である。それに対して、複数形 (2-17b) にしてみると、特定の困り事ではなく、順調に事が運んでいるか、それとも問題が生じ困ったことになっているか、という区別の問題となる。つまり個別の *problème* ではなく、カテゴリーとして *problème* があるかどうかという意味になっている。英語では *be in trouble* という状態に対応する意味である。同じように、*connaître des difficultés* や *avoir des ennuis* などの複数形表現も挙げるができる。

(2-17) a. Tu as l'air triste aujourd'hui. Tu as un problème ?

(今日は寂しそうな顔してるね。何か困ったことがあるの?)

(2-17) b. Tu as des problèmes avec ta femme ?

(奥さんとうまく行かないの?)

2.2.3 不均質の指示カテゴリー

前節の例文の和訳が示しているように、不定名詞句複数形が表すカテゴリーの意味は、「親である」、「熊の種類がある」、「事がうまく行かない」などのように不特定多数性の意味とは区別されるものである。以下では、その意味はむしろ言及対象の内包にあることを述べる。

一見すると、単数形表現と複数形表現との違いは、単数対象を数量化することで複数扱いにすると考えやすい。しかし、複数形 (2-12c) のように非文になる場合がある一方、複数形 (2-12a) は容認文である。この場合の複数形 *des glaces* は、沢山

のアイスクリームではなく、色々な種類のアイスクリームを食べるのが好きであることを表している。このように *des glaces* の意味にはむしろ *des glaces de toutes sortes* (様々な種類のアイスクリーム) のような多様の種類があることが前提されている。同じように、*avoir des ennuis* (悩み事がある) は *avoir plusieurs ennuis* (一つだけではなく、多数の悩み事がある) という解釈ではなく、*avoir différents types d'ennuis* (様々なタイプの悩み事がある) と理解される。

以上見てきたように、不定名詞句複数形の示すカテゴリーは、総称的な均質的カテゴリーではなく、不均質性があることが前提であり、その中の共通的なものとしてのカテゴリーだと考えられる。例えば、息子に (2-10a) を尋ねている母は、息子はそれぞれ異なる「学生 A/学生 B/学生 C」に出会ったかもしれないが、その中で (一人でも二人以上でも) *ami* (友達) がいるのだろうか、と聞いているわけである。このカテゴリーの不均質性からは、不定名詞句複数形の示すカテゴリーは、概念世界を対象とする概念カテゴリー (*catégorie notionnelle*) ではなく、(「学生 A/学生 B/学生 C」のように) 現実世界において位置付けられる幾つかの事例/指示対象を対象とする指示カテゴリー (*catégorie référentielle*) だということが理解できる。

2.2.4 叙述レベルの機能

単数対象の複数化による個の多数扱いではなく、指示カテゴリーとしての解釈は、どのようなプロセスで構築されるのだろうか。これを考察するためには、言語外の実体を指示する名詞レベルを超え、叙述レベルの機能を考慮しなければならない。この点については、以下の (2-12d) と (2-18b) の制約に注目したい。

(2-12) a. J'aime manger des glaces en plein hiver. (再掲)

(2-12) d.?J'aime manger une glace en plein hiver.

(真冬に一つのアイスクリームを食べるのが好きだ。)

(2-18) a. Comme dessert, tu veux une glace ou un fruit ?

(デザートは、アイスクリームと果物とどっちがいい?)

(2-18) b.?Comme dessert, tu veux des glaces ou des fruits ?

(2-12a) では、複数形表現が自然であるが、単数形表現は不自然である。反対に (2-18a) では、単数形表現が自然であるが、複数形表現は不自然である。後者では、*une glace* の扱いは数量を問題にしておらず、形容詞 *seul* も数字も用いることができない。

(2-18) c.*Comme dessert, tu veux une seule glace ou un seul fruit ?

(デザートは、一つだけのアイスクリームと一つだけの果物とどっちがいい?)

(2-18) d.*Comme dessert, tu veux deux glaces ou deux fruits?

(デザートは、二つのアイスクリームと二つの果物とどっちがいい?)

それらの制約は、アイスクリームの表示の違いにある。前節において見たように、不定名詞句複数形 *des glaces* はカテゴリーとしてのアイスクリームである一方、不定名詞句単数形 *une glace* は一事例としてのアイスクリームである。そこで、アイスクリームの表示の違いは、文レベルにおいて行われている叙述の違いにあると理解されるのである。

(i) (2-12a) の場合において、動詞述語 *aimer* (好きである) の使用によって、アイスクリームは嗜好の対象として捉えられている。嗜好は多様性という前提の上で成り立つことから、複数形 *des glaces* が用いられる。

(ii) それに対して、(2-18a) の場合は、食事の場面においてなされている叙述であり、アイスクリームはデザート (の種類) として考えられている。嗜好の対象としてのアイスクリームとは異なり、一般に食事のデザートは一つであることから、今回の場合、アイスクリームの一事例としての単数形 *une glace* である。

このように、これまで検討してきた不定名詞句の単数形と複数形との使い分けは、カテゴリーとしての対象が前提となる叙述と、一事例の指示対象が前提となる叙述の違いによる使い分けである。

(i) 例えば、家の強盗や犬殺しなどの叙述の場合は一事例の指示対象が前提とされており、不定名詞句単数形が用いられる。前章の (1-9a) のように、電話の場合についても同じ指摘ができる。同じように、(2-19) における *film* (映画) は *film à regarder* (見るべき映画) というような叙述において位置づけられる。基本的に一本の映画を見ていることから、相手が何本かの映画を勧めてくれるとしても単数形表現が優先される。

(2-19) Tu veux aller voir un film ?

(映画を見に行きたい?)

(ii) それに対して、(2-20a) のような叙述の場合は複数形表現が優先される。それは基本的に動物園にはいろいろな種類の鳥が飼育されているからである。

(2-20) a. J'ai vu des oiseaux ce matin au zoo.

(今朝、動物園で鳥を見てきました。)

(2-20) b.?J'ai vu un oiseau ce matin au zoo.

(今朝、動物園で一匹の鳥を見てきました。)

しかし、(2-20c) にしてみると、不思議さは一事例の指示対象に焦点が当てられるものなので、鳥の種類を示していても、(2-20c) のように単数形表現となる。

(2-20) c. J'ai vu un oiseau bizarre ce matin au zoo.

(今朝、動物園で不思議な鳥を見てきました。)

また、叙述レベルの違いから (2-10a) を改めて検討すると、入学式の場面に置かれる叙述であることから、この場合息子の出会った *ami* は「学生 A/学生 B/学生 C」のような多様性の意味をとることになる。それに対して、(2-21) では、プライベートな友人関係を前提とする *se confier* (打ち明ける) という場面であり、一人の *ami* の解釈が優先される。その違いは、日本語の「友達」と「親友」の違いである。

(2-21) Tu as un ami à qui te confier ?

(打ち明けられる親友がいる?)

以上の分析から、不定名詞句の複数形の意味と用法の再定義の必要性を示すことができたのではないだろうか。本論文の冒頭で検討した複数性概念の一般的な定義

は、名詞の範囲のみを対象とした定義であった。その結果、前章の(1-8)における不定名詞句複数形 *des profs* の使用は *prof* (教職員) の数量上の使用とされてきた。

しかし、本章の分析から導きだされるのは、まず、不定名詞句複数形の使用が示すのは不可算の指示カテゴリーの存在であるという結論である。そして、存在とは、言語外世界レベルの存在というよりは、(述語として) 叙述レベルにおいて成立する存在であると言える。したがって、本章にて取り扱ってきた名詞複数形の例は、前章で説明したように可算ベースで考えられている複数性概念によっては説明することができないのである。というのも、フランス語の不定名詞句単数形と複数形との使い分けを理解するためには、名詞の範囲のみではなく、むしろ叙述レベルの範囲まで検討する必要がある、ということである。それは、フランス語の不定名詞句複数形の意味は、可算性を前提とする「複数性」という数量的意味ではなく、むしろ可算と不可算との区別と無関係である「多様性」という性質的意味として理解すべきであるからである。

2.3 定名詞句複数形における複数性の限界

2.3.1 指示カテゴリーの多様性の意味

これまでの例文は不定名詞句の例であるが、不特定の数量を持つ定名詞句の場合もある。例えば、Donnelann (1971) の挙げる(2-22)における殺人者のアイデンティティは不明であり、その殺人者の人数も不明である。今回の場合、スミスを殺した人のアイデンティティが分からなくても、殺人事件のひどさからして殺人者は狂

人と考えるしかないと判断され、属詞 *fou* をもって殺人者の属性が限定される。そこで、*être fou* (狂っている) という属性は一般に (カテゴリー化できない) 個別的事象であることから、前章で見た不定名詞句の場合と同じように、(2-22) における定名詞句単数形も一人の指示対象を前提する叙述に関係づけられると言える。

(2-22) *L'assassin de Smith est fou.* (Donnelann 1971)

(スミスを殺した人は狂っている。)

定名詞句複数形についても同じような指摘ができる。例えば、(2-23a) では、妻の友達に嫌われる話者は妻の友達の具体的な数量 (複数性) を示すより、「妻の友達と仲良くない」という状態を示すことを目的としている。ここで重点が置かれているのは、具体的に妻の友達の中の何人が、という数量的情報ではなく、話者が妻の友達の幾人かに嫌われてしまっているという状態である。したがって、今回の場合では、*ami de ma petite amie* (彼女の友達) を数えることはできない。

(2-23) a. *Les amis de ma petite amie me détestent toujours au début.*

(最初はいつも彼女の友達に嫌われる。)

(2-23) b.**Les deux amis de ma petite amie me détestent toujours au début.*

(最初はいつも彼女の二人の友達に嫌われる。)

また、不特定の数量を表す (2-24a) のような総称的用法の定名詞句複数形の場合も挙げることができる。

(2-24) a. Les Français pensent qu'il ne faut travailler que 35 heures par semaine.

(フランス人は週三十五時間労働制が良いと思っている。)

(2-24) b.*Les deux Français pensent qu'il ne faut travailler que 35 heures par semaine.

(二人のフランス人は週三十五時間労働制が良いと思っている。)

2.3.2 指示カテゴリーの定義化

前述した定名詞句の例をめぐる観察を通じて、定名詞句の場合、特定であるのは対象の数量ではなく、対象の定義であることが理解される。不定名詞句の場合、一事例の指示対象 (*un ami*) / 指示カテゴリー (*des amis*) の定義は不明であるが、定名詞句の場合は一事例の指示対象 (*l'assassin de Smith*) / 指示カテゴリー (*les Français, les amis de ma petite amie*) の定義は明確である。

ここにおける「定義」の意味は、特定の指示対象のケースに限定する「指示の同定化」 (*identification référentielle, extensionnelle*) ではなく、特定の内包に限定する「内包の同定化」 (*identification intensionnelle*) というものである。(2-22)、(2-23a) の例文に見られるような定名詞句の場合、指示対象の内包は *de Smith* (スミスの)、*de ma petite amie* (彼女の) という名詞の補語によって定義される。(2-24a) の場合は、*Français* (フランス人) の内包は述語によって定義される。定冠詞の使用における「定義」の機能に関しては、Ducrot (1972) と Kleibler (1987) の指摘する属性関係 (*rapport d'attribution*) の以下の例を挙げることができる。古川 (1988) が指摘するように、以下の例における主語定名詞句と属詞名詞句との入れ換え (*renversement*) が可能である。不定冠詞の場合は、それは不可能となる。

(2-25) a. Paris est la capitale de la France. (Ducrot 1972: 227)

(パリはフランスの首都である。)

(2-25) b. La capitale de la France est Paris. (古川 1988: 19)

(フランスの首都はパリである。)

(2-26) a. Marie est la plus belle femme du monde. (Kleiber 1987: 224)

(マリは世界一綺麗な女性である。)

(2-26) b. La plus belle femme du monde est Marie. (古川 1988: 19)

(世界一綺麗な女性はマリである。)

(2-27) a. Pierre est un professeur. (Danjoux-Flaux 1991: 27)

(ピエールは教員である。)

(2-27) b. * Un professeur est Pierre. (ibid.)

「存在」と「定義」との違いは、(2-24a)と(2-24c)の違いを見れば明らかである。不定名詞句 *des Français* は存在としてのフランス人のカテゴリーであるが、定名詞句 *les Français* は定義としてのフランス人のカテゴリーである。

(2-24) a. Les Français pensent qu'il ne faut travailler que 35 heures par semaine. (再掲)

(2-24) c. Il y a des Français qui pensent qu'il ne faut travailler que 35 heures par semaine.

(週三十五時間労働制が良いと思っているフランス人がいる。)

このように、ここに示されているのは、不定名詞句複数形は指示カテゴリーの存在を示す一方、定名詞句複数形の使用は指示カテゴリーの定義を示す、という違いである。指示カテゴリーの定義は、空間上 (*les hommes là-bas* そこにいる男性たち) か意味上 (*l'assassin de Smith* スミスを殺した人, *les amis de ma petite amie* 彼女の友達) の限定による特定の定義の場合がある。それに対して、総称文 (2-24a) における定名詞句複数形は非特定の解釈をとる。そこで、対象の定義を、定名詞句 (単数形や複数形) の使用の前提とすると、総称文における定名詞句の使用において矛盾が感じられてしまうのである。というのは、その場合は、指示カテゴリーの定義は非特定のであるからである。そういった矛盾点を解決するために、次章以降は、特定の用法より非特定の用法の定名詞句複数形の用法と意味を検討していきたいと思う。

第3章 名詞複数形における存在前提説の検討

3.1 問題提起

前章では不定名詞句複数形の示す（存在としての）指示カテゴリーを幾つかの不均質の対象（occurrences hétérogènes）を含むカテゴリーとして定義したが、(2-24a)のような総称文の場合においても、不定名詞句複数形 *les Français* の示す（定義された）指示カテゴリーは「フランス人 A / フランス人 B / フランス人 C」のような多様性の意味だとすると考えやすい。

しかし、(3-1a)のような存在を否定する総称文における定名詞句複数形の場合は同じような指摘はできないのではないだろうか。(3-1b)では定名詞句複数形 *les fantômes*（幽霊）によって「幽霊」という種の存在が前提とされていると考えられるが、その否定文である(3-1a)においては、定名詞句複数形 *les fantômes* の持つ存在前提自体が否定されるという矛盾に陥ってしまう。

(3-1) a. *Les fantômes n'existent pas.*

(幽霊は存在しない。)

(3-1) b. *Les fantômes existent.*

(幽霊は存在する。)

このような場合において、「幽霊」の存在が否定されているにも拘らず、定名詞句複数形が用いられるのは一体何故だろうか。Russell (1905: 178) はつとに「文の主語として非存在者が用いられるのは一体何故だろうか。」という論理学上の問いを出

している。本章では、その問いを下敷きにしつつ、言語上の問いとして存在動詞 *exister*（存在する）の性質、およびフランス語における定名詞句表現の指示対象において、概念世界にある指示概念と現実世界にある述語の行為者項（actant）としての指示対象が矛盾なく共起することを明らかにする。そして、(3-1a) における定名詞句複数形の使用は、その指示対象の「一般化」によって限定されることを確認する。

3.2 言語学における非存在

3.2.1 非存在に対する言語学的観点からの考察

上で提起した問題、すなわち、(3-1a) における動詞 *exister*（存在する）の表す存在述定の否定と、主語定名詞句複数形 *les fantômes* の表す存在前提の矛盾に対する解決策の一つとしては、定名詞句複数形 *les fantômes*（幽霊）の振る舞いを動詞 *exister*（存在する）の問題に帰さないことである。その考え方では、定名詞句 *les fantômes* は述語構造とは独立した指示対象を指示することになると思われる。以下の文が示すように、中性指示代名詞 *ça* によって定名詞句複数形 *les fantômes* を文頭遊離することができるのだが、このような文頭遊離の結果として、定名詞句複数形 *les fantômes* は動詞 *exister* の主語ではなくなる。言い換えるならば、文頭遊離の操作は、定名詞句複数形 *les fantômes* の指示を、述語構造のレベルにおける指示限定の問題から切り離すことにある。

(3-2) a. Les fantômes, ça existe. / Les fantômes, ça n'existe pas.

(幽霊というのは、存在する。 / 幽霊というのは、存在しない。)

(3-2a) というような存在文が可能であるということから、存在文の統語構造は、必ずしも (3-1a) と (3-1b) というような「主語名詞 - 動詞 *exister*」の構文構造ではない、ということが言えるだろう。そして、(3-2a) などのように動詞 *exister* の主語として指示対象の曖昧である指示代名詞 *ça* となれることから、一見すると、存在は、主語名詞の言語的振る舞い（単数形・複数形または不定名詞句・定名詞句の違いなど）に依存している述語より、むしろ指示上の自立性（*autonomie référentielle*）のある何らかの名詞概念に関して主張される属性として考えるべきではないだろうか。

しかし、周知のように、Léard (1987) 以降、フランス語の総称文における指示代名詞 *ça* を用いた文頭遊離構文において遊離名詞句の限定詞に制約が存在することが明らかになっている。例えば、以下の例文が示すように、遊離名詞句の冠詞は不定冠詞単数形と複数形のいずれもが可能である²⁴ のに対して、定冠詞では複数形のみが共起する。

²⁴ 遊離名詞句としては不定名詞句複数形 *des fantômes* が可能であるが、文頭遊離構文構造では不定名詞句単数形 *un fantôme* あるいは定名詞句複数形 *les fantômes* の方が自然だと考えられる。不定冠詞複数形 *des* と指示代名詞 *ça* の非共起のこの問題については、Kleiber (1977: 327) の指摘を挙げることができる（後述）。Kleiber (1977: 327) によると、不定冠詞複数形 *des* は部分冠詞として機能しており、名詞概念の「分割」を前提としている一方、その反対に、指示代名詞 *ça* は名詞概念の「分割」が不可能な指示対象を指示している。

(3-2) b. Un fantôme, ça existe. / Un fantôme, ça n'existe pas.

(3-2) c. ?Des fantômes, ça existe. / ?Des fantômes, ça n'existe pas.

(3-2) d. *Le fantôme, ça existe. / *Le fantôme, ça n'existe pas.

また (3-2d) のように定名詞句単数形を用いることができないことから、これまで論じてきた (3-1a) における定名詞句複数形 *les fantômes* の指示限定は、動詞 *exister* の範囲外で説明するべきであるという主張に反して、文頭遊離構文においても動詞 *exister* と遊離名詞句の間においては言語的制約が存在することが言える。したがって、言語のレベルにおいては、動詞 *exister* と定名詞句複数形 *les fantômes* とは別々に分析することができないのである。それに加えて、「主語名詞 – 動詞 *exister*」というような構文構造に戻ると、主語名詞句の制約がさらに強くなることが観察される。

(i) Kleiber (1977: 327) が指摘するように、主語として不定名詞句の単数形も複数形も不可能である。

(3-3) a. *Une licorne existe. (Kleiber 1977: 327)

(一匹の一角獣が存在する。)

(3-3) b. *Des licornes existent. (ibid.)

(複数の一角獣が存在する。)

(ii) また、(3-3c) のように、存在の部分量を示す数量詞表現も不可能である。

(3-3) c. *Beaucoup de licornes existent. (ibid.)

(一角獣がたくさん存在する。)

この制約は、Kleiber (1977) が論じるように、*exister* などの存在物の種レベルを叙述する述語は、「一角獣」と言える種のすべての例を対象とした述語の性質に起因するものである。主語名詞句が不定冠詞複数形におかれていても、(3-4a) では対象の存在は前提されており、属性のみが叙述内容となるので非文とはならない。それに対して (3-4b) では、一角獣という「種」には存在する一角獣と、存在しない一角獣があるという叙述となり、矛盾してしまう。

(3-4) a. *Des licornes sont blanches et d'autres noires.*

(白い一角獣と黒い一角獣がある。)

(3-4) b. **Des licornes existent et d'autres pas.*

(存在する一角獣と存在しない一角獣がある。)

(iii) 単純名詞²⁵の場合は定名詞句複数形 *les fantômes* のみが可能である。それに対して、主語名詞が複合名詞の場合、定名詞句単数形 *le fantôme* が可能となる。言い換えるならば、これは、(唯一的な存在としての) 一事例の存在なのかそれとも(複数存在や類レベルの存在としての) 種の存在なのかという区別である。

²⁵ 「単純名詞」 (*substantif simple*) は *J'aime les chevaux.* (Kleiber 1977: 327) (馬が好きだ。) のような不特定の意味をとる名詞である。これに対して、「複合名詞」 (*substantif complexe*) は *Ce stylo existe.* (Kleiber 1977: 327) (このペンは存在する。) などのような特定の意味をとる名詞である。

(3-5) a. *Le fantôme existe.

(3-5) b. Le fantôme de ma grand-mère existe.

(私のお婆ちゃんの幽霊は存在する。)

以上見てきたように、存在文における主語名詞句の限定詞の言語的制約が存在することは、言語レベルにおいて見逃すことのできない重要な問題である。言い換えるならば、存在は、言語と無関係の哲学概念などではなく、文のレベルにおいて様々な言語的制約を与える言語単位なのである。(3-1a)における主語名詞句は定名詞句複数形 *les fantômes* という特別な形をとらなければならない。この観察から定名詞句複数形 *les fantômes* の振る舞いを動詞 *exister* の振る舞いから取り外すことができない、ということが言えるのである。

3.2.2 非存在に対する指示的観点からの考察

これまで見てきたように、非存在文(3-1a)などのような場合においては、「幽霊」の存在が否定されているにも拘らず、定名詞句複数形 *les fantômes* が用いられる。この矛盾点を解決するために、Kleiber (1977) は、このような非存在文の場合における否定は主語名詞の指示対象の存在の否定(幽霊はいない。)ではなく、その指示対象が述語 *exister* の対象として現れる可能性の否定(幽霊の存在はない。)とする。Kleiber (1977) のこのような主張は、以下の三点を前提とする主張である。

(i) まず、二種類の下位領域への指示領域 (*espace référentiel*) の分別が必要である。Ducrot (1972) と Searle (1972) に続いて、Kleiber (1977: 325) は、現実世界に

ある指示対象ではなく、観念的世界にある思考対象の形をとる指示対象が存在すると述べる。

Ne peut-on référer au Père Noël et à Sherlock Holmes bien qu'aucun des deux n'existe ou n'ait jamais existé ? [...] Sherlock Holmes n'existe pas, c'est un fait, mais cela ne s'oppose pas à ce qu'il existe dans le monde de la fiction. (Kleiber 1977: 325)

(サンタクロースあるいはシャーロックホームズに言及することができるが、いずれも実在しない存在である。 [...] シャーロックホームズが実在しないことは事実である。しかし虚構の中で存在することとは対立しない。)

指示領域の以上のような分別は、東郷（2009）の区別する (i) 現実には存在しない「俗信スペース」 (espace de mythologie ou de fiction) と (ii) 現実には存在すると思われる、すなわち話者の信じている世界である「現実スペース」 (espace de réalité) や「話者の信念スペース」 (espace de croyances) の二つのスペースとの区別である。東郷（2009）の主張するように、非存在文 (3-1a) などのような文は「間スペース対応存在文」または「複数のメンタル・スペースにまたがる間スペース文」として考えるべきである。

(ii) そして、その「現実スペース」に存在前提を持たない「幽霊」であるが、「俗信スペース」には存在前提を持っていると考えられる。これについて Kleiber (1977: 327) は以下のように述べる。

Ce raisonnement [sur la distinction de deux sous-espaces référentiels] implique un concept de référence plus étendu que celui des logiciens. Même pour les noms d'êtres

imaginaires, fictifs, etc., c'est-à-dire ceux qui n'ont pas de dénotation réelle, le linguiste postule un référent. S'il n'y en avait pas, il ne serait pas possible d'émettre à propos de ces noms de fiction, de mythologie, de légende, etc., des propositions vraies et des propositions fausses : *Tarzan est le roi de la jungle* est une proposition vraie, alors que *Tarzan est le roi de la pègre* en est une fausse. (Kleiber 1977: 327)

(指示スペースの下位分類という説明は、論理学上の概念より拡大した概念を含んでいる。想像上、あるいは虚構の存在物は現実の指示対象を持たないが、言語学上は指示対象を問題にすることができる。指示対象がなければ、それが虚構、神話、伝説であっても、真偽判断の命題を作ることができない。「ターザンはジャングルの王である」という命題は真であるが、「ターザンは窃盗団の王である」という命題は偽である。)

このように、定名詞句 *les fantômes* の指示対象の存在場所は「現実スペース」ではなく、*les fantômes* が指示領域として成り立つためには、物質化や具象化する必要のない「俗信スペース」でなくてはならない。例えば、(3-6)における定名詞句 *le diable* (悪魔) も、現実に存在前提を持たない悪魔が、話者の信じている世界であるキリスト教の世界には存在前提を持つことを示している。言い換えるならば、(3-6)は、キリスト教の世界でその存在が信じられている悪魔は、現実には存在しないということを言明する文である。

(3-6) *Le diable n'existe pas.* (小田 2012: 57)

(悪魔は存在しない。)

(iii) 「幽霊」は必ずしも現実世界にある指示対象ではなく、観念世界にある指示対象であるのであれば、現実におけるその指示対象の存在様態 (*modalité d'existence*) は明確化できるのが当然である、ということである。Kleiber (1977: 326) によれば、*exister* の本来の意味は、全称量化子 (*quantificateur universel*) として指示対象の存在 (ある) やその非存在 (ない) という普遍的な状態を表すのではなく、指示対象の特定の存在様態 (実際にある／実際にはない) を表すものである²⁶。さらに Kleiber (1981: 91) は、指示対象のこのような存在様態には現実世界における存在と歴史における存在という二種類の形をとることを指摘している。

(3-7) a. *Les licornes existent, j'en ai rencontré.* (Kleiber 1981: 91)

(一角獣は存在する。見た事がある。) (現実世界における存在)

(3-7) b. *Les licornes n'existent plus.* (ibid.)

(一角獣はもう存在しない。) (歴史における存在)

²⁶ このように、Kleiber (1977) は普遍的な状態としての「存在」や「非存在」 (*être ou ne pas être*) と肯定形 *exister* や否定形 *ne pas exister* をとることができる特定の存在様態 (*être quelque part*) としての述語 *exister* を区別する。ここに現れる「状態」の意味は、一般に言語学において述語の表す過程として定義される「状態」の意味とは異なる。普遍的な状態としての存在と特定の述語としての *exister* のことの区別の重要性について、ウディ・アレン著の『ぼくの副作用』 (1980) における「ないものは存在しない。したがって、死は存在しない。」という主張を挙げることができる。というのは、この主張の矛盾は状態 (あるかないか) と述語「存在する」の無区別から生じるからである。

しかし前節で見たように、(3-1a)などの主語名詞句の限定には言語的制約が存在する。この定名詞句複数形 *les fantômes* は発話状況に存在する指示対象について言及するが、その指示対象の存在の否定を可能にする言語パラメータはどのようなものなのだろうか。Kleiber (1977) では、存在文の否定 (3-1a) における定名詞句複数形の使用という制約に関しては、何故かという説明がない。この疑問は「幽霊」の存在の否定というより、定名詞句複数形の指示する存在の否定の問題である。この問いに答えるために、古川 (2005)、東郷 (2001, 2002)、小田 (2007, 2012) の検討を通じて、フランス語における定冠詞の意味と用法を考察する。

3.3 定名詞句における現実性の再検討

3.3.1 直示的用法の定名詞句における間接指示性

述語 *exister* の振る舞いを中心に論じた Kleiber (1977) とは異なり、古川 (2005) と小田 (2012: 70) は、指示対象の存在を否定する (3-1a) などのような総称文の容認の問題をまず定冠詞の機能から説明する。

古川 (2005: 77-78) は、定名詞句の存在前提説について言及し、述語 *exister* の主語としての定名詞句において以下のような矛盾点を指摘する。これについて、小田 (2012: 70) の指摘を挙げる。

古川は (2005: 77-78) は、*Les licornes existent.* (Kleiber 1981) という文について、「一角獣という種の存在が *les licornes* によって「前提」とされているとす

れば、すでに前提とされたものがさらに述語 *existent* によってその存在が「主張」されていることになり、同語反復的な文になってしまう」と述べ、さらに *Les licornes n'existent pas.* (Kleiber 1981) という文についても、「存在前提を持つ *les licornes* が述語の部分においては存在を否定されていることになり、矛盾した意味を持つことになる」と述べ、定名詞句の存在前提説に疑問を呈している。

(小田 2012: 70)

ただし、肯定文 (3-1b) にせよ、否定文 (3-1a) にせよ非文ではないことは明らかである。これは Kleiber (1977) の見地から見ると、前節にて紹介してきたように、述語 *exister* の本来の意味は「絶対にある」ではなく「実際にある」であるからであった。小田 (2012: 70) はこの説明にフランス語における定冠詞の機能の問題を挿入し、以下のように述べる。

しかし、本書では、定名詞句の機能が「指示」ではなく、「ある一つの世界・談話領域における指示対象の存在前提の伝達」に過ぎないからこそ、(他の世界・他の領域における) その指示対象の存在を主張したり否定したりすることに意味が生じるのだと考えている。

(小田 2012: 70)

定名詞句のこのような定義は、直示的用法の定冠詞を対象とした小田 (2007) に基づく定義である。東郷 (2011, 2002) を参考にしながら、小田 (2007: 144) は、以下の例においては、「走ってくるバスが自分たちの乗るべきバス」だと思われる時は定名詞句 *le bus* が用いられるのに対して、「バスに乗るつもりがない」時は不定名詞句 *un bus* となっていると述べる。言い換えるならば、今回における定名詞句と

不定名詞句のこの使い分けは、同じ一台のバスは話者の考えているバスなのか話者の考えていないバスなのかという区別である。

(3-8) a. *Regarde, le bus ! Dépêchons-nous !* (小田 2007: 144)

(バスがやってきた！急ごう！)

(3-8) b. *Regarde, un bus !* (ibid.)

(バスがある！)

定名詞句のこの用法について小田 (2007: 144) は以下のように説明する。

例 (14) [3-8a] と例 (15) [3-8b] において、同じ地点を二人が歩き、同じ地点を一台のバスが通過していても、「バスに乗る」という認知フレームがなければ、不定名詞句 *un bus* を使うのである。前者では、「バスに乗る」という認知フレームと発話状況が値踏み場を構築し、その値踏み場に一台のバスが登場されていること (あるいは存在前提をもつこと) で、定名詞句の使用が可能になる。 (小田 2007: 144)

このように、(3-8a) のように定名詞句 *le bus* と言えるのは、「バスに乗る」という要素を含む認知フレーム (*cadre cognitif*) に発話状況が重ね合わされているからである。認知フレームと発話状況の重ね合いによって構築される心理的領域であるこのような値踏み場 (*circonstances d'évaluation*)²⁷ はバスの存在を前提している上で、定名詞句 *le bus* の使用が必要とされるのである。

²⁷ Kaplan (1989) を参照のこと。

このことから、小田（2007: 151）は、フランス語の定名詞句のいわゆる直示的用法を、「間接指示性」を表す用法として再定義する。このような間接指示性はフランス語における定名詞句の本質とされる。

直示的用法の定名詞句は、物理的世界にある指示対象に参照して解釈されるのではなく、話者の心理的構築である値踏み場を介して間接的に指示が行われる。

（小田 2007: 151）

定名詞句の場合は話者の心理的構築である値踏み場を介して間接的に指示が行われることは、指示対象を話者の心理的な世界に位置付ける *notre bus*（我らのバス）に言い換えるのは定名詞句 *le bus* の場合のみであることを挙げることができる。

(3-9) a. *Regarde, notre bus ! Dépêchons-nous !*

（我らのバスがやってきた！急ごう！）

(3-9) b. **Regarde, notre bus ! Il roule vite, hein !*

（我らのバスがある！早く走っているね！）

小田（2007）による分析は定名詞句のいわゆる直示的用法の分析であるが、小田の分析は総称文（3-1a）などにおける定名詞句の用法を理解するために重要なものである。

3.3.2 述語の肯否における制約

前節で取り上げた直示的用法の定名詞句においては、述語 *arriver* の否定形との共起をめぐる以下のような制約が見られる。肯定形 *arriver* の場合とは異なり、否定形

ne pas arriver の場合は、不定名詞句 un bus や指示限定詞表現 ce bus の主語を用いることは不可能である。

(3-10) a. Le bus arrive.

(バスが来た。)

(3-10) b. Le bus n'arrive pas.

(バスが来ない。)

(3-11) a. Un bus arrive. / Ce bus arrive.

(一台のバスが来た。 / このバスが来た。)

(3-11) b. *Un bus n'arrive pas. / *Ce bus n'arrive pas.

(一台のバスが来ない。 / このバスは来ない。)

これらの制約をどのように説明すればよいだろうか。述語 arriver の現在形の振る舞いは肯定形 arriver や否定形 ne pas arriver によって変化し、肯定形 (3-12a) は過程を表すことができるのに対して、補語のない否定形 (3-12b) の場合それはできなくなる。

(3-12) a. J'arrive !

(今行くよ!)

(3-12) b. *Je n'arrive pas !

過程は、使用可能な／解釈できる情報を表す出来事や状態として定義される。これは、特に (3-12a) に因果関係を与えることができるかどうかということに起因す

る区別である。例えば *ne pas arriver* (着かない) とは異なり、*ne pas manger* (食べない) を例にしてみると、以下のような因果関係がありうるが、このことから明らかなように *ne pas manger* は過程を表すと考えられる。

(3-13) a. *Le chat ne mange pas. Il doit être malade.*

(猫はエサを食べない。病気にちがいない。)

(3-13) b. *Ce chat ne mange pas. C'est pourquoi il est si maigre.*

(この猫は食べない。それでこんなに痩せている。)

述語 *arriver* の特徴である過程としての肯定形 *arriver* と非過程としての否定形 *ne pas arriver* の違いは、述語 *arriver* の限界性 (*télicité*) の問題である。述語 *arriver* は終結点を持つ述語である。そして、Renaud (2005) が示すように、現在形の場合は否定形 *n'arrive pas* を用いるためには、「着く」という過程の時間的な終結点を明らかにしなければならないのである。時間的な終結点が明示されない場合は、その過程は生じること自体ができない。

(3-12) c. *Je n'arrive pas tout de suite. / Je n'arrive pas avant une heure.*

(すぐ行かない。 / 一時間後にしか行かない。)

そこで、(3-12b) に対して、(3-10b) は可能であるのは一体何故だろうかという疑問が当然出てくる。以下のような因果関係が可能であることから、明らかなことだが、(3-10b) という文の場合は、否定形 *ne pas arriver* は (3-14a) のように何らかの過程を表していると言える。

(3-14) a. Le bus n'arrive pas. C'est bizarre.

(バスが来ない。おかしい。)

この観察から、否定形 *ne pas arriver* は過程を表さないという主張を考え直す必要があることが分かる。またこの主張は、人称代名詞表現 (3-12b) や不定名詞句表現 / 指示限定詞表現 (3-11b) の場合にのみ適切である、ということも分かる。この結果として、否定形 *ne pas arriver* が過程を表すことができるのは定名詞句 *le bus* の場合のみであるのは一体何故だろうか、という疑問が生じる。

3.3.3 定名詞句における直示性における叙述レベルの機能

前節で見たように、述語 *arriver* は終結点を持つ述語である (Renaud 2005)。したがって、(3-10a) に対応する補語のない否定形 (3-10b) は動的活動 (*action dynamique*) ではなく、事象の確認 (*constat*) を意味している。この場合の確認とは、話者の直示的空間において指示対象が不在であるという否定的事実の確認 (*constat négatif*) である。したがって、同じような意味で (3-10c) を (3-14b) に言い換えることができるのである。

(3-14) b. Le bus n'est pas encore là. C'est bizarre.

(バスはまだ来ていない。おかしい。)

ここでは否定文が、直示的空間における指示対象 (待っているバス) の不在を意味している。しかし不在のバスをどのように指示することができるのだろうか。

肯定文 (3-10b) では、バスの到着という過程は話者の直示的空間に位置付けることができる出来事である。言い換えるならば、眼前で確認できるバスの到着ということである。したがって、直示的空間において位置付けることができる出来事の行為者項²⁸であるバスも、直示的表現によってその空間の中に位置付けることができる。しかしながら、以下の例が示すように、主語が定名詞句 *le bus* や所有形容詞表現 *notre bus* の場合、直示空間に位置づけることは不可能である。

(3-15) a. *Le bus arrive. Dépêchons-nous.*

(バスが来た。急ごう。)

(3-15) b.? *Le bus là-bas arrive. Dépêchons-nous.*

(あそこのバスが来た。急ごう。)

(3-15) c.? *Notre bus là-bas arrive. Dépêchons-nous.*

(あそこの私たちのバスが来た。急ごう。)

それに対して、不定名詞句 *un bus* や指示詞表現 *ce bus* の場合、指示対象の位置の特定化は可能となる。

²⁸ 本論文では、「行為者項」に対して、*Tesnière* による定義に比べてより狭い意味を与え、出来事の (様々な) 参加者ではなく、述語の表す出来事を担う人物や事物のことを示すものとする。例えば (3-15a) における行為者は、動的述語の動作主 *le bus* (バス) である。

(3-16) a. Un bus arrive./Ce bus arrive. Recule-toi.

(バスが一台来た/このバスが来た。後ろにさがって。)

(3-16) b. Un bus là-bas arrive./Ce bus là-bas arrive. Recule-toi.

(あそこのバスが一台来た。/あそこのバスが来た。後ろにさがって。)

このことから、定名詞句 **le bus** の指示対象の位置の特定化には制約が存在することが理解できる。上で見たように、**là-bas** (あそこ) のような指示対象の位置の特定化は、肯定文 (3-15b) の場合は不自然であり、さらに、否定文 (3-14c) の場合は不可能であるというような差異が見て取れる。肯定形 **arriver** や否定形 **ne pas arriver** によって差異が存在するのである。

(3-14) c.*Le bus là-bas n'arrive pas. C'est bizarre.

(あそこのバスが来ない。おかしい。)

この観察により、定名詞句 **le bus** の直示性が観察されるのは肯定形 **arrive** の場合のみである、ということが言える。それに対して、否定形 **n'arrive pas** の場合、定名詞句 **le bus** の直示性は現れなくなり、(3-14c) という文は非文となる。

(3-10) a. Le bus arrive. (直示的定名詞句)

(バスが来た。)

(3-10) b. Le bus n'arrive pas. (非直示的定名詞句)

(バスが来ない。)

定名詞句 *le bus* とは異なり、不定名詞句 *un bus* や指示限定詞表現 *ce bus* の場合は、指示対象の直示性が必須であり、指示対象の直示を表さない (3-11b) という文は非文となる。

このように、否定文 (3-10b) における定名詞句 *le bus* は直示的解釈をとらないことから、定名詞句 *le bus* は *n'arrive pas* というような実際には実現しない出来事の主語として用いられることができるのである。つまり定名詞句の直示性は、定冠詞に由来するのではなく、肯定形 *arriver* や否定形 *ne pas arriver* の選択によって生じるものである、ということである。この観察から、フランス語における定名詞句の指示対象は複合的なものであると特徴づけることができる。

3.3.4 定名詞句のプロトタイプの用法

フランス語における定冠詞の用法の一つとしてプロトタイプの用法 (*emploi typifiant*) が挙げられる (Joly 1986, Kleiber 1990)。定冠詞のプロトタイプの用法は、文においては述語の主語としての定名詞句と述語の行為者項としてのもう一つの名詞句や固有名詞が共存するケースである。この二つの要素間の関係が表わす意味は「代表性」である。例えば、(3-17a) という文においては述語 *ne jamais avoir remboursé ses dettes* の主語は定名詞句 *le pays* (国) であるが、意味論的な観点から見ると、述語の表す出来事を具体的に実現するのは *l'Allemagne* (ドイツ) である。言い換えるならば、実際に「借金を払い戻さない」のは *le pays* (国) ではなく *l'Allemagne* (ドイツ) である、ということである。したがって、述語の行為者項として *l'Allemagne* は、*le pays* (国) の指示対象となっている、ということである。

(3-17) a. L'Allemagne est le pays qui n'a jamais remboursé ses dettes !

(Thomas Piketty, *Libération* 7 juillet 2015)

(ドイツこそ借金を返済しない国だ！)

ここでは *le pays* の指示対象が *l'Allemagne* であることは、*le pays* と *l'Allemagne* の同値関係関連付け (*le pays qui n'a jamais remboursé ses dettes* = *l'Allemagne*) を否定する (3-17b) という否定文が非文であることから確認できるだろう。

(3-17) b.*L'Allemagne n'est pas le pays qui n'a jamais remboursé ses dettes !

(ドイツこそ借金を返済しない国ではない！)

同じように、以下の例における定名詞句 *la femme* は *la femme idéale* (理想の女性) という内包的な意味をとり、この内包は *Brigitte Bardot* という一人の特定のケースに具現化される。この文に現れる *Brigitte Bardot* (ブリジッド・バルドー) の主題化は、*Brigitte Bardot* という一人の女性が理想の女性として再構築されることを示す。この定冠詞のプロトタイプの用法は、一つの例 (*Brigitte Bardot*) を代表例とし定義する用法²⁹である。

(3-18) a. *Brigitte Bardot, c'était la femme.*

(Joly 1986: 129)

(ブリジッド・バルドーこそ女性の中の女性だ。)

²⁹ Krifka (1987: 17) はこの用法を “representative object interpretation” と定義している。

定冠詞のプロトタイプの用法を見たところで、(3-10a) という文のケースに戻ろう。この文においても、定名詞句の指示対象は二つの指示対象として分析することができる。(3-10b) においては、定名詞句 *le bus* の指示対象は「話者の信念によって想起されるバス」と「実際に目前に現れるのバス」という二つの指示対象を示している。この場合も、述語 *ne jamais avoir remboursé ses dettes* の行為者項が *l'Allemagne* であったのと同じように、述語 *arriver* の動作主であるのは目の前に現れた「現実のバス」のみである。

(i) 肯定文 (3-10a) の場合、目の前に現れた「現実のバス」は話者の待っていた「信念のバス」と同じバスである。したがって述語 *arriver* の行為者項である「現実のバス」は「信念のバス」の指示対象として理解することができる。また、この「現実のバス」を話者の直示的空間において位置付けることができることから、「現実のバス」と同じバスである「信念のバス」も直示性をとることになるので、(3-10a) における定名詞句 *le bus* は直示的解釈をとるのである。

(ii) それに対して、否定文 (3-10b) の場合、述語 *ne pas arriver* は過程を表さない。したがって、「信念のバス」の指示対象が不可能となり、定名詞句 *le bus* は直示的解釈をとらないのである。

つまり、前節で論じた肯定文 (3-10a) と否定文 (3-10b) における定名詞句 *le bus* の直示性をめぐる違いは、本節で定義した指示対象の直示性の問題に由来すると言うことができる。例えば、(3-18b) という文においては、有名人として述語の行為者項である *Brigitte Bardot* を直示的に特定化することができない。したがって定名詞句 *la femme* もまた直示性を持たないのである。

(3-18) b.*Brigitte Bardot là-bas, c'était la femme.

(あそこのブリジット・バルドーこそ女性の中の女性だ。)

3.4 定名詞句複数形における「普遍的一般化」の多様性の意味

3.4.1 指示対象の一般化の意味

前節においては、定名詞句の直示的用法 (3-10a) とプロトタイプの用法 (3-18) の場合について分析してきたが、再び本章の問題提起に立ち戻ってみる。本章の分析対象である総称文 (3-1a) における定名詞句についても、ここまで検討してきたことと同じ説明ができると考えられる。その理由は、肯定文 (3-1b) と否定文 (3-1a) の違いは、*les fantômes* の存在の問題というよりも、まず述語 *exister* の行為者項としての指示対象の問題であるからである。例えば、以下の例が示すように、肯定文 (3-1b) や否定文 (3-1a) との使い分けは *un fantôme* (一つの幽霊) という一事例の存在に基づく使い分けである。

(3-19) a. *Les fantômes existent, j'en ai vu un hier chez moi.*

(幽霊は存在する。きのう家を見た。)

(3-19) b.**Les fantômes existent, je n'en ai jamais croisé.*

(幽霊は存在する。一度も出くわしたことがない。)

(3-20) a. Les fantômes n'existent pas, je n'en ai jamais croisé.

(幽霊は存在しない。一度も出くわしたことがない。)

(3-20) b.*Les fantômes n'existent pas, j'en ai croisé un hier chez moi.

(幽霊は存在しない。きのう家で出くわした。)

このことから、直示的用法の定名詞句 (3-10a) と同じように、総称的用法の定名詞句 (3-1a) と (3-1b) の意味は二つの対象からなっているということが分かる。一つは「俗信スペース」には存在前提を持つ「幽霊」という概念対象であり、もう一つは述語 *exister* の行為者項としての「幽霊」の指示対象である。しかし、ここでは二種類の「幽霊」の間は同値関係 (*relation d'équivalence*) (例 3-17a) あるいは相応関係 (*relation de correspondance*) (例 3-10a) ではなく、総称的意味を与える一般化の関係が成り立っている。そして、その一般化は普遍的なものである。普遍的な一般化の関係が成り立つのは、述語 *exister* が類レベルを問題にする述語だからである。すなわち、幽霊に出会えば、一つの幽霊 (指示対象) が存在すると断定でき、一つの幽霊が存在するならば、幽霊 (という類) (概念対象) は存在することになる。

ここまでの分析を通じて明らかのように、肯定文 (3-1b) と否定文 (3-1a) の違いは定名詞句 *les fantômes* と述語 *exister* の相互関係に起因するものというより、特定の発話状況において述語 *exister* が *les fantômes* の一事例によって具現化されるかどうかをめぐる違いであることが言える。存在が具現化する場合 (例 3-1b) は肯定的一般化 (*généralisation positive*) となるのに対して、非具現化 (例 3-1a) の場合は否定的一般化 (*généralisation négative*) となる。つまり定名詞句 *les fantômes* の指示対象は、ヴァーチャル世界の幽霊と、特定の場面で問題となる現実的な幽霊という二つの要素から成り立っている。その過程を具現化する一事例が存在するときは定

名詞句 *les fantômes* の指示対象は虚像から現実へ（例 3-1b）とされる。その反対に、その過程を具現化できる例が一事例も存在しないときは、定名詞句 *les fantômes* の指示対象はヴァーチャル世界に位置付けられる（例 3-1a）。

3.4.2 不均質の一般化

小田（2012: 70）は、存在文の主語定名詞句の単数形と複数形との使い分けを、名詞概念に対する話者の持っているイメージの問題としている。複数形表現の場合は複数存在のイメージである一方、単数形表現の場合は単数存在のイメージである。

(a) *Les dragons n'existent pas.*

（ドラゴンが存在しない。）

(b) *Le diable n'existe pas.*

（悪魔が存在しない。）

(a) と (b) のような存在を表す総称文において、主語の名詞句が単数となるか複数となるかは、その対象が一般に複数存在する者としてとらえられているか否かによる。悪魔 (*devil/diable*) や神 (*God/Dieu*) のような対象は唯一的な存在としてとらえられることが多いため、*Le diable n'existe pas.* や *Dieu existe.* のように、単数名詞句の形で現れやすい。一方、龍 (*dragon/dragon*) やユニコーン (*unicorn/licorne*) は絶対的に唯一の存在とは考えられていないため、*Les dragons n'existent pas.* や *Les licornes existent.* のように、複数名詞句の形で現れやすい（ただし、単数名詞句を使って *Le dragon n'existe pas.* や *La licorne n'existe pas.* のように言うことも不可能ではない）。（小田 2012: 70）

しかし、これまでの分析を通じて、(3-1a) や (3-1b) のような文は、現実世界に存在する幽霊の指示対象の一般化として考え直すべきである。その指示対象の数を考慮してみると、単数形表現 (3-6) や (3-21) の場合に登場する唯一的な指示対象の数量は単数と言えるが、複数形表現 (3-1a) や (3-1b) の場合に登場する指示対象の数量は複数とは言えない、という違いとなる。

(3-6) Le diable n'existe pas. (再掲)

(3-21) Le Yeti existe.

(イエティは存在する。)

では、定名詞句複数形 *les fantômes* は指示対象の複数性を表さないのであれば、どのような意味をとるのだろうか。その問いに答えるためには、Kleiber (1977: 327) の定義した単純名詞と複合名詞との区別に戻る必要がある。これについては、単純名詞と複合名詞の違いをめぐる以下の二点を挙げることができる。

(i) まず、(3-1a) や (3-1b) のような一般化は、複合名詞の一事例からのみ可能である。反対の一般化は不可能である。というのも、例えば複合名詞 *le fantôme de ma grand-mère* (私のお婆ちゃんの幽霊) の指示範囲は単純名詞 *les fantômes* の指示範囲より狭いからである。

(3-22) a. *Le fantôme de ma grand-mère existe, donc les fantômes existent.*

(私のお婆ちゃんの幽霊は存在する。だから、幽霊は存在する。)

(3-22) b. ?*Les fantômes existent, donc le fantôme de ma grand- mère existe.*

(幽霊は存在する。だから、私のお婆ちゃんの幽霊は存在する。)

(ii) 現実世界における存在を対象とする非人称構文「il existe + 不定名詞句」の場合は、特有の属性を指し示している複合名詞句のみが可能であることも挙げることができる。

(3-23) a.* Il existe des fantômes.

(幽霊がいる。)

(3-23) b. Il existe des fantômes drapés de blanc.

(白い服を着た幽霊がいる。)

以上の二点から、(3-1a) や (3-1b) における単純名詞 *fantômes* の指示的範囲は均質ではなく、むしろ様々な属性や事例に分別できる異質な対象である、ということが言える。本章の定名詞句複数形 *les fantômes* では、存在する、あるいは存在しない幽霊は、比較したり分別したりできる様々な属性や事例からなる異質な対象であることを意味している³⁰。Kleiber (1990) によれば、複数形の場合に対して、総称的用法の定名詞句単数形の場合においては、意味クラスを形成している様々な事例は、等質的な対象として捉えられている。例えば、(3-24a) の場合、(3-24b) のような反例を出すことができない。

(3-24) a. Le castor n'existe plus dans les Vosges. (Kleiber 1990 : 37)

(ボージュには、ヒマシはもう存在しない。)

(3-24) b.* Le castor n'existe plus dans les Vosges, sauf les castors à poils bruns.

(ボージュには、黒ヒマシ以外、ヒマシはもう存在しない。)

³⁰ Kleiber (1990: 114) を参照のこと。

以上をまとめると、否定文 (3-1a) のような存在を否定する総称文における定名詞句複数形においては矛盾点がないことが明らかである。

(i) 第一点目として、定冠詞の使用を通じて概念世界にある幽霊と現実世界にある幽霊との区別が可能であり、述語 *ne pas exister* によって否定されるのは現実世界にある幽霊の存在のみである。

(ii) 第二点目として、否定文 (3-1a) や肯定文 (3-1b) における定名詞句複数形 *les fantômes* の使用は、幽霊の一事例が存在するなら幽霊 (という種) が存在するという述語 *exister* による普遍的一般化によって根拠づけられていた。ここに登場する名詞複数形の意味は、幽霊の数量を示す「複数性」ではなく、幽霊 (という種) がとることができる様々な属性や形を示す「多様性」であるといえる。

第 1 章において論じたように、フランス語における名詞単数形と複数形の選択基準として文法学者が伝統的に挙げてきたのは、名詞概念の数量上の問題である単数性 (ただ一つの個体) と複数性 (二つ以上の個体) の対立であった。

しかし、形態論的には例えば *glaces* (アイスクリーム) は単数形名詞 *glace* の複数形ではあるが、指示的には、名詞複数形は単数形の複数性を表すとは限らないことが明らかである。これについては、第 2 章において不定名詞句単数形 (2-18a) 不定名詞句複数形 (2-12a) などの場合を論じた。

第 3 章では、定名詞句のケースにおいても名詞単数形と複数形における数的相関性の限界を明らかにした。これは、特に存在を疑問とする総称文 (3-1a) の場合であった。以上を踏まえて、次章では、この総称文と同様の制約を持つ文について検討を深める。

(4-2) という総称文においては定名詞句複数形が容認され、定名詞句単数形 *la femme* は容認されない。総称文 (3-1b) について同様の制約が観察されるが、述語の意味特性はかなり異なっている。*exister* という存在を表す述語とは異なり、ここで取り上げる (4-2) の場合は、非特定の解釈³² の定名詞句複数形を主語としたのは、*bavarder* (お喋りする) という出来事述語³³ である。*bavarder* は特定の空間と時間に

³² 総称文の場合における主語名詞の非特定の解釈については、言語内のレベルの指示対象を指し示すものとしての総称定名詞句 *l'homme* に関する古川 (1988: 34) の以下の指摘を挙げることができる。「言語内のレベルの指示対象と言語外のレベルの指示対象との区別は、複合定名詞句においてもっとも明瞭にあらわれる。複合定名詞句は、*le N* の型の単一の名詞からなる定名詞句にくらべて、言語表現としての内容が豊かであるからである。単一の名詞からなる定名詞句においては、この二つのレベルの指示対象との区別は、それほど明瞭ではない。名詞が、具象名詞でない場合や、具象名詞であっても総称的にもちいられている場合には、特にそうである。このことは、ある一つの言語外の指示対象を指すのに、もちいられうる名詞という言葉表現がいくつあるか、ということに関連があるように思われる。たとえば、*Paul* というひとりの具体的な人間は、*homme, étudiant, voleur, idiot* などの名詞によって指示されうるが、*amour* によって指し示されるものは、単一の名詞では、*amour* によってしか表現されないのである。総称用法の場合にも、「人間というもの」と言う意味での *l'homme* は、名詞 *homme* によってしか表現されえない。このようなことから、二つのレベルの指示対象との区別は、抽象名詞や総称用法の名詞においては、それほど明瞭ではないのである。」 (古川 1988: 34)

³³ Kleiber (1981) は、特定の解釈をとることができる述語 *bavarder* などのように一時的状態を表す特定の述語を「出来事述語」 (*prédictat événementiel*) と呼ぶ。

において実現される出来事なので、当然主語の定名詞句は特定の解釈となるはずである。しかし、(4-2)における定名詞句複数形 *les femmes* は非特定の解釈をとる。

なぜ出来事述語の場合に関わらず、主語となる定名詞句複数形は非特定の解釈になるのだろうか。この疑問から出発し、本章では、(4-2)における形式上の名詞の複数形の使用が指示上の数的区別である単数性と複数性と相関しているのかどうかを検討する。

4.2 述語の例外性

Leeman (2004) によると、総称文の主語名詞句における単数形と複数形との使い分けは、対象の数量化ではなく、述語動詞の表す意味によって条件づけられている。

(i) この考え方に従うならば、意味の次元において、*bavarder* (お喋りする) というような出来事は *femme* (女性) の意味クラス全体に言える出来事とは言えない。

(4-2)における複数形表現の意味においては、「あまりお喋りをしない女性、あるいは、まったくお喋りしない女性」というような例外も含めることができるのではないだろうか。

(ii) それに対して、*être l'avenir de l'homme* (男性の未来である) というような定義述語³⁴の場合は、「男性の未来ではない女性」という例外を許さない述語である。したがって、この定義述語の主語となる名詞 *femme* の対象は例外のない「全ての女性」を指示しなければならないのである。

³⁴ 「定義述語」 (*prédictat définitoire*) は、定義の解釈をとることができる非出来事述語のことである。

このような考え方に依拠するならば、(4-1) と (4-2) における定名詞句単数形と複数形との使い分けは、名詞 *femme* の単数性（ただ一人の女性）あるいは複数性（二人以上の女性）というような単複的対立で捉えることはできない。そうではなく、名詞 *femme* の総称的意味において生じる「全ての女性か、ほとんどの女性か」という違いの問題として捉え直すことができる。例外を許さない定義述語を用いた (4-1) の総称的意味は「全ての女性は男性の未来だ。」という完全的な意味 (*sens totalisant*) であり、ここにおける定名詞句単数形 *la femme* は「全ての女性」を意味している。それに対して、例外を許す出来事述語を用いた (4-2) における定名詞句複数形 *les femmes* は「全ての女性」について言うことができず、今回は「女性はお喋りするが、お喋りしない女性もいる。」というような、例外を許容する部分的な意味 (*sens partialisant*) となるのだろう。

言い換えれば、(4-1) と (4-2) の間における総称的意味の違いは、定名詞句単数形 *la femme* の場合において *femme* の意味クラス全体（全ての女性）が指示されているのに対して、定名詞句複数形 *les femmes* の場合は、それが不可能である、という違いである。そして、それは、出来事述語 *bavarder* と定義述語 *être l'avenir de l'homme* の違いとされている。

しかし、総称文における定冠詞と不定冠詞との使い分けを問題とする以下が示すように、以上に論じてきた (4-1) と (4-2) における定名詞句単数形 *la femme* と複数形 *les femmes* との使い分けを理解するには、述語の振る舞いの違いの問題に加え、定冠詞の機能についてもさらに考察を深める必要がある。例えば出来事述語 *aboyer*（吠える）の場合、非特定の解釈が発生可能なのは、不定名詞句単数形 *un chien* または定名詞句複数形 *les chiens* の場合のみである。

(4-3) a. En français, on dit qu'un chien aboie.

(フランス語では犬は「吠える」。)

(4-3) b. *En français, on dit que des chiens aboient.

(4-3) c. ? En français, on dit que le chien aboie.

(4-3) d. En français, on dit que les chiens aboient.

4.3 特定の用法の定名詞句における定義機能

第2章の最後に論じたように、フランス語の定冠詞は、名詞の表示を定義する機能を持つ。本節では、さらにフランス語の定冠詞の使用におけるこの定義機能の検討を深める。以下が示すように、特定の用法の定名詞句の場合、定義機能の種類には (i) 対比的定義 (*définition par contraste*) と (ii) 評価的定義 (*définition par évaluation*) が挙げられる。

4.3.1 対比的定義

まず、対比的定義について考察しよう。対比的定義には、直示による指示対象の対比と、概念上の相互対比の場合がある。

(i) 直示的対比は、時空間上に限定した二つの指示対象の対比であり、言語的には最も自明な場合である。

(4-4) a. Tu connais la fille là-bas ?

(あそこにいる女の子のことを知っている?)

(4-4) b. Tu connais les filles là-bas ?

(あそこにいる女の子たちのことを知っている?)

(ii) この直示的対立は概念相互の対立と重なる場合もある。前方照応の場合がそれに当たる。Corblin (1995) によれば、定名詞句は必然的に名詞領域 N の個体を、名詞領域 N にはない個体と対立させる。定名詞句は名詞 N を、名詞 N の特徴を持たない個体の集合の中から取り出すことを前提にしている。異なる二つの概念の対立でなければ定冠詞が用いられないという現象について Corblin (1995: 5) は次の例を挙げる。

(4-5) a. C'est la voiture que j'ai prise, et non la moto. (Corblin 1995: 5)

(借りたのは、バイクではなく、自動車だよ。)

(4-5) b. *C'est la voiture que j'ai prise, et non la tienne. (ibid.)

(借りたのは、自動車だよ、君の自動車じゃないよ。)

(4-5b) における対立は同じ概念 *voiture* (自動車) の中から選び出された二つのメンバーの対立であるので、定冠詞を用いることは不可能である。それに対して、概念 *voiture* とそれと異なる概念 *moto* (バイク) の対立にすると、定冠詞の使用は可能となる。これについて以下の例も挙げる事ができる。

(4-6) Il y a un dictionnaire et un roman sur la table. Le dictionnaire ...

(Milner 1976)

(テーブルには辞書と小説がある。辞書の方は...)

4.3.2 評価的定義

上述のように、（直示上か概念上かの）対比によって名詞の表示を定義できる。しかしながら対比的定義のケースに、指示対象に対する話し手の主観的見方を問題とする評価的定義のケースがさらに重なるような場合もある。その場合は、プロトタイプとの同定化が見られる。例えば、(4-7)における *idée*（考え）の表示は、*idée* の時間や空間（あなたの考え）上の限定のみではなく、*idée* の評価（完璧な考え）によっても成り立つ。

(4-7) L'idée que tu as eue, elle est parfaite !

（あなたの考えは、完璧だね！）

しかし以下が示すように、指示限定詞によっても *idée* を評価することができる。

(4-8) Cette idée ! Non mais ça ne va pas la tête !

（なんという考えだ！頭がおかしいんじゃないか！）

評価的限定において、定冠詞と指示限定詞の二つの場合において異なるという現象は、名詞という記号の持つシニフィアン（能記）とシニフィエ（所記）との相互関係の違いによって生じる。本論文では、「シニフィエ」は名詞の「シニフィアン」が普段示すべき名詞の典型的な意味またはプロトタイプ的な意味とし、叙述のレベルにおいて名詞句が持ち得る様々な解釈から区別する。

(i) 定冠詞を用いた場合、シニフィアンとシニフィエの間にズレが生じず、むしろシニフィエはシニフィアンと一致しており、今回における「考え」はプロトタイプの「考え」、すなわち「考え」の意味素性を完全に備えた、「まさに考えらしい考え」である、ということである。

(ii) 定冠詞のこのケースに対して、指示限定詞を用いた場合はシニフィエとシニフィアンの間にズレが生じる。ここで言うズレとは、シニフィエとなる概念が、普段シニフィアンが表現する概念とは言えない概念である、というズレである。例えば、以下の指示限定詞表現 *cette idée* における名詞 *idée* (考え) は、シニフィアンから普段予想できるプロトタイプの「考え」ではなく、「なんとも考えらしくないような考え」を意味している。(4-8)においては、指示限定詞が用いられることによって名詞 *idée* の表す「考え」という内容が、特定の状況で普通ではない意味を帯びる。つまり普通ならば *idée* とは言えない事態を捉えて、*idée* とするのである。結果として悪い意味合いを帯びてしまい、シニフィエの欠格 (*disqualification*) (考えではなくなる) が行われると言える。

4.4 総称的用法の定名詞句における定義機能

そこで、本章の分析対象である総称文のケースに戻ると、特定の用法の定名詞句と同じように、総称文における主語定名詞句の使用においても同じような定義機能が見られる。以下で検討していくように、(4-1) と (4-2) における定名詞句単数形と複数形との使い分けは「全ての女性、あるいはほとんどの女性」というような総称の程度の違いの問題であるより、概念としての総称 (例 4-1) あるいはプロトタイプとしての総称 (例 4-2) というような総称の定義の違いとして考え直すべきである。

4.4.1 対比的総称化

まず、定名詞句単数形のみが用いられる総称文の例を考察しよう。第 2 章と第 3 章で見てきたように、不定名詞句単数形は不特定の一事例を示すが、定名詞句単数形が示すのは特定の一事例である。以下が示すように、節 4.2 で論じた定義述語と出来事述語の違いとは関係なく、(4-9a) と (4-3a) のように不特定の一事例 *un chien* の場合、総称的意味が発生することができる。それに対して、特定の一事例 *le chien* の場合は、(4-9b) のように定義述語との共起が困難であり³⁵、(4-10) のように特定の出来事としか共起できない。

(4-9) a. *Un chien a quatre pattes.*

(犬は四本の足を持つ。)

(4-9) b. *?Le chien a quatre pattes.*

(4-3) a. *En français, on dit qu'un chien aboie.* (再掲)

(4-10) *Le chien aboie. Tu peux lui ouvrir la porte ?*

(犬が吠えている。ドアを開けてくれる?)

³⁵ *La baleine est un mammifère.* (鯨は哺乳動物である。) は可能であるが、それは *mammifère* (哺乳動物) の使用によって「鯨」と「鯨以外の哺乳動物」という概念相互の対立が成立するからである。*? La baleine est un animal.* (鯨は動物である。) のように概念相互の対立が成立しない場合は、定名詞句単数形の使用は不自然になる。

しかし、(4-11)のように叙述レベルにおいて(概念的解釈に焦点を当てた)概念上の相互対比化が行われた場合は、主語定名詞句の総称化が単数形の形をとることができる。

(4-11) Le chien aboie. Le chat miaule.

(犬は吠える。猫はにゃあと鳴く。)

本章のはじめに紹介した(4-1)における定名詞句単数形 *la femme* についても同じ指摘をすることができる。*être l'avenir de l'homme* (男性の未来である)を *être l'avenir* (将来である)と置き換えてみると、定名詞句単数形を用いることは不可能である。定名詞句は必ず複数形となる。

(4-12) a.**La femme est l'avenir.*

(女性は未来だ。)

(4-12) b. *Les femmes sont l'avenir.*

(女性は未来だ。)

Leeman (2004)の説明によれば、等質性を前提とする定義述語の場合は当然定名詞句単数形が用いられる。しかし、(4-12a)という文における定名詞句単数形の使用を単に定義述語の問題とするのであれば、(4-12b)における *être l'avenir* という定義述語の主語は、定名詞句単数形ではなく、定名詞句複数形である点において矛盾が感じられることになろう。また、以下の例から明らかなように、比較や対立の

意味の強い *aussi* (～も) をもって主語の名詞句を修飾してみると、定名詞句の単数形を用いることが可能となるのである。

(4-12) c. *La femme aussi est l'avenir.*

(女性も未来だ。)

このことから、(4-1)における定名詞句単数形 *la femme* の使用を単に定義述語と出来事述語の違いによって説明することはできない。というのは、(4-1) や (4-11c) という文における定名詞句単数形 *la femme* の使用は、述語のみの問題ではなくむしろ文全体のレベルにおいて生じる主語名詞 *femme* の他の概念との対立の問題だからである。(4-12a)とは異なり、(4-1) という文においては名詞 *femme* (女性) の後に *homme* (男性) が用いられることによって概念 *femme* と概念 *homme* のような概念上の対立が成り立っていると言える。このような概念相互の対立が行われる場合は、定名詞句単数形を用いることができる。例えば、名詞 *femme* と対立している名詞 *homme* を省いてみると、定名詞句単数形を用いることは不可能となり、定名詞句複数形しか用いることができなくなる(例 4-12b)。

概念上のこの対立は、二つの異なった概念相互の対立でなければならないという条件も見られる。(4-13a) にしてみると、*femme* と *nous* (我々) の対立となり、「我々」の指示対象の中において「女性」も含まれる可能性があることから、定名詞句単数形は不可能となる。このような場合においても、定名詞句複数形のみが可能である。

(4-13) a.**La femme est notre avenir.*

(4-13) b. *Les femmes sont notre avenir.*

これらの総称文において定名詞句単数形 *la femme* を用いるには、次の例のように概念上の限定を行うことが必要である。

(4-14) a. *L'homme est mortel.*

(人類は死ぬものだ。)

常に総称的意味をとる *homme* (人類) とは異なり、*femme* (女性) の場合は必ずしも総称的解釈ではない。したがって、既に考察してきたように、比較の意味の強い副詞 *aussi* (～も) などを用いて概念上の対立化を行う必要がある。

(4-14) b. *La femme est mortelle.*

(女性は死ぬものだ。)

(4-14) c. *La femme aussi est mortelle.*

(女性も死ぬものだ。)

同じように、形容詞 *mortel* (死すべき) を反対語 *immortelle* (不死の) に言い換えると、定名詞句単数形 *la femme* は可能となる。これは、*immortelle* は *mortel* に対応する否定詞として必ず肯定・否定というような対立性を含意するからである。

(4-14) d. *La femme est immortelle.*

(女性は不死のものだ。)

これまで考察してきた対立化の現象は、指示カテゴリー上の下位分類による対立を表す場合もある。その場合においても用いられるのは定名詞句単数形である。例えば、出来事述語の以下の例においては、定名詞句単数形を用いるためには、**voiture**（自動車）の下位カテゴリーである **Smart**（スマートブランド）を明示しなければならない。

(4-15) a.**La voiture se vend bien cette année.*

（今年は車がよく売れている。）

(4-15) b. *La Smart se vend bien cette année.*

（今年は、スマートがよく売れている。）

よく知られている以下の例においても、**soldat**（兵隊）の下位カテゴリーである **soldat français**（フランス兵）を明確化しなければ、定名詞句単数形 **le soldat** の使用は難しい。

(4-16) a.**Le soldat résiste à la fatigue.*

（兵隊は疲労に強い。）

(4-16) b. *Le soldat français résiste à la fatigue.*

（フランス兵は疲労に強い。）

同じように、**chat**（猫）の下位カテゴリーである **siamois**（シヤム猫）の明確化が必要とされる。しかし定名詞句複数形 **les siamois** にすると、このようなカテゴリー上の対立は不要となる。

(4-17) a.*Le chat est distant.

(猫は冷たいものだ。)

(4-17) b. Les chats sont distants.

(猫は冷たいものだ。)

(4-17) c. Le siamois est distant.

(シヤム猫は冷たいものだ。)

(4-17d) という文において animal (動物) を導入すると、上位概念 (animal 動物) と下位概念 animal distant (冷たい動物) / animal chaleureux (優しい動物) という関連づけが生じ、その結果、「猫」と「猫以外の動物」という概念相互の対立となる。

(4-17) d. Le chat est un animal distant.

(猫は冷たい動物だ。)

Kleiber (1990: 23) の挙げる (4-18) という例についても同じ説明ができる。この場合は、異なる動物の種類、すなわち概念上の対立をもたらす dans cette région (この地域には) を用いなければ、定名詞句単数形が不可能となってしまう。これは、どこかの地域の中においては一種だけの動物が暮らしているとは考え難いからである。dans cette région を用いられない場合は、定名詞句複数形が必要となる。

(4-18) a. Le castor abonde dans cette région. (Kleiber 1990: 23)

(この地域にはビーバーがたくさん生息している。)

(4-18) b.*Le castor abonde.

(4-18) c. Les castors abondent.

(Kleiber 1990: 23)

(ビーバーがたくさん生息している。)

これまでの分析で分かってきたのは、総称的用法の定名詞句単数形は、主語名詞句が何らかの概念上の対立の中に置かれている場合のみである。本章において総称的用法の定名詞句単数形と叙述レベルにおける概念上の対立化の現象との言語学的な関連づけを明らかにしてきたことを通じて、(4-1) を例にしてみると、今回の主語定名詞句単数形 *la femme* の意味は *toutes les femmes* (全ての女性) という物質的意味より、(物質性のない) 「女性性」 (*féminité*)³⁶ という概念としての *femme* のような性質的意味だと分かる。

4.4.2 評価的総称化

(4-1) に対して、(4-2) の場合は、文においては概念上の対立が行われていない。したがって、(4-2) における定名詞句複数形 *les femmes* の総称化は、概念上の対立ではなく、複数形の使用自体によって発生する、と考えることができる。前章において分析した (3-1b) の場合は、*exister* (存在する) という類レベルの述語が複数形による一般化という制約をもたらした。(4-2) の場合においても (3-1b) と同じようなメカニズムが見られる。以下が示すように、*femme* (女性) の一事例から出発した一般化なのである。

³⁶ 「女性性」は、柔軟性や優雅などである。

(4-19) Les femmes bavardent, surtout la mienne.

(女性はお喋りする。特に、私の妻は。)

前章において説明してきた (3-1b) と同じように、(4-2) の場合の指示対象は述語 *bavarder* の行為者項である。そこで、特定の空間と時間において実現される個別の出来事を叙述する *bavarder* という出来事述語を総称述語に変換するためには、主語定名詞句複数形 *les femmes* が必要である。しかし、一事例の存在を問題とする (3-19a) のような一般化の場合とは異なり、ここで登場する (定名詞句複数形 *les femmes* の指示対象としての) 一事例 (*la mienne* 私の妻) は、*femme* の代表例またはプロトタイプとして働いているのだろう。というのは、(4-2) の場合における総称的意味は「女性の代表的行動」に焦点を当てるプロトタイプの意味をとってしまうからである。

本章では、第 3 章において考察を始めたフランス語における定冠詞の意味分析を続け、フランス語における定冠詞と指示限定詞の使用を比較し、定冠詞の使用が指示対象の定義の問題であることを明らかにした。そこで、総称文 (4-1) と (4-2) の場合における定名詞句単数形と定名詞句複数形との使い分けを、*femme* の総称の定義の違いの問題として説明を試みた。前者の場合の定名詞句単数形 *la femme* は、「女性性」という概念的意味を表す。それに対して、後者の定名詞句複数形 *les femmes* は、「女性 A / 女性 B / 女性 C」について言える「女性のプロトタイプの行動」という多様性の意味を表す。このように見てくると、総称文における名詞単数形と複数形との使い分けは名詞レベルではなく、また文レベルでもなく、それを超えた談話表示構造の問題であるということができよう。

第3章において見てきたように、(3-1a)の総称文のような場合、対象が現実世界において存在しないにも拘らず、定名詞句の使用が許容されていた。その場合は、定名詞句複数形の使用は、一事例の存在の(普遍的)一般化によって説明することができる。さらに第4章において考察した(4-2)の総称文における定名詞句複数形の使用も、一事例の行動の(プロトタイプの)一般化に因るものと考えられる。それに対して(4-1)の総称文における定名詞句単数形の場合は、(事例性のない)概念的意味が成り立つ、ということである。言い換えるならば、総称文における定名詞句複数形の場合は、名詞が指し示す対象の意味の中において、一事例の指示対象が含まれるのに対して、定名詞句単数形の場合は一事例の指示対象が含まれない、という違いである。

第5章 名詞複数形における事例性の役割

5.1 問題提起

本章では、定名詞句単数形と複数形との使い分けにおける事例性の有無の問題について引き続き検討し、次のような非特定の用法の目的語定名詞句を取り上げる。

(5-1) a. Le mouchoir sent la rose.

(ハンカチーフは薔薇のにおいがする。)

(5-1) b. ? Le mouchoir sent les roses.

(5-1a) は薔薇のにおいの発生について言及する嗅覚表現である。においは空気中を漂ってきて嗅覚を刺激するものであることから、(5-1a) に現れる定名詞句の対象は事例性を持つことができない対象であることが期待される。このように、複数形表現 (5-1b) は明らかに不自然である。しかし、以下のようなコンテキストの場合は、嗅覚表現としての定名詞句複数形 *les roses* の例もあり得る。

(5-2) La cuisine sent les roses.

(台所は薔薇のにおいがする。)

そこで、事例性を前提とする対象として説明してきた定名詞句複数形のこれまでの分析は (5-2) における定名詞句複数形 *les roses* の使用と矛盾してしまうのではないだろうか。以下の比較が示すように、嗅覚表現として定名詞句複数形 *les roses* を用

いることができるのは、あらゆる文脈においてしたがってではなく、(5-3) のように生花としての薔薇の場合のみである。(5-4) のような香水としての薔薇の場合は、定名詞句単数形 *la rose* をしか用いることができない。

(5-3) *La cuisine sent les roses. Tu as des roses dans ton jardin ?*

(台所は薔薇のにおいがする。庭に薔薇があるの?)

(5-4) a. ? *La cuisine sent les roses. Tu as vaporisé du parfum ?*

(台所は薔薇のにおいがする。香水をつけたの?)

(5-4) b. *La cuisine sent la rose. Tu as vaporisé du parfum ?*

以上の制約からは、以下の三つの疑問が出る。

(i) 一つは、定名詞句単数形 *la rose* と定名詞句複数形 *les roses* は同じようなにおいを示しているかどうかという疑問である。

(ii) もし単数形か複数形の選択によって異なるにおいが成立するのであれば、二点目は、においの捉え方の違いにおける *mouchoir* (ハンカチーフ) と *cuisine* (台所) の役割に関する疑問である。

(iii) 三点目は、(5-3) における定名詞句複数形 *les roses* の場合は、においの意味の発生と(複数形の使用が前提とする) 事例性が何故共起できるのだろうかという疑問である。

本章では、(5-3) のような非特定の用法の定名詞句複数形における事例性の位置づけを考察する。そこから導きだされる結論は、嗅覚表現としての定名詞句単数形 *la rose* と複数形 *les roses* との使い分けは、名詞 *rose* の数ではなく、むしろ述語 *sentir* との関わりで構築される *rose* の捉え方の違いである。特定の嗅覚を表す構文意味環

境に現れる rose は、嗅覚源 (sentir les roses) 、あるいはにおいの種類 (sentir la rose) として捉えられる。以下では、嗅覚源 (origine de l'odeur) とにおいの種類 (sorte d'odeur) という解釈の違いと、定名詞句単数形と複数形との使い分けと、嗅覚述語 sentir との関係について考察を進めることにする。

5.2 述語 sentir の自他における単数形と複数形との使い分けの位置づけ

5.2.1 述語項構造の違い

述語 sentir は他動性、自動性との使い分けを持つ述語である。述語 sentir の自他については、Picoche (1986) と Franckel (2004) の説明を挙げるができる。

(i) まず、Picoche (1986) は嗅覚動詞 (verbe olfactif) としての動詞 sentir の用法の中で、主語と目的語の述語項構造 (structure prédicative) の違いをめぐって、以下の二種類の用法を区別している。一つは、(5-5) のように sentir (香る、においがする) は「刺激を外に向けて発する」という意味をとり、Picoche (1986) はそれを「外面化」 (extériorisation) と呼んでいる。

(5-5) Ça sent la rose. (Picoche 1986: 124)

(薔薇のにおいがする。)

もう一つは、(5-6) のように sentir (嗅ぐ) は「刺激を受ける」というような意味をとり、それを「内面化」(intériorisation) と呼んでいる³⁷。

(5-6) La vendeuse m'a fait sentir plusieurs parfums. (ibid.)

(店員さんは私にいくつかの香水を嗅がせた。)

Picoche (1986) の説明に関する問題点としては述語項構造の違いを挙げることができる。(5-5) と (5-6) の間で変化している項目は補語定名詞句の数量ではなく、文全体の述語項構造である。(5-6) が意味しているのは「香水を嗅ぐ」という他動の意味であり、香りを発するのは香水(補語定名詞句) 自体である。それに対して、(5-5) の場合は「(部屋とかは) 薔薇のにおいがする」という自動の意味となり、薔薇のにおいがするのは薔薇(補語定名詞句) ではなく違う物である。

(ii) そして、Franckel (2004) は、外面化が可能であるのは、補語となる定名詞句が「においがする」という意味的素性を備えるときのみであることを指摘している。例えば、不可算名詞 air (空気) はそのままの状態だと、特別ににおいがしない

³⁷ この分類に加えて、Theissen (2011) は内面化の場合は、意志動詞としての sentir と無意志動詞としての sentir という二種類の用法を区別している。例えば、(1) の場合、主語 Marie は sentir の動作主であるが、(2) の場合、主語 on は sentir の経験者である。

(1) Marie a fait sentir le flacon à Pierre. (Theissen 2011: 115)

(マリーはピエールにボトルを嗅がせた。) (意志動詞)

(2) On sent les roses d'ici. (ibid.)

(薔薇のにおいがここまでしてくる。) (無意志動詞)

ということから、(5-7a) と言うときには「空気のおいがる。」というような外面化が不可能となるのである。それに対して、不可算名詞 *essence* (ガソリン) とは必ずにおいがるものであるので、(5-7b) と言うときには「ガソリンのおいがる。」のような外面化が内面化より優先される、ということである。

(5-7) a. ?Je sens l'air. (Franckel 2004: 118)

(私は空気のおいがる。)

(5-7) b. Je sens l'essence. (ibid.)

(私はガソリンのおいがる。)

Franckel (2004) の指摘によって、Picoche (1986) との区別した外面化としての *sentir* と内面化としての *sentir* という述語 *sentir* の多義性や述語項構造の違いは、まず補語定名詞句の意味上の違い (においがるかしないか) に依拠している、ということが分かる。

5.2.2 内面化、外面化における定名詞句単数形、複数形の関連付け

そこで、Franckel (2004) によれば、必ずにおいがる *rose* (薔薇) の場合は、外面化が優先されるべきである。しかし、(主語が人間の場合) 複数形 *les roses* の使用によって内面化の解釈が優先される。

(5-8) a. Tu sens la rose.

(あなたは薔薇のおいがる。) (外面化)

(5-8) b. Tu sens les roses.

(あなたは薔薇を嗅いでいる。) (内面化)

同じように、(5-9) のような非特定の用法³⁸ の定名詞句複数形の場合も内面化の解釈が優先される。

(5-9) a. J'aime sentir les roses et j'ai un ami à qui leur odeur donne la fièvre.

(Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*: 207)

(私は薔薇を嗅ぐのが好きだが、私の友達には、薔薇の香りを嗅ぐと熱が出てしまう人がいる。)

以上のことから、以下の二点を提案することができる。

(i) 一点目として、述語 *sentir* の他動性 (内面化) と自動性 (外面化) との使い分けは、Franckel (2004) の指摘した「においがする」という意味的素性の有無の問題より、単数形と複数形との使い分けの問題と関連付けるべきではないかと考えられる。

(ii) 二点目として、(外面化の解釈を優先している) 不可算名詞 *essence* や可算名詞単数形 *rose* と (内面化の解釈を優先している) 可算名詞複数形 *roses* との違い

³⁸ (5-9a) においては、述語 *sentir* の目的語は非特定の解釈をとる。というのは、(5-9a) における *les roses* は話者の世界 (*J'aime sentir les roses.*) と話者の友人の世界 (*J'ai un ami à qui leur odeur donne la fièvre.*) という異なる世界において同時に現れることができるからである。

は「ガソリンのにおい」あるいは「薔薇のにおい」の違いではなくむしろ「ガソリン」または「薔薇」における事例性の有無の違いではないかと考えられる。

5.3 薔薇の事例性

5.3.1 二種類のにおい

フランス語には、色や形と異なり、においの種類を指すための特別な語彙 (nom d'odeur) がない。種類としてにおいを特定化するためには、名詞 *odeur* (におい) を用いて、*odeur de rose* (薔薇のにおい) などというような複合名詞によって表現する必要がある。ここで注意すべき点は、においの種類を限定する名詞 *rose* (薔薇) が無冠詞となる点である。無冠詞名詞による限定は、定名詞句表現 *odeur de la rose* (その薔薇のにおい) や不定名詞句表現 *odeur d'une rose* (一本の薔薇のにおい) や指示限定詞表現 *odeur de cette rose* (この薔薇のにおい) とは解釈が全く異なる。無冠詞名詞による限定では、(百合とか、菊とか) 他の花のにおいの種類と対比した薔薇のにおいであるが、冠詞による限定名詞句では、他の薔薇ではなく、特定の薔薇のもつ属性としてのにおいである。

このように、においを二種類のにおいに区別することによって、定名詞句単数形 (5-4b) と定名詞句複数形 (5-9a) との違いを理解することができる。(5-4b) と (5-9a) における名詞 *rose* (薔薇) の単数形と複数形では、においの意味が異なり、次のような制約が生じることになる。

(i) 単数形表現 (5-4b) では、*odeur de rose* に置き換えることが可能である。

(5-4) b. *La cuisine sent la rose. Tu as vaporisé du parfum ?* (再掲)

(5-4) c. *La cuisine sent l'odeur de rose. Tu as vaporisé du parfum ?*

(ii) それに対して、複数形表現 (5-9a) の場合は、(内面化の意味で) *odeur de rose* に置き換えることが不自然となる。今回の場合、*odeur des roses* にしか置き換えることができない。

(5-9) a. *J'aime sentir les roses et j'ai un ami à qui leur odeur donne la fièvre.* (再掲)

(5-9) b. *?J'aime sentir l'odeur de rose et j'ai un ami à qui son odeur donne la fièvre.*

(5-9) c. *J'aime sentir l'odeur des roses et j'ai un ami à qui leur odeur donne la fièvre.*

5.3.2 補語定名詞句の指示的自立性

odeur de rose と *odeur des roses* の違いは種類あるいは属性としてののにおいとの違いである。種類を示す *odeur de rose* における *rose* は (においの) タイプとしての薔薇である一方、属性を示す *odeur des roses* における *rose* の場合は花としての薔薇である。その違いは、薔薇の事例性の問題にある。*odeur de rose* にしか置き換えることができない (5-4b) における定名詞句単数形 *la rose* はタイプを意味し、(現実世界において指示することができる) 指示対象を持たない。それに対して、*odeur des roses* に置き換えることができる (5-9a) における定名詞句複数形 *les roses* はお花を示し、指示対象を持っている。

指示可能の薔薇と指示不可能の薔薇との区別は、補語定名詞句の指示的自立性において現れている。指示上の自立性は、動詞の表す活動 *sentir* とは関係なく、*les roses* の対象が存在しているということに他ならない。これは「においがしなくても、薔薇が存在している」ということである。したがって以下のように、(5-9a) における定冠詞句複数形 *les roses* は、様々な薔薇の持つにおいを示し、文脈照応では、所有形容詞を用いて受け直し、*leur odeur* (それらの薔薇のにおい) と表現することができる。それに対して、単数形 *la rose* は所有形容詞で受け直すことができない。

(5-10) * *Ça sent la rose. J'apprécie son odeur.*

(薔薇のにおいがする。そのにおいが好きだ。)

この制約は、(5-9a) の場合の定名詞句複数形 *les roses* の対象が自立性を持っているのに対して、(5-4b) の場合の定名詞句単数形 *la rose* には指示的自立性がない、ということの意味している。では、指示上の自立性のない定名詞句単数形 *la rose* の対象はどのようなものだろうか。この問いに答えるためには、以下の二点を指摘することができる。

(i) まず、以下が示すように、(5-4b) のような *odeur de rose* の意味が発生できるのは定名詞句 *la rose* が述語 *sentir* の目的語として用いられる、すなわち動詞句中に位置づけられる場合のみである。主語としての *la rose* の場合は、*odeur de rose* の意味が発生することはない。

(5-11) a. *Ça sent bon la rose.*

(薔薇の良いにおいがする。)

(5-11) b.**La rose sent bon.*

(ii) そして、評価を表す形容詞が用いられるのは、その形容詞が述語 *sentir* に関わる場合のみであることも挙げることができる。

(5-11) c.**Ça sent la bonne rose.*

以上の二点から明らかなように、(5-9a) に対して、(5-4b) における定名詞句単数形 *la rose* が意味しているのは、現実世界において実現できる薔薇ではなく、述語 *sentir* を抜きにして薔薇のことを考えられないのである。(5-11a) における評価を表す形容詞 *bon* (良い) のように、(5-4b) における *la rose* は活動 *sentir* のタイプ (どのような *sentir* か) を表している。その結果として、今回の場合の薔薇は述語的意味をとり、(現実世界において) 指示することができないものである。

また、(5-4b) と同じように、「どのような釣り」や「どのような栽培」というようなタイプの意味をとる定名詞句単数形 (5-12) と (5-13) の例も挙げることができる。

(5-12) *Je pêche le goujon.* (Laparra 1988: 162)

(川ハゼ釣りをしている。)

(5-13) *Je cultive le radis.* (ibid.)

(大根栽培をしている。)

それらの例においても、定名詞句単数形を所有名詞句で受け直すことはできない。ここにおける *le goujon* (川ハゼ) や *le radis* (大根) は、Furukawa (2010) の挙げる *aller à l'hôpital* (入院する) のようなは内包的総称とは異なる振る舞いをしている。というのは、Corblin (2011: 64) の指摘するように、*pêcher le goujon* とは異なり、*aller à l'hôpital* の場合は照応することが可能であり、定名詞句単数形 *l'hôpital* は特定の解釈をとることができるからである。

(5-14) *Pierre pêchait le saumon. *Ce saumon était gros.* (Corblin 2011: 64)

(ピエールは鮭釣りをしていた。その鮭は大きかった。)

(5-15) *Pierre était à l'hôpital. Cet hôpital était très grand.* (ibid.)

(ピエールは病院にいた。その病院はとても広かった。)

この場合も、*pêcher* や *cultiver* という活動のタイプを意味している定名詞句単数形の対象は、実現することができない対象である。しかし、どのような述語でも実現しない補語定名詞句を持つことができるわけではない。例えば *manger* (食べる) を例にしてみると、(5-4b) や (5-12) や (5-13) とは異なり、*manger* という活動は実現しない目的語をとることができない。

(5-16) **Je mange le radis.* (Laparra 1988: 162)

(大根を食べる。)

(5-17) **On mange le goujon.* (ibid.: 166)

(川ハゼを食べる。)

フランス語では、*tuer*（殺す）などと同じように、*manger*（食べる）という出来事の意味論的特徴としては、目的語の対象の実現が前提とされるということを挙げることができる。それに対して、*sentir*（香る、においがする）や *pêcher*（釣る）や *cultiver*（栽培する）というような出来事の場合は、目的語の対象の実現が必ずしも前提とされないのである。

このように、*sentir* の場合に戻ると、目的語の対象が実現する用法（例 5-9a）と目的語の対象が実現しない用法（例 5-4b）が見られる。そして、見てきたように、対象が実現する用法は定名詞句複数形（*sentir les roses*）の場合である一方、対象が実現しない定名詞句単数形（*sentir la rose*）の場合である。では、定名詞句単数形と複数形との使い分けによって対象が変わるというこの現象は、一体何に起因しているのだろうか。

5.4 嗅覚表現としての定名詞句単数形と複数形の再定義

5.4.1 定名詞句の単数形 *la rose* における「薔薇性」の概念的意味

その問いに答えるために、まず、(5-4b) のこのような *odeur de rose* の意味が発生することができるのは定名詞句の場合のみであることを挙げたい。これに関して、Furukawa (2006: 221) では次のように言及している。

Les expressions nominales qui apparaissent après le verbe *sentir* (au sens de « dégager une odeur de ... », propre au figuré) présentent de curieux aspects en ce qui concerne les déterminants qu'elles prennent. Elles prennent l'article défini. (Furukawa 2006: 221)

((比喩的用法で「何らかのにおいを発生する」を意味する) 動詞 *sentir* の後ろに現れる名詞句の限定は特別である。というのは、それらの名詞句は定名詞句であるからである。)

不定名詞句は必ずしも不可能とは言えないが、不定名詞句が可能であるのは以下のような場合においてのみである。

(5-18) a. *Ça sent un poisson. (David 2002: 86)

(5-18) b. Ça sent un poisson ... peut-être le saumon. (ibid.)

(魚のにおいがする。おそらく鮭のにおいが。)

このことから、(5-4b) のような意味を理解するためには、第 4 章で論じたフランス語における定冠詞の振る舞いと同様な説明ができるのではないと思われる。第 4 章でまとめたように、(4-1) という文における総称的解釈は文レベルにおいて行われる *femme* (女性) と *homme* (男性) の概念相互の対立によって構築される意味であった。そして、その場合の総称は属性的総称であり、「女性性」という概念的意味が成り立っていた。その場合において用いられたのは定名詞句単数形であった。

そこで、(5-4b) という文においても (4-1) の場合と同じようなメカニズムが見られる。例えば、嗅覚表現として定名詞句単数形 *la rose* が一番用いられやすい文脈は、婉曲表現としての否定形 *ne pas sentir la rose* であり、否定形表現 *ne pas sentir la*

rose の使用によって rose は何らかの対立の中に置かれており、「薔薇のにおいどころか実際は臭い」というような相互の対立が感じられてくる。

(5-19) *Ça ne sent pas la rose.*

(薔薇のにおいどころか実際は臭い。)

肯定形表現 *sentir la rose* の場合も、同じような対立性が働いていると考えられる。これは、自動詞 *sentir* の示す「においの発生」という外面化の意味によっては、*sentir la rose* / *sentir la violette* のような（発生した）においの分類化が考えやすいからである。このように、自動詞 *sentir* の使用がにおいの分類をを前提とし、その場合は内的対立が暗に示されていると考えている。（好みの）分類を前提とする好みを表す述語としての *aimer*（好きである）についても同じ指摘ができる。したがって、(5-20) における定名詞句単数形 *la fraise*（苺）は、物質性のない「苺の味」を示す。

(5-20) *J'aime la fraise.*

(苺が好きだ。)

つまるところ、(4-1) の場合と同じように、ここでも文レベルにおいて行われる対立化によって、*rose* の性質に焦点が当てられている。*rose* は概念として捉えられており、「薔薇のにおい」より「薔薇性」のような概念的意味をとるのだと思われる。

5.4.2 定名詞句複数形 *les roses* における「プロトタイプの属性化」の多様性の意味

では、本章の問題点として指摘した定名詞句単数形 (5-1a) に現れる「薔薇性」という意味と定名詞句複数形 (5-2) に現れる意味の違いはどのような違いだろうか。その問いへの答えとしては、まず、定名詞句複数形 (5-9a) と同じように、定名詞句複数形 (5-2) の場合においてもまた定名詞句補語の代名詞化あるいは所有名詞化が可能であるという点を挙げよう。

(5-21) a. *La cuisine sent les roses. Tu en as dans ton jardin ?* (代名詞化)

(台所は薔薇のにおいがする。庭に薔薇があるの?)

(5-21) b. *La cuisine sent les roses. Leur odeur me donne la fièvre.* (所有名詞化)

(台所は薔薇のにおいがする。薔薇の香りを嗅ぐと私は熱が出てしまう。)

以上のことから、(5-1a) における単数形表現 *la rose* の場合 *sentir* という活動の特徴づける「薔薇性」という解釈をとるのに対して、複数形表現 *les roses* の場合は、概念ではなく現実世界に位置付けることができる指示対象としての「薔薇の花」だと思われる。したがって、(5-2) に現れる *les roses* は、「庭の薔薇の花」のように指示することができることを示している。

そこで、*cuisine* (台所) の場合庭やバルコニーやテーブルの上などに潜在的に置いてある薔薇の花を想像しやすい一方、*mouchoir* (ハンカチーフ) の場合は、このような想像は簡単とは言えない。したがって、問題なく *La cuisine sent les roses.* と言えるのに対して、? *Le mouchoir sent les roses.* と言えるコンテキストは非常に限られている。

(5-20) と (5-22) の違いについても同じ指摘ができるのだろう。(5-20) における定名詞句単数形 *la fraise* は、指示対象も個性もない「莓性」を示す。その場合は、*la fraise* の一つの意味として、個別性も指示性もない「莓の味」があり得るのではないだろうか。それに対して、(5-22) における定名詞句複数形 *les fraises* の場合は、具体物としての「莓の果物」であり、具体性を前提とする「莓を食べるのが好きだ。」というような意味になる。

(5-20) *J'aime la fraise.* (再掲)

(5-22) *J'aimes les fraises.*

(莓を食べるのが好きだ。)

そこで、これまでの分析に加えて、指示対象としての薔薇を描写する (5-4b) や (5-9a) のようなコンテキストの場合は、定名詞句複数形 *les roses* が必要となる、というもう一つの点を挙げたい。言い換えるならば、指示対象としての薔薇を、述語 *sentir* の目的語として用いることができるために複数形の使用が必要である、ということである。それは一体何故だろうか。この問いの答えとして考えられるのは、以下の特定の用法の比較が示すように、一本だけの花からはにおいがし難いからである。反対に、複数の花の場合は、においが発生してもおかしくない。

(5-23) a. ?*Ça sent la rose de la cuisine.*

(台所にある薔薇の一本のにおいがする。)

(5-23) b. *Ça sent les roses de la cuisine.*

(台所の薔薇のにおいがする。)

しかし非特定の用法の定名詞句 (5-4b) と (5-9a) の場合は、定名詞句複数形 *les roses* が意味するのは複数性ではない。以下が示すように、(5-4b) と (5-9a) における *les roses* を (薔薇の属性である) *l'odeur des roses* に置き換えることができるので、今回の場合に現れる定名詞句複数形 *les roses* の意味は *l'odeur des roses* という属性的意味である。

(5-4) b. *La cuisine sent les roses. Tu as des roses dans ton jardin ?* (再掲)

(5-4) d. *La cuisine sent l'odeur des roses. Tu as des roses dans ton jardin ?*

(5-9) a. *J'aime sentir les roses et j'ai un ami à qui leur odeur donne la fièvre.* (再掲)

(5-9) c. *J'aime sentir l'odeur des roses et j'ai un ami à qui leur odeur donne la fièvre.* (再掲)

以上のことから、複数形の場合に現れる意味は、前章にて分析してきた「プロトタイプ」の多様性の意味だと考えている。しかし、(4-2) の場合「プロトタイプの一般化」という総称的意味であったが、(5-4b) と (5-9a) の場合は、複数形の使用によって、「プロトタイプの属性化」が行われる。このように、(5-4b) と (5-9a) における複数形 *les roses* の示す「薔薇 A / 薔薇 B / 薔薇 C」のような指示カテゴリーは、今回の場合は、「薔薇のプロトタイプのなにおい」「プロトタイプのな薔薇のにおい」という属性的意味をとるのである。

本論文のこれまでの分析で名詞複数形の使用における叙述の役割を明らかにしてきたと同じように、(5-4b) と (5-9a) における *rose* のプロトタイプの属性への焦点化においては、述語 *sentir* も影響を与える。それに関しては、以下の二点を挙げるることができる。

(i) まず、定名詞句複数形 *les roses* が *l'odeur des roses* の属性的意味をとることができるのは、目的語の場合のみである、という点である。

(5-24) a. *Les roses sentent.*

(薔薇はにおいがする。)

(5-24) b. **L'odeur des roses sent.*

(ii) 二点目は、指示対象の属性化が可能であるのは、(前節にて述べてきたように) *sentir* のような質的意味をもたらす述語の場合のみである、という点である。例えば、*acheter* (買う) の場合は、*acheter les roses* (薔薇を買う) というような非特定の属性化が不可能である。これに対し、述語 *sentir* と同じように、述語 *aimer* (好きである) は目的語の性質を問題とする述語である。その場合も、目的語定名詞句複数形の意味が属性化される。例えば、(5-25) における定名詞句複数形 *les chats* (猫) の意味は、猫その動物自体ではなく、むしろ(猫の属性である)猫の性格や見た目などである。

(5-25) *J'aime les chats.*

(私は猫が好きだ。)

また、(5-26) における定名詞句複数形 *les romans* (小説) についても同じ指摘ができる、以下の文の意味は「私は小説の話や書き方が好きだ。」という属性的意味だと考えている。

(5-26) J'aime les romans.

(私は小説が好きだ。)

本章では、フランス語における非特定の用法の目的語定名詞句単数形と複数形との使い分けに焦点を当てて、分析を行った。結論としては、定名詞句単数形 (5-1) と定名詞句複数形 (5-2) のような使い分けの主要な原因として考えられるのは、*rose* の数量的振る舞いではなく、*rose* の意味形成の問題である。(5-1) における *rose* は嗅覚のタイプである一方、(5-2) の場合における *rose* は具体物としての嗅覚源である。しかし、以上に論じたように今回の場合も、この嗅覚源は不可算で非特定のなものであり、複数形を使用することによって「プロトタイプの薔薇のにおい」の多様性の意味が成立することになるのである。

第6章 名詞複数形における意味的凝結化

6.1 問題提起

前章にて述べてきたように、(5-2) などのような定名詞句複数形の意味は非特定のであるにも関わらず、非特定の意味の中においては指示対象があり、複数形の使用によって指示対象の属性化が行われる、ということが言える。それに加えて、これまで分析してきた（不定名詞句、定名詞句）複数形の意味においても、同じように、指示対象のファクターが観察されるのである。

しかし、名詞複数形の使用を指示対象の意味形成の問題と捉えるこの観点からは、一見すると、指示対象のない名詞複数形の使用は論じることができないようにも見える。指示対象のない名詞複数形という矛盾がはっきり現れているのは非特定の用法の目的語定名詞句複数形 *mettre les voiles*（逃げる）などのようなフランス語における凝結表現（*tournure figée*）である。Gross（1993: 36）は凝結表現を「動詞表現を構成する要素の結合に意味を還元できない表現」（« des expressions dont on ne peut pas déduire le sens à partir du sens des combinaisons des mots qui les composent »）として定義している。例えば、フランス語の *mettre les voiles*（逃げる）を例にしてみると、他動詞 *mettre*（ある場所に何かを置く）と目的語 *voile*（帆）との結合によって成り立つ意味、すなわち「帆を上げる」ではなく、動詞句全体で「逃げる」という意味になり、*mettre les voiles* に現れる補語名詞は動詞と結合して一概念（逃げる）を表している。このことから、この種の名詞複数形は、指示対象を持たないのではないか、ということが言える。

従来の先行研究においては、意味的凝結化 (*figement sémantique*) の発生、特に補語名詞の単数形 (**mettre la voile*) と複数形 (*mettre les voiles*) の選択に関する説明は、語源学者や文体論学者の範疇の問題とされてきた。その結果、この問題は言語学的には等閑視され、Slakta (1969: 87) の言葉を借りれば「生まれつきまったく混沌とした」 (*« un tout naturellement chaotique »*)、規則性が放棄されてしまった問題として扱われることがなかったのである。つまり、それらの凝結表現の補語名詞の単数形と複数形のどちらを用いるのかという選択制限を説明することができるような文法規則、すなわち再現性のある規則などまったく存在しない、と考えられてきたのである。

語彙論と統辞論とが絶対的に分断されていた時代にあっては、統辞論のみが音韻論とともに文法における重要項目だとみなされており、語彙論は過小評価されていた。しかし、この分断は実際のところ、近年になって解消されつつある。このことから、凝結表現における目的語の単数形と複数形における制約的な振る舞いについて、言語学的に説明することは可能であると思われる。

本章では、凝結表現における補語名詞の単数形と複数形の選択がどのような文法規則によって行われるのかを考察する。そのためには、まず続く節において、不定名詞句の場合を検討してから、その後、定名詞句の場合についても検討する³⁹。

³⁹ 部分名詞句の意味的凝結化の場合もあるが、名詞複数形の使用は見出されないの
で、分析対象外とする (*prendre de la bouteille* 年季が入る, *vendre du rêve* 夢を売る,
avoir de la conversation 話がうまい, *prendre de l'âge* 年をとる, *manger du lion* 荒狂っ
ている, *toucher du bois* 厄除けをする, *avoir du temps* 時間がある, *avoir de la gueule* 格好が
いい, *avoir de la chance* 運がいい)。

6.2 凝結表現における目的語不定名詞句単数形と複数形との使い分け

6.2.1 動詞相当語句における無冠詞述語名詞

まず、次節において凝結表現について見る前に、（凝結表現とは異なり）補語名詞の語彙的意味を還元する動詞相当語句（locution verbale）の場合を挙げておきたい。

『新フランス文法辞典』（2002: 291）において動詞相当語句は「動詞と他の語が一体をなしてひとつの概念を表し、一種の合成語を作るもの」として定義されている。例えば、porter secours（援軍を送る）という「動詞 + 名詞」のような合成は secourir（救助する）という一つの出来事を意味する。

(6-1) a. porter secours（援軍を送る） = secourir（救助する）

(6-1) b. avoir recours（助力を求める） = recourir（頼る）

(6-1) c. avoir connaissance（知識をもつ） = connaître（知る）

Damourette & Pichon（1911-1940: 957-992）は、「主語 — 目的語」の意味構造の違いをめぐって、目的語が自立性を持たない場合はそれを「補語融合」（complément coalescent）と呼んでいる⁴⁰。Damourette & Pichon によって提案された「補語融合」という考え方によれば、形式上は、動詞の目的語だと捉えられやすいが、意味的には動詞と一体化した補語と捉えられる。例えば上で見た動詞慣用句に現れる動詞は、自立した述語的用法として説明することはできず、むしろ動詞に後置される補語名

⁴⁰ Valli（2007: 47-48）を参照のこと。

詞が述語的要素として機能している。このように、動詞相当語句に現れる合体性を持たない目的語は「述語名詞」である。述語名詞は逆派生 (*dérivation régressive*) による語形成の一種であり、動詞の接尾辞と思われる部分の除去によって形成される新語である。例えば、*secourir* > *secours* や *recourir* > *recours* などである。述語名詞を目的語とする以下のような動詞は「支持動詞」 (*verbe support*) とされている⁴¹。

補語名詞の述語性に関しては、以下の二つの場合を挙げることができる。

(i) 一点目として、(6-1a)、(6-1b) などのように補語融合における名詞は出来事を表す場合があることが挙げられる。

(ii) 二点目として、補語融合における名詞は何らかの状態を表す場合もある。

(6-2) a. *avoir faim* (空腹である)

(6-2) b. *avoir soif* (のどが渇く)

(6-2) c. *avoir horreur* (憎しみをもつ)

(6-2) d. *avoir peur* (恐怖をいただく)

その場合において、補語名詞の表している状態の程度を示すことは可能である。

(6-3) a. *avoir très faim* (お腹がペコペコである)

(6-3) b. *avoir bonne connaissance* (～様のことを存じている)

(6-3) c. *avoir bien peur de* ~ (恐れ入る)

⁴¹ Harris (1964) を参照のこと。

6.2.2 動詞相当語句における不定名詞句複数形

前節にて紹介した動詞相当語句の例は無冠詞の例であるが、動詞相当語句の補語名詞が不定名詞句の場合もある。以下が示すように、状態を表す名詞の場合、不定冠詞を用いるためには意味をより狭く限定するために名詞概念の下位カテゴリーを明確化する必要がある。

(6-4) a. avoir faim (空腹である) > avoir une faim de loup (猛烈に空腹である)

(6-4) b. avoir soif (のどが渇く) > avoir une soif de chameau (猛烈にのどが渇く)

(6-4) c. avoir horreur (憎しみをもつ) > avoir une sainte horreur (猛烈な憎しみをもつ)

(6-4) d. avoir peur (恐怖をいただく) > avoir une peur bleue (ひどく怖がる)

(6-4) e. avoir mal (痛む) > avoir un mal de chien (ひどく痛む)

また、出来事を表す不定名詞句の場合もある。その場合は、不定名詞句単数形も複数形も可能である。

(6-5) a. faire un saut (ジャンプする) / faire des sauts

(6-5) b. faire une fente (ひびを入れる) / faire des fentes

(6-5) c. donner une gifle (平手打ちを食わせる) / donner des gifles

しかし、前節で扱った状態的意味の場合も、本節で扱う出来事的意味の場合においても、これらの不定名詞句には指示対象の外延を問題にすることができないので、

数量を表すことができない。したがって、(6-5a) ~ (6-5c) のような出来事を表す補語名詞の場合における不定名詞句複数形の意味は（補語名詞の外延を問題とする）複数性ではなく（出来事の数の問題とする）度数の意味である。

6.2.3 凝結表現における不定名詞句複数形

これまで観察してきた動詞相当語句とは異なり、凝結表現の場合に現れる補語名詞は、語彙論的には、述語的意味を持たない名詞である。それは、動詞 *gifler* から派生した名詞 *gifle*（平手打ち）と動詞から派生しない *veste*（ジャケット）との違いである。そこで、*se prendre une veste*（フラれる）という凝結表現の補語名詞として *veste* が用いられる場合は、元々は述語的意味を持たない名詞 *veste* は「フラれる」のような述語的意味をとってしまうのである。同じように、例えば *poser un lapin*（約束をすっぽかす）という凝結表現の場合も、*lapin*（うさぎ）は「拒絶」や「ドタキャン」のような述語的意味をとることが明らかだと言えるだろう。

(6-6) a. *se prendre une veste*（フラれる）

(6-6) b. *poser un lapin*（約束をすっぽかす）

そこで、これらの凝結表現における補語名詞が述語名詞のように働いているのであれば、前節において見てきたように、不定名詞句単数形や複数形の使用が許されるのではないだろうか。このように、以下の凝結表現の補語名詞としては不定名詞

句単数形と複数形とのいずれもが可能であり⁴²、今節の不定名詞句複数形の意味も「出来事の度数」の意味と同様だと考えられる。

- (6-7) a. se prendre une veste (フラれる) / se prendre des vestes
- (6-7) b. piquer une crise (かっとなる) / piquer des crises
- (6-7) c. passer un savon (大目玉を食らわす) / passer des savons
- (6-7) d. tailler un costard (～の文句を言う) / tailler des costards
- (6-7) e. jeter un froid (気まずくさせる) / jeter des froids
- (6-7) f. piquer une tête (泳ぐ) / piquer des têtes
- (6-7) g. faire un vélo, un fromage (大げさに考える) / faire des vélos, des fromages

⁴² 以下の凝結表現においては不定名詞句単数形のみが許される。今回の場合は、否定形 *ne~pas* または制限形 *ne~que* のような構文構造が見られる。これらの例では対象の数量が問題とされていると考えられる。否定形 *pas une miette* や *pas un clou* の場合は *miette* (パンくず) や *clou* (釘) は非特定のだが一つのパンくず、一本の釘を指示する。制限形 *qu'un cheveu* の場合は数量的に一本だけの *cheveu* (髪の毛) のケースに制限される。

- (1) *ne pas perdre une miette* (ひとかけらの～もない) / **ne pas perdre des miettes*
- (2) *ne pas valoir un clou* (三文の値打もない) / **ne pas valoir des clous*
- (3) *ne tenir qu'à un cheveu* (間一髪である) / **ne tenir qu'à des cheveux*

以上の例とは異なり、以下の例の場合は、意味的凝結化が行われるのは不定名詞句複数形の場合のみである。それは一体何故だろうか。複数形による意味的凝結化の説明として、今回も補語名詞の述語化の現象を挙げることができる。というのは、以下の *prendre des coups* (いじめる) , *faire des histoires* (大騒ぎする) , *raconter des salades* (でたらめを言う) , *avoir des biscuits* (情報を知る) などの表現の意味は、出来事の度数を前提とするからである。例えば、*avoir des biscuits* が意味するのは、様々な話を何回も聞くことによって誰か／何かについての情報を知るという度数的なシチュエーションである。以下の例についても同じ指摘ができる。

- (6-8) a. *avoir un biscuit* (一個のクッキーを持つ) / *avoir des biscuits* (情報を知る)
- (6-8) b. *prendre un coup* (1回打たれる) / *prendre des coups* (いじめられる)
- (6-8) c. *faire une histoire* (一つの物語を作る) / *faire des histoires* (大騒ぎする)
- (6-8) d. *faire une salade* (一つのサラダを作る) / *raconter des salades* (でたらめを言う)

6.3 凝結表現における目的語定名詞句単数形と複数形との使い分け

次に、補語名詞が定名詞句の場合を検討したい。定名詞句の場合における単数形と複数形との使い分けは、今回の場合も名詞の数量を問題とする単複的使い分けではなく、むしろ(名詞のレベルを超える)談話のレベルで決定される非単複的使い分けである。

6.3.1 唯一の事物

まず、単数形と複数形との使い分けを不可能とする唯一の事物の例について見る。例えば、*la lune*（月）や *le nord*（北）のように対象が必ず単一である名詞概念の場合である。

(6-9) a. *décrocher la lune*（不可能な事を試みる）

(6-9) b. *aboyer à la lune*（わめき立てる）

(6-9) c. *perdre le nord*（気が動転する）

また、量塊（*masse*）の場合も単数形と複数形との使い分けは普段不可能なものである⁴³。

(6-10) a. *observer le silence*（静かにする）

(6-10) b. *prendre l'air*（散歩に出る）

(6-10) c. *pomper l'air*（うんざりさせる）

(6-10) d. *glacer le sang*（おびえさせる）

(6-10) e. *rouler sur l'or*（大金持である）

(6-10) f. *tuer le temps*（暇つぶしをする）

(6-10) g. *pédaler dans la choucroute*（悪あがきする）

⁴³*prendre des airs*（格好をつける）や *se ronger les sangs*（とても心配する）などのように不可算名詞複数形の例もあり得る。不可算名詞複数形に関しては、次章を参照のこと。

(6-10) h. remuer la boue (スキャンダル好きである)

(6-10) i. se jeter à l'eau (思い切ってやる)

(6-10) j. ouvrir le feu (砲門を開く)

形容詞派生の名詞の場合も同じである。

(6-11) a. prendre le large (逃げ出す)

(6-11) b. souffler le chaud et le froid (矛盾した態度をとる)

(6-11) c. aller à l'essentiel (はっきりする)

6.3.2 部分関係をめぐる定名詞句単数形と複数形

部分関係 (méronymie) を表す定名詞句の場合、単数形と複数形との使い分けが部位関係によって決定されている。部位関係とは、部分と全体の関係である。例えば、身体の部位を指し示す名詞である「手」と「指」の例を挙げることができる。「指」が部位語 (méronyme) や部分語 (partonyme) と呼ばれている一方、「手」は全体語 (holonyme) と呼ばれている。以下の例において、(身体の部分を指し示す) 部位語の対象の範囲は (誰か他人の体である) 全体語の対象の範囲の中において限定されている。まず、部位語は単数形の場合がある。

(6-12) a. arranger le visage (顔をつぶす)

(6-12) b. bourrer le crâne (人のかつぐ)

そして、部位語は複数形の場合もある。

(6-12) c. botter les fesses (叱る)

(6-12) d. casser les pieds (邪魔をする)

(6-12) e. lécher les bottes (おべっかを使う)

それに対して、以下の例の場合においては、全体語は自分の体である。今回も、部位語は単数形の場合と複数形の場合がある。

(6-13) a. avoir X dans la peau (惚れている)

(6-13) b. perdre la tête (頭がぼける)

(6-13) c. tourner le dos (逃げ出す)

(6-13) d. monter à la tête (酔わせる)

(6-13) e. avoir les pieds sur terre (堅実である)

(6-13) f. casser les pieds (迷惑をかける)

(6-13) g. montrer les dents (おどす)

(6-13) h. serrer les fesses (怖がる)

自分の身体を示す場合、定冠詞を所有形容詞で言い換えることができる時もある。ここでは部位語と全体語の間における所有関係によって定名詞句の文法数が決定される。以下の部位語は体の一部である。今回も単数形と複数形の場合もある。

- (6-14) a. ouvrir son cœur (明かす)
- (6-14) b. n'en faire qu'à sa tête (頑固である)
- (6-14) c. avaler sa langue (黙り込む)
- (6-14) d. prendre son pied (楽しむ)

- (6-14) e. perdre ses nerfs (怒りだす)
- (6-14) f. ouvrir ses oreilles (注意深く聞く)

また、以下の部位語は服である。

- (6-15) a. payer de sa poche (自腹を切る)
- (6-15) b. retourner sa veste (変節する)
- (6-15) c. mouiller sa chemise (身を危うくする)
- (6-15) d. rendre son tablier (辞任する)
- (6-15) e. vider son sac (秘密を告白する)
- (6-15) f. baisser son pantalon (自状する)

6.3.3 空間関係をめぐる定名詞句単数形と複数形

ここでは空間関係によって決定される定名詞句単数形と複数形の使い分の例を挙げる。例えば、*tomber dans les pommes* (気絶する) のような場合に現れる *pomme* (りんご) は動作主より必ず小さい物である。そのことから、**tomber dans la pomme* というような言い方は不可能となる。反対に、動作主より大きいものである

marmite (鍋) や piège (罠) の場合、tomber dans la marmite (囲まれて育つ) や tomber dans le piège (罠にかかる) は可能とされる。

(6-16) a. tomber dans les pommes (気絶する) / *tomber dans la pomme

(6-16) b. tomber dans la marmite (囲まれて育つ) / *tomber dans les marmites

(6-16) c. tomber dans le piège (罠にかかる) / *tomber dans les pièges

それに関しては、以下の例も挙げる事が可能である。

(6-17) a. aller au lit (寝る) / *aller aux lits

(6-17) b. aller aux fraises (女連れで森に行く) / *aller à la fraise

(6-17) c. aller sous les fleurs (死ぬ) / *aller sous la fleur

同じように、以下の例においても二つの対象の間における空間関係によって定名詞句単数形と複数形との使い分けが決まるのだろう。

(6-18) a. avoir le cœur sur la main (親切である)

(6-18) b. avoir la puce à l'oreille (用心する)

(6-18) c. avoir la peur au ventre (怖がる)

(6-18) d. avoir le rythme dans la peau (リズム感がある)

(6-18) e. avoir le couteau entre les dents (攻撃的である)

(6-18) f. avoir le couteau sous la gorge (脅迫されている)

(6-18) g. avoir la tête dans le pâté (二日酔いである)

(6-18) h. avoir la tête dans les nuages (ぼんやりしている)

(6-18) i. avoir le moral dans les chaussettes (落ち込む)

また、以下においてもそのような空間関係は部位関係に相当することが言えるの
だろう。

(6-18) j. mettre la charrue avant les bœufs (物事の順序を逆にする)

(6-18) k. prendre le taureau par les cornes (難局に立ち向かう)

6.3.4 定名詞句単数形における対比的非特定化

ここまでにおいて明らかにしてきたように、定名詞句単数形の使用は、名詞句レベルではなく、それを越えて、文レベルにおいて行われる対立化を考慮しなければならなかった(例 4-1, 例 5-4b)。ここで注目したいのは、凝結表現のケースの場合においても、同じような対立化の現象が見られる点である。例えば、voir le jour (生まれる) は ne plus voir la nuit (もう夜ではない) というような対立を暗示していると考えている。また、この現象が明らかに見える例としては、下位カテゴリーによる対立化のケースを挙げることができる。例えば prendre le voile (尼になる) は prendre le voile religieux のことである一方、同じように、jeter la pierre (非難を攻撃する) は jeter la première pierre (まっさきに石を投げつける) である。

(6-19) a. voir le jour (生まれる)

(6-19) b. prendre le voile (尼になる)

(6-19) c. avoir le dernier mot (捨て台詞を吐く)

(6-19) d. avoir la grosse tête (でかい面をする)

また、対立化のこの現象については、前置詞 **dans** を前置詞 **à** に言い換えると、定名詞句において意味的凝結化が生まれることがある。

(6-20) a. tomber dans l'eau (水におちる) > tomber à l'eau (だめになる)

(6-20) b. être dans la rue (道にいる) > être à la rue (路上生活者となる)

(6-20) c. mettre dans le placard (戸棚の中に置く) > mettre au placard (のけ者にする)

(6-20) d. passer dans la trappe (揚戸に入る) > passer à la trappe (忘れられる)

(6-20) e. jeter dans la poubelle (ゴミ箱の中に捨てる) > jeter à la poubelle (ぼい捨てにする)

以上のな意味の変化の理由は、前置詞 **dans** とは異なり、変化を表すものとして前置詞 **à** の使用が概念相互の対立化を行うからである。

(6-21) a. Le temps tourne à la pluie. (Marque-Pucheu 2008: 86)

(雨が降りそうだ。)

(6-21) b. Le papier a viré au jaune. (ibid.)

(紙が黄色くなった。)

6.3.5 定名詞句単数形における部位関係の位置づけ

前節にて述べてきた定名詞句単数形における対比的非特定化は、「非部位関係」の形をとる場合もある。例えば、以下の凝結表現に現れる補語名詞の意味においては部位関係が潜在すると考えており、page (ページ), œil (目), mur (壁), porte (ドア), doigt (指) のいずれもを、livre (一冊), visage (顔), maison (家), bâtiment (建物), main (手) の部位語として捉えることができる。

(6-22) a. tourner la page (別の問題に移る) : page (ページ) / livre (一冊)

(6-22) b. avoir l'œil (すべてに目を配っている) : œil (目) / visage (顔)

(6-22) c. faire le mur (無断で抜け出す) : mur (壁) / maison (家)

(6-22) d. prendre la porte (立ち去る) : porte (ドア) / bâtiment (建物)

(6-22) e. mettre le doigt sur (指摘する) : doigt (指) / main (手)

そこで、意味論的な観点から見ると、全体語との関係の中において置かれる部位語は複数形の形で現れるべきである、という点を挙げたい。例えば、一冊の本の中には複数のページがあるべきである。同じように、顔には目が二つある、刑務所の壁が複数である、建物／会社の中には複数のドアがある、手には複数の指があるべきである。

定冠詞は、不定冠詞との相違点として、分類を表す形容詞が用いられない場合において全部の中から一事例を採取できないものである。それは、不定冠詞表現 *une page parmi des pages* (複数のページの一枚) と言えるのに対して、定冠詞表現 **la page parmi les pages* とは言えない、という違いである。したがって、(6-22a) ~

(6-22e) における定名詞句単数形の使用によって部位関係が成り立つことができないのである。言い換えれば、その場合は、「非部位関係」となってしまう、ということである。

(6-23) a. les pages du livre (部位関係) / *la page du livre (非部位関係)

(6-23) b. les yeux du visage (部位関係) / *l'oeil du visage (非部位関係)

(6-23) c. les murs de la prison (部位関係) / *le mur de la prison (非部位関係)

(6-23) d. les portes du bâtiment (部位関係) / *la porte du bâtiment (非部位関係)

(6-23) e. les doigts de la main (部位関係) / *le doigt de la main (非部位関係)

このように、部位関係を具体的に観察してみると、定名詞句単数形の使用が決定的である。定名詞句単数形が部位語の意味を持たなくなる場合には、意味的凝結化が生じるのである。その理由としては、全体語が考慮されている場合、le N は le N à l'intérieur du X (概念 X 中の le N) (la page à l'intérieur du livre 一冊の本の中の 1 枚のページ) という意味をとり、le N と言う時には X 中にある他の N としか対立できない同じ概念中の対立となる。それに対して、tourner la page などのように全体語が考慮されなくなる場合は、le N à l'intérieur du X ではなく le N et le X (le N と le X) というような概念相互の対立になると考えている。これは、第 4 章にて説明してきたように、概念的解釈が成立する、ということである。

6.3.6 定名詞句複数形における「プロトタイプ」の非特定の意味

単数形ではなく、定名詞句複数形の使用による意味的凝結化の場合もある。以下の例においては、統辞論的には名詞単数形を名詞複数形に置き換えることが可能であるが、意味論的には名詞複数形となると、動詞句の意味全体が変わってしまい、意味的凝結化が行われることになるのである。

(6-24) a. *mettre la voile* (帆を上げる) / *mettre les voiles* (逃げる)

(6-24) b. *raser le mur* (壁すれすれに行く) / *raser les murs* (身を隠す)

前節とは異なり、(6-24a) と (6-24b) に現れる名詞複数形は部位語の意味を持っており、船の中に複数の帆があり、街の中に複数の壁があるのである。したがって本節の場合は、補語名詞の意味は、非部位語にあるのではなく、むしろ第 4 章と第 5 章にて述べた定名詞句複数形におけるプロトタイプという非特定の意味だと考えられる。例えば、以下の定名詞句複数形 *les choses* の示す意味は、「いろんな物事の中で一番意味のある、重要である物事」というようなプロトタイプの意味である。

(6-24) c. *dire la chose* (何かを言う) / *dire les choses* (はっきり物事を言う)

本章では、フランス語の凝結表現の場合において、定名詞句単数形と複数形の選択の一番の原因は、対象の数量的振る舞いにあるのではなくむしろ意味表示構造のレベルにおいて現れる違いの問題にあることを検討した。意味的凝結化の現象において、これまでは語彙論的なものとしてしか扱われてこなかった単数形と複数形と

の使い分けが果たしている言語学的役割を示した。そして、本章の問題点として提起した指示性の問題に戻ると、意味のレベルでは、凝結表現 *mettre les voiles* などにおける名詞複数形 *voiles* は「帆」の語彙的意味を取らず、合体性がないことは明らかであるが、実際のところ、「逃げる」というような意味は、（定名詞句複数形の使用による）指示対象としての *voile* のプロトタイプ化／非特定化に由来するのである。

第7章 不可算名詞の複数形

7.1 問題提起

第1章にて見たように、一般にフランス語における名詞複数形は、単数形からの派生形として説明される。しかし第2章から第6章までの分析からわかるように、名詞複数形を単に単数対象の複数化と捉えると、数量的に複数性を表さないフランス語の複数形表現を説明することができない。そのことがはっきり現れているもう一つの例は、**sable**（砂）のような不可算名詞である。例えば、複数表現（7-1a）は、単数表現（7-1b）の複数を表しているとは言えない。

(7-1) a. L'avion pénétra dans les sables du désert.

（飛行機は砂漠の中を飛行した。）

(7-1) b. L'avion pénétra dans le sable du désert.

（機体は砂漠の砂の中に突っ込んだ。）

単数形 **le sable du désert** と複数形 **les sables du désert** の違いは、名詞 **sable**（砂）の表す量の多少の差ではなく、むしろ述語全体の解釈の違いに関わっている。複数形 **pénétrer dans les sables du désert** の場合は、述語 **pénétrer**（潜り込む）が意味するのは「フライトの路線としての砂漠に入ること」である。それに対して単数形 **pénétrer dans le sable du désert** の場合は「物質としての砂漠の砂に入り込むこと」と解釈される。前者の場合、乗客は無事であるが、後者では飛行機はクラッシュしてしまう。

この例から分かるように、les sables のような不可算名詞複数形は、数量的な複数化という観点から説明することはできない。ではこの問題をどのように考えればよいのであろうか。その問いに答えるために、本章では、まず不可算名詞の複数形に関する先行研究の批判的検討を行い、単数形との比較で複数形の振る舞いを考察する。そこから導きだされる結論として、不可算名詞の複数形は、単数対象の数量化ではなく、むしろ述語との関連で捉えるべき名詞概念が含む種類、性質などの多様化であるという新たな見方を提示する。それにより文法数の再定義の可能性を示す。最後に、元来文法上単複の区別のないとされる日本語と、同じく元来単複の区別のないフランス語不可算名詞の複数化のメカニズムの類似点と相違点を比較する。

7.2 不可算名詞の複数形に関する先行研究

7.2.1 語彙的複数形と文法的複数形との区別

不可算名詞の複数形は伝統的に語彙的複数形 (pluriel lexical) として定義されている。この考え方によれば⁴⁴ 複数形と単数形は異なる語彙のレベルで区別される。したがって、これらの複数形の表している複数性は<単数の個物の累加>という数量化ではなく、何らかの概念の基本意味に内在している語彙的特性としての語彙的複

⁴⁴ 可算と不可算との区別と同時に提案されてきた語彙的複数形のこの考え方は Jespersen (1913: 114, 1924) によるものだが、Colombat (1993) が述べるように (数量的複数として捉えることができない) 不可算意味と複数形との矛盾については古代ギリシャの哲学者によっても既に指摘されていた。

数性である⁴⁵。例えば *ciel* (空) を例にとると、定名詞句複数形 *les cieux* の表している複数性は〈空 + 空 + 空〉というような空の累加から形成される数量的複数性とは考えられない。名詞単数形 *ciel* と異なる語彙として考えるべきであり、名詞複数形 *cieux* の意味内容に内在している語彙的複数性なのである。また、語彙的複数形が意味しているのが単数形と無関係であることが明らかである他の例として、可算名詞 *avoir un travail* (仕事をえる) , *chercher un moyen* (手段を探す) と不可算名詞 *faire des travaux* (工事をする) , *avoir les moyens* (富をもつ) という区別などを挙げることができる。

しかし、語彙的複数形として定義されてきたこれらの不可算複数形の中に、文法のレベルで、さらに二つのタイプを区別する必要がある。一つは、単数形を許容しない不可算複数形であり (**un épinard / des épinards* (ほうれん草) , **une funéraille / des funérailles* (葬儀) など) 、もう一つは、単数形を許容する不可算複数形である (*le ciel* (空) / *les cieux* (天空) など) 。この場合、前者では **un épinard* や **une funéraille* などの例に見られるような単数形の語彙が存在しないことから明らかのように、複数形を単数形に置換することはできない⁴⁶。それに対して後者の場合は、例えば (7-2) が示すように、複数形 *les cieux* を単数形 *le ciel* に言い換えることがあり得るのである。

⁴⁵ Booij (1994, 1996) , Acquaviva (2008) を参照のこと。

⁴⁶ 単複の考え方に関しては、形態論的あるいは音韻論的に、単数形と複数形との対立が明らかに存在している。そして、単数形と複数形とのこの対立は、形式上の派生関係の中において位置づけられることである。

(7-2) Il semblait que la Lune apparût pour la première fois sur l'horizon et que personne ne l'eût encore entrevue dans les cieux [le ciel] .

(Jules Verne, *De la Terre à la Lune*: 43)

(まるで、月が今初めて出現したのであって、以前には誰も月を見たことがない、といった有様であった。)

先に見た *les sables* についても同じような指摘ができる。

(7-3) Mais il arriva que le petit prince, ayant longtemps marché à travers les sables [le sable] , les rocs et les neiges, découvrit enfin une route.

(Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*: 64)

(星の王子さまは、砂漠を横切り、岩を登り、雪をかきわけ、歩いて歩いて、とうとう一本の道を見つけました。)

また、以下の例文においても、不可算複数形 *les eaux* を単数形 *l'eau* に言い換えることができる。

(7-4) Le capitaine et Francine aperçurent alors dans cette direction quelques ombres projetées sur les eaux [l'eau] du lac par la lumière de la lune, et reconnurent des formes féminines dont la finesse quoique indistincte leur fit battre le cœur. (Honoré de Balzac, *Les Chouans*: 154)

(大尉とフランシーヌがその方向をみると、月の光が池の面に数人の人影をおとしている。はっきりしないが、ほっそりした女らしい姿もみとめられる。二人の胸は動悸をはやめた。)

このことから、語彙的複数形という同じカテゴリーの中に、単数形を文法的に許容する *les cieux* や *les sables* や *les eaux* などのような不可算複数形と、単数形を許容しない *des épinards* や *des funérailles* などのような不可算名詞を同一レベルで定義することには限界があると考えられる。本章では、*les cieux* や *les sables* や *les eaux* などのような単数形と複数形の違いが問題となる不可算複数形のみを研究対象とし、これらを語彙的複数形としてではなく、むしろ単数形との使い分けの中で考えるべき文法的複数形 (*pluriel grammatical*) として捉え直す。

7.2.2 単数形との使い分けとしての不可算複数形に関する観点

伝統的には、不可算名詞の複数形の扱いは文体論あるいは意味論の問題とされている。文体論的分析として、ラテン語における詩的複数形⁴⁷、謙遜の複数形⁴⁸などの

⁴⁷ Carvalho (1970, 1993: 105-107) を参照のこと。

⁴⁸ Cohen (1950) を参照のこと。

観点を挙げるることができる。そして意味論的観点として、絶対複数形⁴⁹、内的複数形⁵⁰、集合複数形などという観点による分析を挙げるることができる。

以下には、先行研究の中でも、les cieux や les sables や les eaux などの不可算複数形を des épinards や des funérailles とは完全に区別して一つの独立した研究対象としては取り扱っていないまでも、不可算名詞の単数形と複数形とを異なるものとして捉え、その説明を試みた研究を取り上げ、検討する。

7.2.2.1 巨大さ、圧倒的なイメージという観点

不可算名詞の単数形と複数形との違いについては、つとに Guillaume (1945) が « amplification, vision en élargissement » (意味の展延性) という概念で分析している。例えば名詞単数形 ciel (空) は、複数形 cieux では「天空」という意味をとる。具体物としての空を意味する単数形 ciel より、複数形 cieux の表している意味の方がより大きな印象をもつということができる⁵¹。

⁴⁹ Jespersen (1924) を参照のこと。

⁵⁰ Guillaume (1945) , Carvalho (1970, 1993) , Furukawa (1977) , Curat (1988) , Wilmet (1998: 136) を参照のこと。

⁵¹ 単数形 ciel は必ずしも「空」という意味とはならず、aller au ciel (亡くなる) の場合のように、「天国」という意味にもなり得る。これによって、複数形が単数形よりも広い空間を表すとは言えない。

Guillaume の「意味の展延性」という考え方は、指示対象の意味が巨大さ、圧倒的なイメージなど⁵²の解釈をとりうる場合を示している。この巨大さ、圧倒的なイメージは、多量、大量の解釈に由来している場合が多い。例えば *eau* (水) の複数形 *eaux* は、*les eaux du Déluge* (ノアの大洪水) では大量の水を意味し、(7-5) における *tomber dans les eaux* の場合は、「人を飲み込んでしまうほどの大量の水」を意味する。

(7-5) Ces Bretons sortaient de la rive où Marche-à-terre les avait postés au péril de leur vie car, dans cette évolution et après les derniers coups de fusil, on entendit à travers les cris des mourants, quelques Chouans tombant dans les eaux, où ils roulèrent comme des pierres dans un gouffre.

(*Les Chouans*: 147)

(これらのブルターニュ人は、マルシュ・ア・テールが決死の覚悟で配置しておいた池の端から出てきたのだった。事実、この策動のさいちゅうに、そしてまた砲声のやんだ後でも、数人のふくろう党員が水に落ち、石ころのように深みに沈んでいく音が、瀕死者のさげび声を通してきこえた。)

この例では、何人かの人が水に落ち、石ころのように転がっていくという出来事が記述されている。その文脈において、*tombant dans les eaux* は、人が単に水中に落ちるだけではなく、「水に飲み込まれて死ぬ」ほどまでの大量の水の中に落ちるのである。

⁵² 『フランス語ハンドブック 改訂版』 (1996: 7) においては、定名詞句複数形 *les cieux* は「多量、強意、誇張などの文体的効果を示す」とされている。

7.2.2.2 日常的経験という観点

これに加えて、Carvalho (2006) は不可算複数形は日常生活の経験性に基づく場合があることを指摘する。例えば望遠鏡 (*une lunette*) と眼鏡 (*des lunettes*) との違いを挙げることができる。単数形は専門機器として扱われる望遠鏡であり、日常生活の中に簡単に置くことができないことから、単数形 *une lunette* となっている。それに対して、複数形は眼鏡を表し、日々利用されて、より身近のものとして捉えられているということで、複数形 *des lunettes* となるのである。Carvalho は、日常生活の中で眼鏡は幾度も様々な状況で体験されていることから、複数をとるものとして捉える。この説明を支持する他の例として、例えば、*un travail* (仕事) / *des travaux* (工事), *un moyen* (方法) / *des moyens* (資力、富) などがある。

しかし、単数形が望遠鏡を表し、複数形が眼鏡を表す理由が、日常的に頻繁に利用されるかどうかという基準によるという説明は説得性に欠けると言わざるを得ない。なぜならば、複数形 *des lunettes* (眼鏡) はレンズ二つによって構成されているという一般的な説明で十分だからである。また、単数形で望遠鏡を意味しているときに *lunette* は可算名詞であるが、複数形で眼鏡を意味しているときに *lunettes* は不可算名詞であることから、単数形にせよ複数形にせよ不可算名詞 *ciel* や *sable* や *eau* と同様に扱うことはできない。

(7-6) a. Je voudrais acheter deux lunettes astronomiques.

(私は天体望遠鏡が二台欲しい。)

(7-6) b. ?Je voudrais acheter deux lunettes de vue.

(私は二つレンズの眼鏡が欲しい。)

(7-6) c. Je voudrais acheter deux paires de lunettes de vue.

(私は眼鏡が二つ欲しい。)

以上の二つの観点による分析では、les cieux や les sables や les eaux などのような不可算複数形は主観的解釈またはイメージの問題として捉えられていると言える。つまり先行研究において不可算複数形は、意味効果の文学的解釈に重きがあり、必ずしも言語学の分析対象として取り上げられることはなかったのである。しかし、文法の分類のレベルでは、これらの複数形は不可算名詞として分類されている以上、不可算名詞の複数形が可能であるという一見不可解なこの現象について、文学的表現として定義する前に、その言語学的メカニズムを明らかにする必要があるだろう。

本章では les cieux や les sables や les eaux などのような不可算複数形の言語学的振る舞いについて検討し、その扱いの意味と生成基準を言語学的観点から明らかにすることを試みる。

7.3 不可算名詞の複数形の言語学的位置づけ

まず本章の問題設定の前提となっている不可算名詞の複数形に関する文法的位置づけについて明確にしておく。

7.3.1 不可算複数形と単複の概念との非共起

文法の分類における複数形の定義に基づけば、不可算の複数形は説明ができない現象であり、矛盾である。複数性を表さない複数形、という矛盾は、単数性・複数性のとらえ方、および名詞の可算・不可算の考え方に基づくものである。

(i) まず、第 1 章にて述べたように、伝統的に、複数形は単複の枠の中で定義されている。単複の概念をもう一度紹介すると、指示対象の個性性めぐって「一つの指示対象」と「二つ以上の指示対象」を対立させる二重体系である。この体系における指示対象は個体の形をとるものであり、「一つの個体」あるいは「二つ以上の個体」というような数量的個別性に関して単数形と複数形との扱いが使い分けられる。そのことから、複数形の扱いは個性性のある指示対象の場合のみに扱いうるものとして定義されている。

(ii) 他方、可算（個性性のある指示対象）と不可算（個性性のない指示対象）との区別は存在論的区別として理解される⁵³。個性性のある指示対象は、累加的であり、個数を重ねることができる。これに対して、個性性のない指示対象の場合、累加性はない。累加する代わりに、指示対象を分割することはできるが、ほんのわずかな分割量でも、なおもその指示対象と同一である。

個物として捉えられない *eau* を例にとると、「*eau + eau = eau*」というように *eau* がほんのわずかな量しかなかったとしても、なおもそれは *eau* だと言えることになる。*eau* は個性性のない不可算の指示対象とされる。それに対して、個性性のある指示対象である *glaçon* の場合は、「*glaçon + glaçon = 2 glaçons*」というように個性性のある可算の指示対象とされる。

このように見てくると、*eau* の複数形 *eaux* は存在論的にはありえないが、実際には多くの用例が観察される。

(7-7) Pataugeant dans l'eau boueuse, un petit enfant dans les bras, un autre accroché à sa robe, cette mère tente de fuir sa demeure envahie par

⁵³ Martin (1989) を参照のこと。

l'inondation. (...) Dans la région de Dacca, les eaux baissent, mais la situation est de plus en plus dramatique dans le sud-est du pays. Les eaux ont submergé une ville entière, Gopalgani. (Furukawa 1977: 162)

(泥水の中を苦勞して歩きながら、小さな子供の一人をその両手に抱き、もう一人の子供をその服に掴ませたこの母は、洪水によって浸水してしまったその住まいから逃げようとしていた。・・・ダッカ地方では、水は引いたが、国の南東部では状況は少しずつ痛ましいものとなってきている。洪水は、ゴーパールガンジという一つの街を丸ごと飲み込んでしまったのだ。)

この点について、さらに次節で詳しく検討する。

7.3.2 不可算名詞の複数形の外延

Wierzbicka (1988) は不可算名詞の単数形と複数形との相違を外延性の観点から説明する。grass や gravel などのような英語の不可算名詞の単数形を “small composite mass” として、oats や groceries などのような複数形を “large mass” とする。

Wierzbicka のこの考え方に対して、Martin (1989) は名詞の意味内容をめぐって「概念的解釈」 (lecture conceptuelle) と「外延的解釈」 (lecture extensionnelle) という異なるレベルを区別し、不可算名詞の場合は常に概念的解釈⁵⁴ が関連すると述

⁵⁴ 「概念的解釈」とは、数量が指示の問題となっていないということである。

べる。例えば以下のような例文においては、一般的には可算名詞に付く不定冠詞 *une* が用いられているが、この場合、不可算名詞 *eau* の概念的解釈が行われる。

(7-8) *Une bonne eau minérale est riche en fluor.* (Martin 1989: 42)

(おいしいミネラルウォーターにはフッ素が豊富だ。)

Martin の指摘に従えば、不可算名詞の複数形の場合は外延的扱いとして分類しにくいといえる。その理由は、例えば (7-9) と (7-10) における *l'eau du Nil* と *les eaux du Nil* のいずれにおいてもナイル川のことである以上、複数表現は単数表現より河川量の多いナイル川を意味することはないからである。

(7-9) *Sur l'azur d'une transparence infinie s'allumaient d'innombrables étoiles, dont les scintillations tremblaient confusément dans l'eau du Nil, agitée par les barques qui ramenaient à l'autre rive la population de Thèbes.*

(Théophile Gautier, *Le Roman de la momie*: 135)

(どこまでも透明な青空に無数の星がかがやき、そのきらめきはまた、テーベの民を対岸へはこぶ船に掻き立てられたナイル河の水にうつって、きらきらと乱れ散った。)

(7-10) *Elle craignait des massacres où se fussent trouvés enveloppés le jeune Hébreu et la douce Ra'hel, une tuerie générale qui cette fois eût changé les eaux du Nil en véritable sang, et elle tâchait de détourner la colère du roi par ses caresses et ses douces paroles.* (ibid.: 292)

(彼女は王の執念深い心のうちに、復讐と麤殺の計画を見てとったので、あの若いヘブライ人や優しいラーヘルも当然巻き添えになるものと信じて、今度こそナイルの水を真の血の河と変える大虐殺を末前に防ごうと、みずから進んで、愛撫と甘言で王の怒りをやわらげようとしたのであった。)

しかし同時に複数形 *les eaux* を単数形 *l'eau* と同じように概念的扱いとするのであれば、(7-7)において複数形 *les eaux* のみ、語彙的複数形 *les flots* に言い換えることができることが説明できないことになる。ともに「大量の水」を意味するからである。

(7-7) Pataugeant dans l'eau [*les flots] boueuse, un petit enfant dans les bras, un autre accroché à sa robe, cette mère tente de fuir sa demeure envahie par l'inondation. (...) Dans la région de Dacca, les eaux [les flots] baissent, mais la situation est de plus en plus dramatique dans le sud-est du pays. Les eaux [les flots] ont submergé une ville entière, Gopalgani. (再掲)

しかし以下の例文においても単数形 *l'eau* の代わりに *les flots* は用い難い。

(7-11) Surtout maintenant que nous sommes fixés sur la qualité de l'eau [*des flots] du Tchad. Est-ce que cela se mange, ce poisson-là, Monsieur Fergusson ? (Jules Verne, *Cinq semaines en ballon*: 182)

(まさに今になってわれわれはチャド湖の水質についてはっきり理解しました。ファーガソンさん、食べられるのですか、この魚は?)

- (7-12) *Quelque temps après parut une feuille anonyme, qui semblait écrite, au lieu d'encre, avec l'eau [*les flots] du Phlégéon.*

(Rousseau, *Les Confessions*: 566)

(しばらくしたのちに、一つの匿名の文書が刊行された。それはインクの代わりにプレゲトン川の水で書かれたもののように思われた。)

それに対して、複数形 *les eaux* ならば、*les flots* に置き換えることが可能である。

- (7-13) *En effet, deux frégates fédérales croisaient alors dans les eaux [les flots] de Charleston.* (Jules Verne, *Les forceurs de blocus*: 149)

(実際、二隻の連合側のフリゲート艦はその時、チャールストンの海で巡洋していたのだ。)

このことから (7-7) , (7-11) , (7-12) における単数形と複数形との使い分けは、概念的解釈ではなく、外延的解釈が問題となっていると指摘することができる。不可算名詞の複数形と対象の外延との関連づけについては、先行研究では、巨大さ、圧倒的なイメージという解釈において既に論じられていた。例えば (7-5) における *les eaux* の意味は「人を飲み込んでしまうほどの大量の水」というニュアンスを含み、*les flots* に言い換えることができる。

- (7-5) Ces Bretons sortaient de la rive où Marche-à-terre les avait postés au péril de leur vie car, dans cette évolution et après les derniers coups de fusil, on entendit, à travers les cris des mourants, quelques Chouans tombant dans les eaux [les flots] , où ils roulèrent comme des pierres dans un gouffre. (再掲)

しかし、外延的相違という観点から不可算名詞の複数形の扱いをすべて説明することができのだろうか。実際、複数形 *les eaux* を *les flots* に必ずしも言い換えることができない例も観察される。

- (7-14) C'était vrai, les Hamelin n'y songeaient plus : ils avaient accepté ce million, pêché dans les eaux [*les flots] troubles de la Bourse.

(Emile Zola, *L'argent*: 208)

(それは正しかった。つまり、アムランたちはそんなことを考えてはいなかったのである。というのも、彼らはブルスの濁った水から釣り上げられたこの大金を受け取ってきたからである。)

7.4 不可算名詞の単数形と複数形の考え方

以上の考察から不可算名詞の複数形を数量的に説明できないということを踏まえたことから、具体的に不可算名詞 *eau* をとりあげ、不可算名詞の単数形と複数形の相違を検討していく。まず単数形 *l'eau* と複数形 *les eaux* に対する一般的な理解をまとめるとめる。

7.4.1 不可算名詞の単数形

通常理解では、定名詞句単数形の扱いにおいて「特定の単数の個物」(例 7-15)と「概念」⁵⁵(例 7-16)という二つのレベルが区別されている。

(7-15) Le chien de la maison aboie.

(家の犬が吠える。)

(7-16) Le chien aboie.

(犬は吠える。)

一見すると、不可算名詞の単数形の場合においてもこの二つのレベルが見られるようである、例えば (7-17) と (7-18) における *eau* は、特定の場所に限定された水を表す。

(7-17) Surtout maintenant que nous sommes fixés sur la qualité de l'eau du Tchad.

Est-ce que cela se mange, ce poisson-là, Monsieur Fergusson ?

(Jules Verne, *Cinq semaines en ballon*: 182)

(まさに今になってわれわれはチャド湖の水質についてはっきり理解しました。ファーガソンさん、食べられるのですか、この魚は?)

(7-18) Quelque temps après parut une feuille anonyme, qui semblait écrite, au lieu d'encre, avec l'eau du Phlégéon. (Rousseau, *Les Confessions*: 566)

⁵⁵ 第4章を参照のこと。

(しばらくしたのちに、一つの匿名の文書が刊行された。それはインクの代わりにプレゲトン川の水で書かれたもののように思われた。)

これに対して (7-19) における **eau** は特定の空間に位置づけることができない。

(7-19) En France, il y en a un qui soutient que « mathématiquement » l'oiseau ne peut pas voler, et un autre dont les théories démontrent que le poisson n'est pas fait pour vivre dans l'eau. (De la Terre à la Lune: 140)

(フランスでは、鳥は「数学的には」飛ぶことができない、と言い張る者がいて、なおかつ、もう一人、その理論によれば魚は水の中で生きるようには作られていないという者がいる。)

7.4.2 不可算名詞の複数形

同様に、定名詞句複数形もまた「特定の複数の個物」(例 7-20)と「カテゴリー」

⁵⁶ (例 7-21) という二つのレベルに区別されている。

(7-20) Les chiens de la maison aboient
(家の犬たちが吠えてる。)

(7-21) Les chiens aboient quand ils ont peur.
(犬はおびえると吠える。)

⁵⁶ 第3章～第6章を参照のこと。

この場合も *eau* の意味内容が特定の空間に限定されている例が見られる。

- (7-22) Quelques éléphants, des zébus à grosse bosse venaient se baigner dans les eaux du fleuve sacré, et aussi, malgré la saison avancée et la température déjà froide, des bandes d'Indous des deux sexes, qui accomplissaient pieusement leurs saintes ablutions.

(Jules Verne, *Le tour du monde en quatre-vingts jours*: 86)

(何頭かの象や、大きなこぶをつけた牛が、神聖な川の水を浴びにやってくる姿が見えた。そこではまた、季節の深まりや既に低い気温にもかかわらず、男性と女性のインド人の群れが、うやうやしく禊ぎを行っていた。)

- (7-23) Jean de Noya, navigateur portugais, s'était égaré dans les eaux qui séparent l'Afrique de l'Amérique.

(François-René de Chateaubriand, *Mémoires d'Outre-tombe*: 1143)

(ポルトガル人の航海士、ジャン・ドゥ・ノヤはアフリカからアメリカを隔てている海で迷っていた。)

それに対して、以下のように、場所の特定が難しい複数形の例を挙げることができる。

- (7-24) Parmi les triangulaires, j'en notai quelques-uns d'une longueur d'un demi-décimètre, d'une chair salubre, d'un goût exquis, bruns à la queue, jaunes aux nageoires, et dont je recommande l'acclimatation même dans les eaux

douces, auxquelles d'ailleurs un certain nombre de poissons de mer s'accoutument aisément. (Jules Verne, *Vingt mille lieues sous les mers*: 257)

(三角形のもので、わたしの注目したのは、体長が五センチほどで、肉の味がきわめて上等のやつである。尾は褐色で、ひれは黄色をしている。わたしは、この魚を淡水にならして飼うことをすすめたい。海水魚のかなりの種類は、かんたんに淡水に慣れるものである。)

7.5 不可算名詞の指示対象の再検討

これを踏まえて、例えば (7-5) における *tomber dans les eaux* における述語補語はどのようなものを指示するのか、という問題について検討する。*tomber dans les eaux* と *tomber dans l'eau* では、実際のところ、同じ指示対象を示すのだろうか。

7.5.1 不可算名詞の特定の用法の再定義

まず、*tomber dans l'eau* や *tomber dans les eaux* に現れる *eau* が意味しているのは、場所なのか、それとも物質なのか、それとも別のものなのかを考察する。一般には、(7-25a) などのような定名詞句単数形 *l'eau de la rivière* (川の水) は *eau* の特定の用法として理解される。同様に (7-26a) においても定名詞句単数形 *le trou du jardin* の特定の用法である。しかし、実際のところ、この二ケースを全く同じように特定の用法に帰することはできない。というのは、不可算名詞 *eau* の場合、問題なく *Pierre*

est tombé dans l'eau de la rivière. を Pierre est tombé dans la rivière. に言い換えることができるが、可算名詞 *trou* の場合はそれができないからである。

(7-25) a. Pierre est tombé dans l'eau de la rivière.

(ピエールは川の水の中に落ちた。)

(7-25) b. Pierre est tombé dans la rivière.

(ピエールは川に落ちた。)

(7-26) a. Pierre est tombé dans le trou du jardin.

(ピエールは庭の穴の中に落ちた。)

(7-26) b. Pierre est tombé dans le jardin.

(ピエールは庭で転んだ。)

また *eau* の複数形の場合も場所名詞に言い換えが許容される。

(7-25) b. Pierre est tombé dans la rivière. (再掲)

(7-25) c. Pierre est tombé dans les eaux de la rivière.

このことから、可算名詞の場合とは異なり、*l'eau de la rivière* と *les eaux de la rivière* のいずれの場合においても *eau* の特定性は *eau* 自体ではなく、具体的な空間である *la rivière* から生じていると言える。つまり特定であるのは *eau* ではなく *rivière* の方である。具体的な空間による特定化がなければ、*eau* は特定化されない。例えば、

(7-26c) とは異なり、(7-25d) では、ピエールが落ちた場所がどこであるのかが不明となってしまう。これは可算表現として特定性的のある (7-27) との違いである。

(7-25) d. Pierre est tombé dans l'eau.

(ピエールは川に落ちた。)

(7-26) c. Pierre est tombé dans le trou.

(ピエールは穴の中に落ちた。)

以上の考察に基づくならば、特定の用法、不特定の用法のいずれの場合においても、**eau** 自体の指示対象は (特定することも特定しないことも可能な) 物質として捉えることが妥当であり、空間の特定化とは別のレベルであるということが出来る。

7.5.2 不可算名詞の存在場所と存在様態

このことから、不可算名詞の場合、特定の用法と不特定の用法との区別は **eau** の特定性的の問題ではないことが分かる。**eau** の特定の用法と不特定の用法との違いは、**eau** の指示対象が特定なのか不特定なのかに起因する違いではなく、むしろ物質としての **eau** の意味限定の違いである。特定の用法の場合、**eau** の意味内容を限定しているのは *l'eau de la rivière* (川の水) というような特定の存在場所である一方、不特定の用法の場合、それは *l'eau de mer* (海水) というような存在様態が問題となる。**eau** の特定化には、存在場所と存在様態の二つのレベルがあり、複数化に関して制約をもたらす。すなわち、**Un poisson vit dans les eaux.* というように **eau** の存在場所

や存在様態を示さないと複数形は容認できず、(7-27)のように単数形 *l'eau* しか用いることができない。

(7-27) *Le son Phâtt est une imitation du bruit que produit la cassure du bambou ; le son Phoutt ressemble au bruit une chose qui tombe dans l'eau.*

(Vatsyayana, *Le Kama Sutra*: 81)

(パットという音は竹の裂け目が作り出す音を真似たものである。ブットという音は、水の中に落ちたものが出す音に似ている。)

それに対して、*eau* の存在場所 (例 7-28) や存在様態 (例 7-29) が示されるときは、複数形 *les eaux* の使用が可能となる。

(7-28) *Nessie vit dans les eaux du Loch Ness.*

(ネッシーはネス湖に生息している。)

(7-29) *Ce type de poisson vit dans les eaux douces.*

(この種の魚は淡水の中で生息する。)

このことから、*eau* の複数形の扱いが可能であるのは *eau* の存在が特定の場所、あるいは特定の存在様態の場合、すなわち *eau* の特定の低位カテゴリー⁵⁷ の場合に限定されていることが分かる。*eau douce* (淡水) や *eau de mer* (海水) は、低位カテゴリーが様態的に捉えられているが、特定の場所を限定する *eau du lac* (湖の水) や

⁵⁷ ここで言う低位カテゴリーとは、意味論で言う上位語—低位語の関係 (hyponyme) や部分—全体の関係 (relation partie – tout) とは異なる。

eau de la rivière (川の水) の場合には、数量的なものなのか様態的なものなのか、その関係をどのように解釈すればよいか問題となる。

7.5.3 下位カテゴリーの概念の定義

Sten (1949) は (7-30) または (7-31) などの場合のように、対象の意味内容が曖昧なときは単数形より複数形を用いることを指摘する。

(7-30) Une jeune fille était assise à ses côtés.

(娘が彼(女)のそばに座っていた。)

(7-31) envoyer quelque chose par les airs

(ほり投げる)

ses côtés や les airs のような慣用的表現の場合は、数量的複数というよりも、意味内容の曖昧化あるいは「ぼかし」という観点の方が説明がしやすい。しかし以下のような慣用的表現ではない場合はどうであろうか。

(7-32) a. L'eau dans le lac est froide en cette saison.

(湖の中の水はこの時期冷たい。)

(7-32) b.*Les eaux dans le lac sont froides en cette saison.

(7-32a) と (7-32b) の eau は、le lac (湖) という特定の空間に限定されている。

(7-32b) の場合、les eaux を Sten のいう意味内容の曖昧さを表す複数形と理解する

ことはできない。しかし *l'eau dans le lac* を *l'eau du lac* に置換すると以下が示すように、単数形、複数形の扱いがともに可能となる。*eau* の意味内容が *le lac* という特定の空間に限定されているにも拘らず、(7-32b) と異なり複数形の扱いが可能になるのである。

(7-33) a. *L'eau du lac est froide en cette saison.*

(湖水はこの時期冷たい。)

(7-33) b. *Les eaux du lac sont froides en cette saison.*

このことから、*l'eau dans le lac* と *l'eau du lac* では、*eau* と *lac* の関係のあり方が異なるということが出来る。この点についてさらに考察してみよう。

(i) まず、既に見たように、*eau* などのような不可算物は、どれほど分割しても同質的であり、個別の累加による複数化ができない。しかし量の変化を問題にすることは可能である。

(ii) *l'eau dans le lac* では、*lac* と *eau* の関係は容器のメタファーで捉えられる。つまり *lac* は個別の容器であり、*eau* は容器の中の内容物である。*lac* は単数とも複数とも扱える個別性をもつものなので、その中で限定される *eau* も単数の *lac* の対象として捉えられる。したがって複数表現 **les eaux dans le lac* は矛盾をきたす。

(iii) これに対して、*l'eau du lac* における *le lac* は、*l'eau dans le lac* と同様に容器のメタファーで捉えることはできない。*l'eau du lac* における *eau* は、湖の中に湛えられた水として捉えられているのではなく、他にある水とは異なった性質をもつ水として「湖水」あるいは「その湖の水」を問題にしているのである。*les eaux du lac* が可能なのは、特定の個体の量限定（複数化）を行っているのではなく、その湖で

様々な姿で現れうる水が問題となるのである。つまり *eau* を数量的に捉えるのではなく、様態的に捉えるのである。

このように、不可算名詞 *eau* の複数形の使用条件には、二つレベルを区別することが重要である。一つは、*l'eau dans le lac* というような *eau* の数量的下位カテゴリーである。もう一つは、*l'eau du lac* というような *eau* の様態的下位カテゴリーである。

7.6 存在様態の変化による多様化

eau の複数形を用いることができる場合は、様態的下位カテゴリーとしての *eau* の場合のみである。(7-25c) などにおける複数形の意味は、川の水 (*eau de la rivière*) の様態という質的変化の範囲の中で理解されるべきものである。そのことがはっきり現れているのは *eau* の単数形と複数形との使い分けと述語との関連である。

7.6.1 一つの種類、性質などである不可算名詞の単数形

l'eau dans le lac の場合は、前置詞 *dans* によって *eau* と *le lac* との相互関係が「内容物—容器」の関係として規定される。湖に湛えられた水 (*l'eau dans le lac*) の中に、人が飛び込むことも、おぼれることもあり、あるいは、その水に触ると冷たかったり、暖かかったりすることもある。述語で表される出来事や状態には、特に制約はない。それに対して、*l'eau du lac* などのような場合、述語は水の種類や性質などの属性記述を行うものでなければならない。例えば (7-34) においては科学的出来事 *être soluble* であるから、その出来事の補語としての *eau* も一つの種類、性質を指し示し

ている H₂O というような科学的オブジェクトとして捉えなければならない。その結果として、eau の複数形が不可能となる。

(7-34) À vrai dire, ce n'est pas la morphine elle-même, peu soluble dans l'eau [*les eaux] , qu'utilisent les médecins et les toxicomanes, mais un sel de morphine, le chlorhydrate, qui merveilleusement se prête à cet emploi.

(Laurent Tailhade, *La noire idole*: 23)

(実際のところ、それはほとんど水に溶けず、医者と薬物中毒者が用いるモルヒネそのものではなく、塩のモルヒネ、つまり塩酸モルヒネ塩であって、これはこのような用途にすばらしく適したものである。)

eau の特定の用法の場合についても同じような指摘ができる。(7-35) においては、l'eau du fleuve (川の水) は皿洗いのための eau という意味をとることで、eau の種類、性質などの違いは問題となっていない。

(7-35) N'ayant pas d'eau, il prit une casserole et attacha une corde à son manche. Il ouvrit la fenêtre et jeta l'ustensile dans l'eau [?les eaux] du fleuve.

(Gustave Flaubert, *Madame Bovary*: 312)

(水がなかったので、彼は鍋をとり、その取っ手に縄を結びつけた。彼は窓を開けるとそれを大河の水の中に投げた。)

7.6.2 多様の種類、性質などから形成される不可算名詞の複数形

それに対して、**eau** という物質が多様の種類、性質などから形成されるものとして捉えられている場合は、**eau** の複数形が用いられる。以下の (7-19) と (7-36) では、**vivre dans l'eau** と **vivre dans les eaux** との違いが問題となる。述語 **vivre** の捉え方によって、何らかの動物の生態環境として言える不変で常に同じかたちをとる **eau** の場合 (**vivre dans l'eau**) と、様々な形をとりうる誰かの住む、過ごす場所としての **eau** の場合 (**vivre dans les eaux douces du faubourg Saint-Germain**) を区別することができるだろう。

(7-19) En France, il y en a un qui soutient que « mathématiquement » l'oiseau ne peut pas voler, et un autre dont les théories démontrent que le poisson n'est pas fait pour vivre dans l'eau. (再掲)

(7-36) (...) parce que depuis son enfance elle vit dans les eaux douces du faubourg Saint-germain, mange la salade comme une La Rochefoucauld.

(Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*: 1074)

(なぜなら子供の頃から、彼女はサンジェルマン近郊の淡水の中で育ち、ロシュフコーのようにサラダを食べてきたからだ。)

種類、性質などを含めて存在の様態の複数形は多様な意味を生成する。先行研究に指摘されてきたのは巨大さ、圧倒的なイメージなどであったが、例えば Furukawa (1977: 162) の例文を改めて考えると、巨大さよりこの例文における **eau** の複数形はその地域や町の至る所を飲み込んだ多様な形をとっている洪水としての **eau** である。

(7-7) Pataugeant dans l'eau boueuse, un petit enfant dans les bras, un autre accroché à sa robe, cette mère tente de fuir sa demeure envahie par l'inondation. (...) Dans la région de Dacca, les eaux baissent, mais la situation est de plus en plus dramatique dans le sud-est du pays. Les eaux ont submergé une ville entière, Gopalgani. (再掲)

また (7-13) においては問題となっているのが *croiser* というような何らかの移動を意味している述語であることから、今回の *eau* は様々な海流や様々な波で形成される *eau* として複数化されている。

(7-13) En effet, deux frégates fédérales croisaient alors dans les eaux de Charleston.
(再掲)

同様に (7-23) における述語 *s'égarer* の場合は様々な方面や位置としての *eau* を意味する。

(7-23) Jean de Noya, navigateur portugais, s'était égaré dans les eaux qui séparent l'Afrique de l'Amérique. (再掲)

また本章の問題点として言及した *pénétrer dans les sables du désert* における複数形は *sable* のとりうる様々な姿を多様化したものである。単数表現 *pénétrer dans le sable du désert* における *sable* は砂漠にある *sable* であり、その中に入り込むので、飛行機がクラッシュするという意味となるのに対して、複数表現 *pénétrer dans les sables du*

désert における sable は、それぞれ異なる姿をとる砂漠の砂から構成される sable として捉えられていることから、「フライトの路線としての広大な砂漠ゾーンに入ること」と解釈される。

7.7 日本語の畳語複数形

これまでの分析から不可算名詞の複数形と名詞が関連する様態との関係性というメカニズムによって、数量の概念だけで説明できない複数形に対する理解を考え直すことができた。ところで日本語には、フランス語の不可算複数形と同じく数量的複数性として捉えるのが難しい畳語複数形⁵⁸がある。國廣（1980: 13）は「通りに沿った家々」と「*三軒の家々」との容認度の違いを考察し、畳語複数形の表している

⁵⁸ 日本語は畳語を多用する言語であり、畳語とは「同一の単語または語根を重ねて1語とした語」（『広辞苑 第五版』、岩波書店）として定義されている。畳語は文字通り「たたみことば」とも呼ばれており、ことばをたたむ、すなわち同じ語、同じ要素が繰り返される単語である。重字、重綴などとも言われ、「かさねことば」として説明される（松村 1969: 59）。国語辞典の定義では、畳語名詞と畳語副詞は同じレベルで定義されているが、同じ単語の繰り返しから成り立っている「ひらひら」のような畳語副詞は複数を表すことができないことから、これからの分析では、「山々」のような名詞の複数形としての畳語の振る舞いのみを検討する。

複数性は不特定複数性の形をとっている、と説明する⁵⁹。元来文法上単複との区別のないとされる日本語の中でも、「様態の多様化」ということが起こるのだろうか。以下では、日本語の畳語表現に注目し、同じく単複の区別のないフランス語不可算名詞の複数化のメカニズムと比較しつつ、類似点と相違点を考察することにする。

7.7.1 不特定複数性

國廣にしたがえば、畳語複数形は不特定複数性を表す。これは、畳語複数形の指示対象物の個性が漠然としたものであるからである。例えば以下の早川（1990: 12）からの例文を検討してみると、「国境の山々」や「遠い山々」や「向こう側に雪を被った木々」のいずれも、対象の輪郭はかなりぼんやりしたものである、といえる。なぜなら「山々」や「木々」を構成する山や木を部分的に取り出し、明確に他の山と区別することは難しいからである。さらに、山自体や木自体は周囲から区別してその固有の輪郭を明確にさせることもできない。山や木というものは地面から隆起した存在であり、その底辺部分はその地面と一体化しているからである。

⁵⁹ 畳語複数形の数量化をめぐる、早川（1990: 10）は以下の矛盾点を指摘する。

「数詞との共起関係についていうと、これら畳語名詞の構文的特徴としては数詞と共起しにくいことがあげられる。これらが数詞と共起しない理由として数詞による複数表現と畳語による複数表現に重複を避けるためということも考えられる。が、「多くの山々」「幾多の山々」という表現は可能なのに「七つの山々」「七本の山々」という表現が受け入れられないということを見ると両者の間に相容れないものがある、矛盾があると考えざるを得ない。」（早川 1990: 10）

(7-37) 国境の山々は夕日をうけて秋に色づいている。 (早川 1990: 12)

(7-38) 頂上の沼は一面雪に覆われて、広い平地のように見える。その向こう側に雪を被った木々が遥かに立ち並んでいる風景には、何か索漠とした美しさがあった。 (ibid.)

また同様に (7-39) における「恋の日々」は日 A と日 B のように 1 日ずつ区切ることができず、連続的に捉えられる期間である。

(7-39) 私の脳裏に素早く駆け巡ったものはあの短い煮詰めたような恋の日々だった。 (ibid.)

指示対象が重なり合って存在する場合にも、ふつうは畳語として使われにくいと思われる名詞でも、文脈により畳語が自然である場合がある。

(7-40) 一番電車が港の上を城山の前にある駅の方へ走り去って行く。わたしの目の中に首飾りのように光を綴ったレモン色の窓窓が走り去る。 (早川 1990: 13)

(7-41) 頭上を覆った枝枝の間から午後の太陽の光線が奇妙な濃淡の斑模様をなして流れ込んだ。 (ibid.)

(7-42) 上がりの省線電車が、じき続いて下りの省線電車がスパークの赤い火と窓窓の明かりをぶちまけたように左右に流しながら通り過ぎた。 (ibid.)

7.7.2 上位概念の不可欠性

畳語複数形の指示的範囲は不確定であるが、それに関して早川（1990: 12）は次のように説明する。

つまり畳語の指示物はその物理的形態において中心部分はある程度指摘できるが周縁部分は周囲と連続しておりはっきり輪郭を描くことができないものが多い。周囲と連続している、一体化しているということはそれらがそこから動かさないことを意味し、その特殊性を高め、結果的にそれらの数えにくさと結びつくと思われる。例えば「山々」というものは、重なる山並みまたは層状に重なった連山といった事実を指すものだと考えられる。つまり畳語複数というものは、何らかの部分でなければならないようである。

（早川 1990: 12）

このことから、フランス語の不可算名詞の複数形と同様に、畳語複数形の意味内容は常に特定の背景の中に限定されていることを挙げることができる。松本（2009: 247）はこのような背景を「上位概念」と呼び、畳語複数形の意味内容はこれを囲む特定の上位概念の中にしか考えられないことを指摘する。

次のような疑問を發してみてもはどうだろう、「畳語複数を構成する各名詞に関して、その上位概念になる語が容易に考えられるだろうか」と。[...] 「木々」と「国々」の表現を聞いたとき、私たちはただちに「森の木々」「世界の国々」といった表現を思い起こすことだろう。つまり「木々」とは、

なんでも良いから沢山の木をあらわすというわけではなく、ある決まった範囲の森などを構成する一本一本の木、という意味なのである。「国々」とは、適当に任意のいくつかの国を指すのではなく、この世界、この地球を構成する要素としての一つ一つの国家、あるいはもっと狭い範囲で用いる場合には、ある地理的・政治的条件などを満たす集合の中に含まれる個々の国、という意味なのである。「東アジアの国々」「社会主義の国々」「イスラム圏の国々」などというふうに。また、「人々」や「神々」に関しても、同様のことがいえる。私たちが「人々」という表現を敢えて使用するとき、漠然とたくさん人間という意味で用いるのではなく、もっと具体的にある決まった集団内の個々の成員をイメージしているのが普通だろう。つまり「世界の人々」「日本の人々」などのように「～の人々」という形で用いられるのが普通だろう。また「神々」という言い方が使われる場合には、「ギリシャ神話の神々」とか「八百万の神々」のように、ある特定の宗教的世界が前提となっている。

(松本 2009: 247)

また松本 (2009: 245) によれば、容認不可能な表現とされている「花々」や「星々」も上位概念をとる文脈の中では可能となると考えられる。

「花々」や「星々」という表現は、一般には容認不可能な表現と見なされることも多いようであるが、私には例えば「花々が咲き乱れる草原」「星々がきらめく夜空」のような表現は、まったく自然なもののように感じられる。

(松本 2009: 245)

以上のことから、フランス語の不可算名詞の複数形だけではなく、日本語の畳語複数形の場合においても、背景の表示を補うことで、必ず指示対象の意味内容を何らかの特定の存在として限定する必要があるということができるだろう。

畳語複数形の使用条件として上位概念による限定が不可欠だとすると、フランス語の不可算複数形と同じく、畳語複数形の指示対象も下位カテゴリーとして考えるべきであることが分かる。以下の例文が示すように、畳語複数形の使用条件となる上位概念は、指示対象の存在場所や存在時間を限定する場合もあれば、指示対象の存在様態を問題としている場合もある。このことから、フランス語の不可算複数形と同じく、畳語複数形で問題となるのは指示対象の数量より、指示対象の様態であると考えることができる。(7-43)では一つ一つは個別の国ではあるが、南アジアを様々な形で特徴づける性質をもった一連の国である。(7-44)では、人生において夫婦のかたちは、それぞれの世代によって異なるが、世代によって様々な形で特徴づけられているものとして捉えられている。

(7-43) 複雑に入り組んだ社会集団を数多く抱える南アジアの国々の特徴の一つとして数えられている。⁶⁰

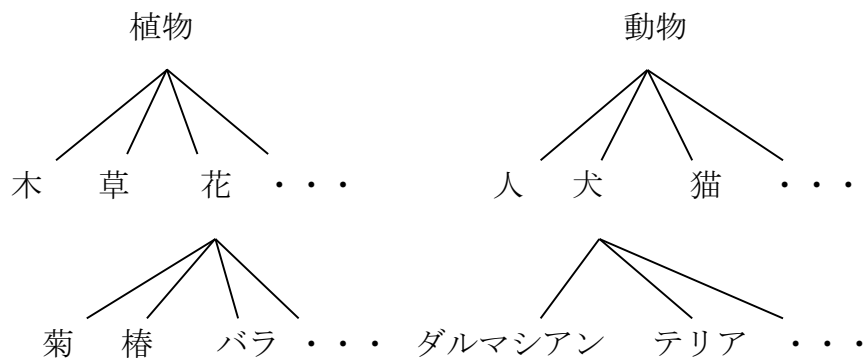
(7-44) 十代、二十代、三十代、四十代、その時々をいかに生き、その時々
にどんな夫婦であったのかが・・・

(本岡典子、『ある夫婦のかたち』:37)

⁶⁰ 「分離主義」 『Pol-Words NET』 <http://pol.cside4.jp/theory/9.htm>. 2018.08.07.

7.7.3 種類、性質などの多様化

指示対象の上位概念の表示が不可欠であったフランス語の不可算複数形と比較してみるならば、日本語の畳語表現の場合においても、同じように存在様態の多様化が問題となる点で共通していると考えられる。日本語では畳語複数形となれる名詞は必ず基礎水準カテゴリーに属する名詞である。基礎水準カテゴリーとは認知意味論で言うところの“basic level category”のことである⁶¹。これに関して唐須（1992: 127）の指摘を引用する。



上図の例では、それぞれの枝別れ図の中で、中間に位置するレベルが基礎水準カテゴリーに属するものと考えられている。つまり和語であり、二音節以下であるような語は全てこのレベルに位置づけられる。そのレベルより下位のレベルに属する語であれば、決して畳語として使用されない、だからこそ、花の名として菊々、バラバラなどと言うことはできない。上の図で十分想像がつくように、その基礎水準レベル以上の語は漢語の複合語になる可能性が強く、基礎水準レベルより低い語には、犬の例で明らかになるように、外来語も現れてく

⁶¹ Lakoff (1987) を参照のこと。

る確率が高くなっている。植物の場合でも「木」より一つ下のレベルでは「松」、「トチ」などが出てくるが、さらにそれより下のレベルになると「赤松」「トド松」などの複合語が出現する可能性が極めて高い。

(唐須 1992: 127)

畳語複数形の生成を許容する唯一のレベルは、基礎水準レベルの名詞である。以下の例文において「木々」が指し示している集合体は、種類を別にしている木の集まりであることが明らかだろう。

(7-45) 全国から寄せられた巨木の数は 61441 本。木々の形態としては、単木が約 28000 件、樹木が約 7400 件、並木が約 550 件だった。

(早川 1990: 14)

(7-46) 地域のシンボルとして人々に親しまれている木々を見直し、地域の自然保護教育や、潤いのある街づくりの核として活用してもらおう。

(ibid.)

(7-47) これまでの桜などの各地域での名木や、「縄文杉」のような著名な木々の調査はあったが、すべての樹種で巨木全国調査は初めて。

(ibid.)

畳語複数形の扱いにおける種類、性質などによる多様化のこの問題を明らかにするために、日本語母語話者を対象とした以下のようなインフォーマント調査を実施した。

(7-48) a. 太郎はフリージアの花を買った。 (小早川 2004: 46)

1. 自然 (18) 2. やや自然 (0) 3. 不自然 (0)

(7-48) b. 太郎はフリージアの花々を買った。 (ibid.)

1. 自然 (0) 2. やや自然 (2) 3. 不自然 (16)

(7-48) c. 太郎は赤い花々を買った。 (ibid.)

1. 自然 (1) 2. やや自然 (4) 3. 不自然 (13)

(7-48) d. 太郎は色とりどりの花々を買った。 (ibid.)

1. 自然 (8) 2. やや自然 (4) 3. 不自然 (6)

ここにおいては「フリージアの花」と「赤い花」は、同じ種類の花の複数性として把握され、「花々」の容認度が非常に低い。(7-48d)が示すように、異なる色を表す「色とりどりの」が用いられる場合は「花々」の方が自然となっている⁶²。それに対して、(7-48c)において容認度が低いと判断される理由としては「赤い」とは一つきりの種類であり、つまり「花」の種類、性質の多様性が否定されるからだろう。また「赤い花々」を容認した日本語母語話者は、その理由として、様々な色、相、明度、彩度の「赤」があるという理由を挙げている。

このことから、量語複数形の指示対象の意味内容は、「赤い花」というような共通の質量的下位カテゴリーにおける様々な種類、性質などを問題としている多様化することが可能であるということが出来る。その結果として、質量的下位カテゴリー

⁶² 何故この場合は依然として不自然だと感じられるのかという点については、量語複数形の表す多様性ははっきりした輪郭をもたないものであり、これらの例文に登場している「花々」が指し示しているのは、太郎が買って今手に持っている特定の数量のものだと考えられるからだろう。

一が想起しにくい名詞は、「*水」や「*砂」や「*石」などのように畳語複数形になれないのである⁶³。

7.7.4 個別性の位置づけをめぐるフランス語と日本語との差異

これまでの考察から、不可算複数形と畳語複数形のいずれの場合においても問題になるのは、多様な種類、性質などから形成される（可算することができない）かたまりであるということができよう。例えば *les sables du désert* の指示対象は様々な砂の坂を指し示しており、それぞれの坂の輪郭がぼんやりしているうえで、その指示対象は何らかのかたまりのかたちをとるわけである。同様に「アルプスの山々」についても同じような指摘ができる。例えば早川（1990: 13-14）は畳語複数形の指示対象を連続体として定義している。

畳語の指示物は、それが自然界に実体のあるものとして存在し集まりとして目に見える場合（山々、家々、木々、花々）、連続体として互いが重なり合ってその個々の構成要素の輪郭が明確に描けないものが多い。またひとつひとつが離れていてもその輪郭全体が周りからはっきり切り取れないものが多い。畳語全体もその背景からはっきり切り取れないものが多い。また重なり合うことのないものの場合も個々またはその集まりが全体から切り離せない部分であるという共通点を有する。 (早川 1990: 13-14)

⁶³ 小早川（2004: 47）を参照のこと。

単なる可算名詞とは異なり、畳語複数の指示対象は数えることができないと既に言及してきたが、これは、*les sables du désert* と同じく、「アルプスの山々」は輪郭のぼんやりした成員の集まりであることから、その集まりの中からひとつの成員を明確に他の成員と識別することが難しいからである。言い換えればこれは、成員の相互弁別性の低さの問題である。したがって「山々」が用いられた場合、「山 + 山 + 山」というような単複的複数というより、むしろ様々な様態で立ち現れる一連の対象のかたまりとして捉えるべきだろう。唐須（1992）と池上（2000）が挙げる畳語複数形における「集団性」または「群の形」も同じ考え方であると思われる。

池上（2000）と佐竹（2002）が述べるように、畳語複数形は、対象を一つの連なりとして捉える。それと同時に「アルプスの山々」というような複数化によって、連なる対象を個性にしたがって、それぞれ別様な現れ方をするものとして捉える。それが成員どうし重なり合うという意味である。

対象の個別性という点において、不可算複数形と畳語複数形との間には、以下のような差異点が指摘できる。すなわちフランス語の *les sables du désert* というような多様化の場合は、既に言及したように、個別性のない不可算物 *sable* を対象とした多様化である。それに対して、日本語では「*砂漠の砂砂」が不可能であることが示すように、「アルプスの山々」のような畳語複数化は、可算物として元々から個別性を前提としている対象の複数化である。したがって、フランス語と日本語とのケースにおける個別性の位置づけは異なっており、この違いから、異なるタイプの存在様態の多様化が生じる。

(i) まず対象の個別性（種類、様態）に基づいて、対象を多様化するのが日本語の畳語複数形である。こういった特徴は例えば國廣（1980）の挙げる「個別性を保った不特定多数」としての畳語複数の定義に見られる。

(ii) もう一つは、*sable* のように、個別性（種類、性質など）を目的として多様化する、*les sables* のような不可算複数形である。上で見た國廣（1980）の定義に倣うならば、フランス語の不可算複数形は、「個別性を生み出す不特定多数」として定義することができるのではないだろうか。

本章では、文学的用法として定義されてきたフランス語の不可算名詞の複数形を言語学的観点から再定義することを試みた。結論としては、不可算名詞の複数形が生産される場合には、種類、性質を含めて存在様態の多様化が行われているということが指摘できる。（第2章～第6章と同じように）本章で新たに明らかになった点は、不可算名詞の複数形の扱いは、数量的ではなくむしろ述語との関連で捉えるべきであるという新たな見方である。

日本語の畳語複数形に注目し、不可算名詞複数形と対照をすることにより、不可算名詞の複数形における種類、性質などの位置づけと役割についてより理解を深めることが可能となった。その結果、不可算名詞の複数形を、多様な存在様態の個別化を志向する多様化と再定義することになった。

フランス語には単複の文法的対立がある一方、日本語には単複の対立がないというのが一般的な「思い込み」であるが、日仏語対照研究で明らかになった点として、実際には、両語において、種類、性質などの対象の質的複数化という同様のメカニズムが観察されるということである。

結論

本論文の主な結論として述べたいのは、フランス語における名詞複数形の意味と用法は可算ベースではない、という名詞複数形に対する新たな見解である。まず、本論文での試みの全容を大まかに概観すると、次のようになる。始めに第 1 章で、名詞複数形の意味と用法の説明として一般的に挙げられてきた「複数性」概念は、可算ベースの数量的概念であることを説明してから、これに基づき、第 2 章以降は、フランス語における不可算の名詞複数形の例をまとめて検討していくという形式をとった。したがって、第 2 章では、不定名詞句単数形と複数形との使い分けに焦点を当て、また、続く第 3 章から第 6 章にかけては定名詞句単数形と複数形との使い分けへの複数性概念の不適切性を指摘した。最後に、第 7 章では、不可算名詞の複数形についても検討し、フランス語の名詞複数形と可算性との間には関連性がないことを確かめることを試みた。

そこで、本論文の主張について改めてまとめてみることにしたい。前述の例示と分析からは、可算ベースでないフランス語の名詞複数形の一見矛盾的に見えるこの振る舞いは一体何故だろうか、という疑問が当然のことながら出てくる。これに対する本論文での検討と分析を通じて、この振る舞いは以下の二点によって説明可能であることを改めて提示したい。

(i) まず、フランス語における名詞複数形の選択は、指示対象の心的表示 (*représentation mentale*) の問題である、という点である。本論文で見てきたように、名詞複数形が用いられた場合、名詞複数形の指示対象は「指示対象 A / 指示対象 B / 指示対象 C」のような多様性の意味をとる。本論文ではその多様性の意味を「指

示カテゴリー」と呼ぶことにした。フランス語において、その指示カテゴリーの意味が現れることができるのは、以下の三つの場合である。

一つは、*deux femmes*（二人の女性）というような「数字＋名詞複数形」の場合である。その場合、「指示対象 A／指示対象 B」のように、指示カテゴリーは数量的に限定され、問題とされるのは指示カテゴリーの計算である。その計算は、特定のものである場合と（*Il y a deux femmes chez moi.* うちには二人の女性がいる。）非特定のなものである場合（*Dans l’Islam, les hommes peuvent avoir deux femmes.* イスラム教において男性は二人の妻を持つことができる。）とがある。

もう一つは、*des femmes* というような「不定名詞句複数形」が挙げられる。その場合、問題とされるのは、指示カテゴリーの存在のみである。この場合も、特定のな存在（*Il y a des femmes chez moi.* うちには女性がいる。）あるいは非特定のな存在（*Des femmes auraient très bien pu écrire cela.* 女性がこれを書いてもおかしくなかった。）のいずれもが可能である。

最後に挙げられるのは、*les femmes* というような「定名詞句複数形」の場合である。その場合、問題とされるのは、指示カテゴリーの存在のみである。今回は、指示カテゴリーの定義が問題とされる。この場合もまた、特定のな定義（*Les femmes là-bas ont l’air de s’ennuyer.* あそこの女性はずまらない顔がしている。）あるいは非特定のな定義（*Les femmes sont bavardes.* 女性はおしゃべりだ。）の両方の可能性がある。

(ii) そして、第二点目は指示対象の表示は名詞の範囲だけではなくより広い叙述の範囲の中で成立している、というものである。このように、以上に提示した「指示カテゴリーの計算」、「指示カテゴリーの存在」、「指示カテゴリーの定義」という三つの表示は、（述語の振る舞いを含めた）文全体レベルにおいて現れる叙述

の違いによって決定されてくる。第 2 章では、(2-10a) などのように指示カテゴリーの存在を前提とする叙述の具体的な例を見てから、第 3 章から第 6 章にかけて、指示カテゴリーの定義を前提とする叙述の例についても検討してきた。指示カテゴリーとして定義できる叙述としては、(3-1a) のような普遍的な一般化 (第 3 章)、(4-2) のようなプロトタイプ的一般化 (第 4 章)、(5-2) のようなプロトタイプの属性化 (第 5 章)、(6-24c) のようなプロトタイプの凝結化 (第 6 章) を行う叙述の例を挙げた。

そこで、従来、文法学者によって、名詞概念として定義されてきたフランス語の名詞複数形の説明には、(指示カテゴリーの計算、存在、定義を前提とする) 叙述の役割という視点を導入する必要があることから考えてみると、可算性を名詞概念のみの問題としてしまうことは、本論文にて新たに叙述との関連で再定義してきた名詞複数形の意味と用法の説明には不適切なものであることも明らかにすることができる。

参考文献

- Acquaviva, P. (2008) *Lexical plurals. A Morphosemantic Approach*, Oxford, Oxford University Press.
- Allen, W. (1980) *Side effects*, Random House. (堤雅久・芹沢のえ訳 (1981), 『ぼくの副作用』CBSソニー出版.)
- Booij, G. (1994) “Against split morphology”, *Yearbook of Morphology* 1993, Dordrecht, Kluwer, pp. 27-49.
- Booij, G. (1996) “Inherent versus contextual inflection and the split morphology hypothesis”, *Yearbook of Morphology* 1995, Dordrecht, Kluwer, pp. 1-16.
- Carvalho, P. de (1970) *Recherches sur la catégorie du nombre en latin. Le pluriel poétique*, Thèse de 3ème cycle, Université de Bordeaux.
- Carvalho, P. de (1993) « Sur la grammaire du genre en latin », *Evphrosyne, Revista de Filologia Clássica* 21, pp. 69-104.
- Carvalho, P. de (2006) « Esquisse d’une morphosyntaxe du nombre grammatical », *Cahiers de Grammaire* 30, pp. 117-127.
- Colombat, B. (1993) « Remarques sur le développement de la notion de personne dans l’histoire de la linguistique », *Faits de langues* 3, pp. 15-27.
- Cohen, M. (1950) *Regards sur la langue française*, Paris, Sedes.
- Corbett, G. (2000) *Number*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Corblin, F. (1995) *Les formes de reprise dans le discours – anaphore et chaîne de référence*, Rennes, Presses Universitaires de Rennes.
- Corblin, F. (2011) « Des définis para-intensionnels : être à l’hôpital, aller à l’école », *Langue française* 171, pp. 55-75.

- Curat, H. (1988) « Pluriel interne et système morphologique du nombre en français », *Revue québécoise de linguistique* 17, pp. 29-52.
- Damourette, J. & Pichon, E. (1911-1940) *Des mots à la pensée. Essai de grammaire de la langue française*, Paris, D'Artray.
- Danjou-Flaux, N. (1991) « L'antonomase du nom propre ou la mémoire du référent », *Langue française* 92, pp. 26-45.
- Danon-Boileau, L. (1993) « Le pluriel dans l'ensemble des opérations constitutives de l'énoncé : dénombrement, pluriel, singulier », *Faits de langues* 2, pp. 117-130.
- David, S. (2002) "Linguistic Expressions for Odors in French", *Olfaction, Taste, and Cognition*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 82-99.
- Donnellan, K. (1971) "Reference and definite descriptions", *Semantics. An interdisciplinary reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 100-114.
- Dubois, J. et al. (1973) *Dictionnaire de linguistique*, Paris, Larousse. (伊藤晃・他編訳 (1980), 『ラルールス言語学用語辞典』大修館書店.)
- Ducrot, O. (1972) *Dire et ne pas dire*, Paris, Hermann.
- Franckel, J.-J. (2004) « Sentir / sens », *Linx* 50, pp. 103-134.
- Furukawa, N. (1977) *Le nombre grammatical en français contemporain*, Tokyo, France Tosho.
- Furukawa, N. (2006) « Ça sent l'heureux papa : à propos de l'expression nominale après le verbe sentir », *Aux carrefours du sens, Hommages offerts à Georges Kleiber*, Louvain, Peeters, pp. 221-232.

- Furukawa, N. (2010) « L'article défini et le problème dit de l'unicité : quantité ou qualité? », *Bulletin d'Études de Linguistique Française* 44, pp. 65-82.
- Gleason, H.-A. (1955) *An Introduction to Descriptive Linguistics (Revised Edition)*, New York, Holt, Rinehart and Winston.
- Gross, M. (1993) « Les phrases figées en français », *L'Information Grammaticale* 59, pp. 36-41.
- Gross, M. (1998) « La fonction sémantique des verbes supports », *Travaux de Linguistique* 37, pp. 25-46.
- Guillaume, G. (1991 [1945]) « Leçon du 7 juin 1945, série B », *Leçons de linguistique de Gustave Guillaume 1944-1945, série A et B*, Québec/Lille, Presses de l'Université Laval et Presses universitaires de Lille, pp. 201-210.
- Harris, Z. (1964) "Elementary Transformations", *Papers in Structural and Transformational Linguistics* (1970) , Dordrecht, Reidel, pp. 482-532.
- Jespersen, O. (1913) *A modern English grammar*, London, Allen & Unwin.
- Jespersen, O. (1924) *The philosophy of grammar*, London, Allen & Unwin.
- Joly, A. (1986) « La détermination nominale et la querelle des universels », *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Paris, Klincksieck, pp. 113-133.
- Kaplan, D. (1989) "Demonstratives", *Themes from Kaplan*, Oxford, Oxford University Press, pp. 481-463.
- Kleiber, G. (1977) « Sur le statut sémantico-logique du verbe *exister* », *Travaux de Linguistique et de Littérature* 15-1, pp. 317-336.
- Kleiber, G. (1981) *Problèmes de référence, descriptions définies et noms propres*, Paris, Klincksieck.

- Kleiber, G. (1983) « Article défini, théorie de la localisation et présupposition existentielle », *Langue Française* 57, pp. 88-106.
- Kleiber, G. (1987) « Le compte-rendu de Furukawa (1986) », *Revue de linguistique romane* 51, pp. 243-246.
- Kleiber, G. (1989) « Référence, texte et embrayeurs », *Semen* 4, pp. 13-50.
- Kleiber, G. (1990) *L'article LE générique. La généricité sur le mode massif*, Genève, Droz.
- Kleiber, G. (1998) « Au générique : tout ça pour ça », *Recherches en Linguistique et Psychologie cognitive* 9, pp. 195-231.
- Kleiber, G. & Lazzaro, H. (1987) « Qu'est-ce qu'un SN générique ?, ou Les carottes qui poussent ici sont plus grosses que les autres », *Rencontres avec la généricité*, Paris, Klincksieck, pp. 73-111.
- Krifka, M. (1987) *An outline of genericity*, SNS-Bericht, University of Tübingen.
- Lakoff, G. (1987) *Women, fire and dangerous things: What categories tell us about the nature of thought*, Chicago, University of Chicago Press.
- Langacker, R. (1987) "Nouns and verbs", *Language* 63, pp. 53-94.
- Laparra, M. (1988) « La pêche au goujon : massif ou comptable », *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck, pp. 159-168.
- Léard, J.-M. (1987) « Quelques aspects morpho-syntaxiques des syntagmes et des phrases génériques », *Rencontre (s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck, pp. 133-156.
- Leeman, D. (2004) *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Collection Linguistique nouvelle, PUF.
- Léon, P.-R. et al. (1989) *Structure du français moderne: introduction à l'analyse linguistique*, Toronto, Canadian Scholars' Press.

- Lucy, J. (1992) *Language diversity and thought*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Maillard, M. (1987) « Un zizi, ça sert à faire pipi debout. Les références génériques de *ça* en grammaire de phrase », *Rencontres avec la généricité*, Paris, Klincksieck, pp. 158-206.
- Maillard, M. (1989) *Comment ÇA fonctionne*, Thèse de Doctorat d'État, Université de Paris X.
- Marque-Pucheu, C. (2008) « La couleur des prépositions *à* et *de* », *Langue française* 157, pp. 74-105.
- Martin, R. (1989) « La référence « massive » des unités nominales », *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck, pp. 37-46.
- Milner, J.-C. (1976) « Réflexions sur la référence », *Langue française* 30, pp. 63-73.
- Mounin, G. (1974) *Dictionnaire de la linguistique*, Paris, PUF.
- Pears, D.-F. (1967) “Is Existence a Predicate ?”, *Philosophical Logic*, Oxford, Oxford University Press, pp. 103-106.
- Picoche, J. (1986) *Structures sémantiques du lexique français*, Paris, Nathan.
- Quirk R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London, Longman.
- Renaud, F. (2005) *Temps, durativité, télicité*, Paris, Peeters.
- Riegel, M. (1985) *L'adjectif attribut*, Paris, PUF.
- Russell, B. (1905) “On denoting”, *Mind* 14, pp. 479–493.
- Searle, J.-R. (1972) *Les Actes de langage*, Paris, Hermann.
- Slakta, D. (1969) « Les problèmes du lexique à la lumière de thèses et de travaux récents », *Langue française* 2, pp. 87-103.
- Sten, H. (1949) « Le nombre grammatical », *Travaux du Cercle linguistique de Copenhague* 5, pp. 47-59.

- Theissen, A. (2011) « *Sentir: les constructions prédicatives de l'olfaction* », *Langages* 181, pp. 109-125.
- Valli, A. (2007) « À propos de la notion de locution verbale: Examen de quelques constructions à verbe support en moyen français », *Langue française* 156, pp. 45-60.
- Wilmet, M. (1983) « La détermination en français. Essai de synthèse », *Langue française* 57, pp. 15-33.
- Wilmet, M. (1998) *Grammaire critique du français*, Bruxelles/Paris, Duculot.
- 池上嘉彦著 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社.
- 小田涼 (2007) 「定名詞句のいわゆる直示的用法について」『フランス語フランス文学研究』 90, pp. 139-153.
- 小田涼 (2012) 『認知と指示 定冠詞の意味論』 京都大学学術出版社.
- 唐須教光 (1992) 「言語学的説明再考—日本語の畳語を例として」 慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』 60, pp. 123-135.
- 國廣哲弥 (1980) 「総説」『日英語比較講座』 2, pp. 1-22.
- 小早川暁 (2004) 「日本語の複数表現—「それらの+名詞」と畳語名詞」 人間環境大学編集委員会編『こころとことば』 3, pp. 35-50.
- 佐竹秀雄 (2002) 「日本語に複数形ありますか」『日本語学』 21-4, pp. 170-171.
- 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の「現場指示的用法」について」『京都大学総合人間学部紀要』 8, pp. 1-17.
- 東郷雄二 (2002) 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」『京都大学総合人間学部紀要』 9, pp. 1-18.
- 東郷雄二 (2009) 「談話モデルと指示」『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』 基盤研究 (c) 研究成果報告書.

- 早川治 (1990) 「日本語の畳語名詞の意味についての一考察」『Sophia International Review』12, pp. 9-18.
- 古川直世 (1988) 「属詞の位置に置ける複合名詞句の指示性について」『Studies in language and literature』14, pp. 17-36.
- 古川直世 (2005) 「フランス語における定冠詞の内包指示用法について」『フランス語学研究的の現在』白水社, pp. 75-94.
- プヨ・バティスト (2010) 「数の概念に関する日仏対照研究」『筑波大学フランス語・フランス語学論集』25, pp. 73-94.
- プヨ・バティスト (2011) 「日本語における数の概念の一考察-日本語の畳語複数について」『筑波大学フランス語・フランス語学論集』26, pp. 39-59.
- プヨ・バティスト (2012) 「数の概念に関する一日仏対照研究-日本語における畳語形オノマトペ副詞およびフランス語の対応表現について」『筑波大学フランス語・フランス語学論集』27, pp. 97-111.
- プヨ・バティスト (2015) 「Sur l'emploi dit poétique du pluriel massif eaux en français」『筑波大学フランス語・フランス語学論集』30, pp. 73-83.
- プヨ・バティスト (2016a) 「フランス語の定冠詞 le と定冠詞 les における数的相関性について」日本ロマンス語学会誌『ロマンス語研究』49, pp. 11-20.
- プヨ・バティスト (2016b) 「Les fantômes existent-ils ? — Une réponse linguistique」日本フランス語学会誌『フランス語学研究』50, pp. 63-84.
- プヨ・バティスト (2017) 「名詞の複数表現をめぐる日仏語対照研究」『フランス語学の最前線 第5巻』ひつじ書房, pp. 95-128.
- 松村睦枝 (1969) 「畳語の研究」『日本文學』32, pp. 59-78.

松本純一（2009）「日本語における畳語複数形の生成可能性について」『東洋学園
大学紀要』17, pp. 243-249.

『フランス語ハンドブック 改訂版』（1996）新倉俊一他, 白水社.

『広辞苑 第五版』（1998）新村出編, 岩波書店.

『現代フランス文法』（1955）田辺貞之助, 白水社.

例文出典

Balzac, H. de (2014 [1829]) *Les Chouans*, Arvensa éditions.

Chateaubriand, F.-R. de (2014 [1849]) *Mémoires d'Outre-tombe*, Arvensa éditions.

Flaubert, G. (2014 [1856]) *Madame Bovary*, Arvensa éditions.

Gautier, T. (1858) *Le Roman de la momie*, Hachette.

Proust, M. (2014 [1913]) *A la recherche du temps perdu*, Arvensa éditions.

Rousseau, J.-J. (2014 [1782]) *Les Confessions*, Arvensa éditions.

Saint-Exupéry, A. de (1996 [1943]) *Le Petit Prince*, Gallimard.

Tailhade, L. (2016 [1907]) *La noire idole*, Hachette.

Vatsyayana. (2015) *Le Kama Sutra*, Bookclassic.

Verne, J. (2014 [1865]) *De la Terre à la Lune*, Arvensa éditions.

Verne, J. (2014 [1865]) *Les Forceurs de blocus*, Arvensa éditions.

Verne, J. (2014 [1870]) *Vingt mille lieues sous les mers*. Arvensa éditions.

Verne, J. (2015 [1863]) *Cinq semaines en ballon*, Arvensa éditions.

Verne, J. (2016 [1872]) *Le tour du monde en quatre-vingts jours*, Ediciones 74.

Zola, E. (2014 [1891]) *L'argent*, Arvensa éditions.

本岡典子 (1996) 『ある夫婦のかたち』三五館.